

ふるさと秋津（あさひば）の歴史

第一編

文化財・伝承・地名

あ・秋津 校区

さ・桜木 校区

ひ・桜木東校区

ば・若葉 校区

監修のことば

松野 國策

この仲間が発足して一年、今その成果が出た。

初めどのような形で進めるかの検討をしたが、既刊の歴史書を参考にしながら、それに漏れているものを拾い上げようという事になった。

特に地域の年表を整える事が重要としてその面にも留意したので、従来のお国自慢的な郷土史からの脱皮としての鳥瞰図的な又客観的なものの新しい姿ではないかと思っている。

歴史書はそれぞれの時代の空気に従って、資料の取捨選択がなされているが、今回は探り得た資料の原形を可能な限り残して、次代の検討の資に附したいと考えている。

もともと古事記、日本書紀の昔から史書は大上段に振り被ったのが多く、庶民の息づかいが少ないのが特徴であるので、庶民的なものも又必要と考えていたので、この資料はその意味で底辺への眼差しで捕らえた気がする。

参考になれば幸いである。

はじめに 秋津地区 語り部学習会

監修のことば 松野國策

一 ふるさと秋津のすがた 4

二 文化財マップ 7

1 マップ一覧表 8

三 校區別文化財 11

三・一 秋津校区

〔考古遺跡〕

1 下津代里遺跡 11

2 沼山津貝塚 11

〔寺社〕

3 竹内神社 (たけのうち神社) 12

4 中無田熊野座神社 13

5 光輪寺 (かみの寺) 17

6 浄福寺 (しもの寺) 19

〔堂宇〕

7 妙見社 (妙見さん) 20

8 中津代里薬師堂 (堂ん前の観音さん) 21

9 下津代里稲荷社 22

10 鶯観音堂 22

11 野間薬師堂 25

12 新村の天満宮 25

〔石造物〕

水神さん 26

○中無田石塔水神 26

○中無田間島水神 28

○中無田野間橋際水神 29

○沼山津水神 31

○突井戸水神 32

地蔵群 33

○上津代里 外村組地蔵 34

○上津代里 内村組地蔵 35

○中津代里地蔵群 35

東小路地蔵 35

中小路地蔵 36

西小路地蔵 37

○中津代里 (光岡氏方) 地蔵 37

○下津代里 北村組地蔵 37

○下津代里 須崎組地蔵 38

○下津代里 彼岸花地蔵 (現存しない) 39

○中無田地蔵群 39

上の丁下組地蔵 39

上の丁上組地蔵 41

下の丁地蔵 42

○新村地蔵 43

新村の弘法大師 44

三宝大荒神 45

上津代里石造物 (酒井氏方) 46

59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
耕地整理記念碑	上田龍三郎先生（かみだりょうさん）の碑	秋田 校跡	沼山津校跡	沼山津村元標跡	秋田村元標跡	秋津村役場跡・秋津支所跡	鶯城跡	○突井戸	○沼山津堰跡	○鶯川の堰跡	○計路堰跡	○しんじゃ堀の堰跡	○秋田堰跡	新左衛門の墓と記念碑	○裏井手跡	○新左衛門堀（しんじゃ堀）跡	○万蔵堀（万蔵井手）跡	舟運の中心 間島	沼山津舟場跡	沼山津手永会所跡	四時軒跡	四時軒跡	小楠公園	光永家墓地	中津代里墓地と板碑群
69	68	67	67	66	66	64	63	63	62	62	61	60	59	57	56	56	55	54	54	51	51	50	48	47	46

60 圃場整備工事完成記念碑……………71

二二・一一 若葉校区……………73

1 西無田雨宮神社……………73
〔寺社〕

〔石造物〕
西無田地蔵群……………75

2 西無田馬頭観音等地蔵三体……………75

3 西無田馬頭観音・聖観音・地蔵の三体……………77

4 西無田間島地蔵……………78

水神さん……………78

5 西無田間島水神……………78

6 西無田水神……………79

二二・三 桜木校区……………

〔考古遺跡〕
1 沼山津遺跡……………82

〔寺社〕
2 沼山津神社……………83

〔史跡〕
3 昭和町桜並木（イセキ桜）……………84

4 東本町は三菱青年学校跡・井関農機工場跡……………85

57	秋田 校跡	57
58	上田龍三郎先生(かみだりようさん)の碑	68
59	耕地整理記念碑	69

三・四 桜木東校区

〔史跡〕

1	追分の石	87
2	花立往還(木山往還)	88

四 伝説・史伝

1	天神木	90
2	ゆやろきき(由屋浮木)の権現	90
3	西南戦争と秋田村	91
4	三藤孫四郎と秋田小学校建設	92
5	かみだりようさんの石油堀り	93
6	猫伏石	94
7	東野中学校の校名の由来	94

五 地名

五・一	村名・町名の移り変わり	95
五・二	字名	96
(1)	沼山津の字名	96
(2)	秋田の字名	97
五・三	字名の分類	99
(1)	類似地名による分類	99
(2)	形態地名による分類	100
五・四	呼び名	100
五・五	地名考察	101

六 ふるさとの人

六・一	秋津小学校出身者	103
六・二	歴史上の人物	106

七 付図

七・一	文化財マップ	110
七・二	昭和60年代初期の秋津の地図	111
七・三	西南戦争関係図	112
七・四	秋津水田旧水路遺跡図	113
七・五	字図——沼山津村	114
七・六	字図——秋田村	115
七・七	呼び名図——沼山津・桜木地区	116
七・八	呼び名図——秋田地区	117

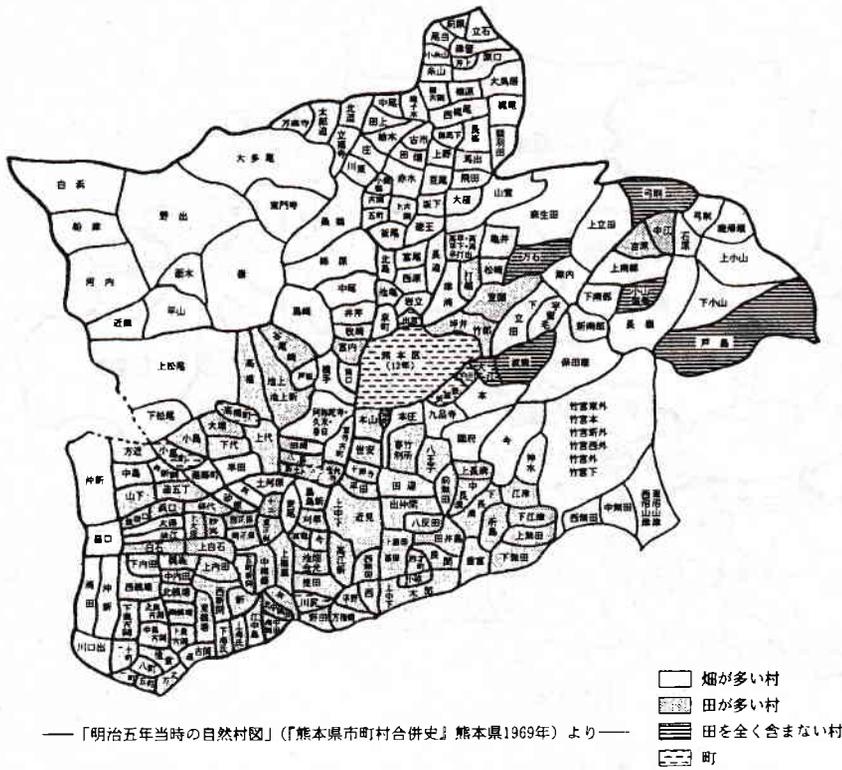


図 3・01 明治5年当時のムラムラ

「ふるさと秋津(あ・さ・ひ・ば)のすがた」

わたしたちのふるさと秋津地区(あ・さ・ひ・ば)は、熊本市の東部、健軍台地の南端にあり、東は益城町広崎、西は一部江津湖にのぞみ、南は益城町島田、一部は嘉島町に接していた。

地勢は、西北から北にかけては託麻原に連なり、阿蘇外輪の裾がなだらかに、北から南にのびた台地で、やがて秋津川に落ちている。台地は、阿蘇火山の噴出物におおわれているため、地表下は火山礫・灰石などで、水が浸透しやすく、従って地下水は深く台地(畑地)の井戸掘削は困難である。

台地は畑作地で、秋津川沿いには、東より沼山津・中無田・西無田の孤立した集落が形成され畑地の面積は、かつては三〇〇㏊余りあったが、区画整理による宅地化のため残された面積も、現在では五〇㏊余りと聞く。

秋津川の左岸は、沖積地で低地の水田であり、更に南に木山川・矢形川が西流し、これらの河川が地域の西端で合流して加勢川となる。

標高は、台地の北端小峰(小峯・小嶺)付近で四十七㏎と案外高く、沼山津貝原で五・五㏎、秋津川の水面からの高さは通常二㏎で、海岸線とは一五・五㏎の隔たりで、水田と基盤圃場整備がなされたとは言え、立地的にいかに低地帯であるかが窺われる。

県の特徴として、寒暖の差が大きく、内陸性気候を示し、夏の暑さ、冬の寒さ、ともに厳しく、八月の最高気温の月平均は、三二・六度にも及ぶ。一月の最低気温の月平均は、〇・三度である。年降水量は、一九八ミリ、年平均気温は、一六・六度である。

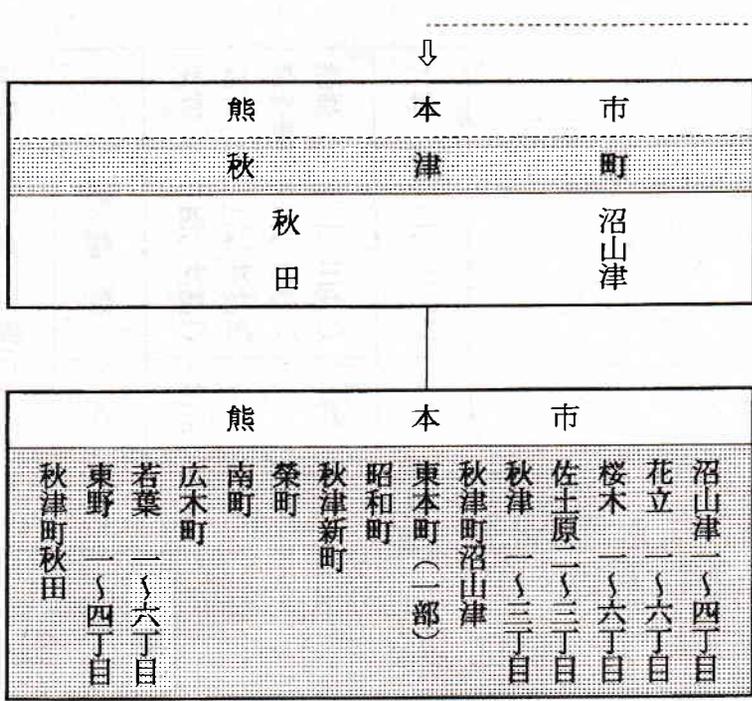
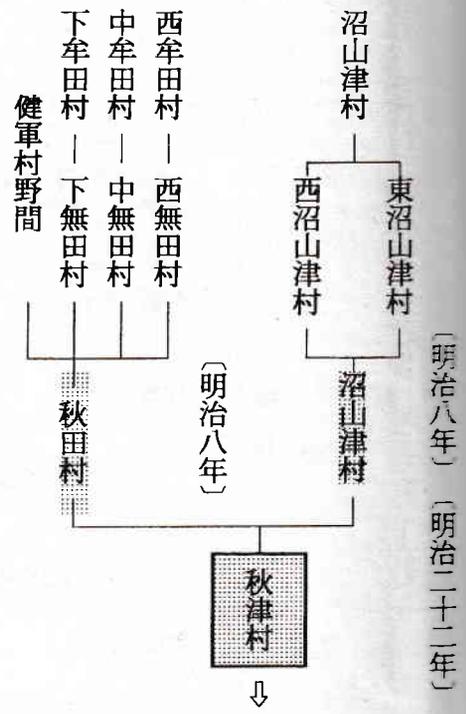
秋津地区(あ・さ・ひ・ば)は、『秋津・桜木・桜木東・若葉』の四校区で成立しており、その区域は、現在の町界名では

『熊本市沼山津一〜四丁目・花立一〜六丁目・桜木一〜六丁目・秋津一〜三丁目・

佐土原二〜三丁目・若葉一〜六丁目・東野一〜四丁目・秋津町秋田・秋津町沼山津・

昭和町・秋津新町・栄町・南町・広木町・東本町(一部)』であり、これは

明治二十二年(一八八九)成立の『上益城郡秋津村』の村域であり、昭和二十九年(一



特産は蔬菜で、特に白菜・大根が多く、またスイカは北九州にまで声価を馳せた。
 昭和十七年(一九四二)熊本市健軍町に三菱重工株式会社熊本航空機製作所が設立され、それにとまって宿舍の一部(社宅・独身寮)と技能者養成の三菱熊本青年学校が

〔明治八年〕 〔明治二十二年〕

昭和十八年(一九四三)当村に建設され、純農村が一大変貌する要因となる。
 同二十年(一九四五)西隣の健軍町まで熊本市電健軍線が開通し、戦後は熊本市周辺の住宅地化が進む。

明治二十四年(一八八七)の戸数・人口は 四三九戸・二二三五人(男一一〇五・女一三三〇) 世帯数・人口は大正九年 (一九二〇) 四六五戸・二四五八人

昭和十年 (一九三五) 五二二戸・二八八九人
 昭和二十五年(一九五〇) 八四六戸・四四一七人と戦後倍増する

昭和二十七年(一九五二)四月に、住民の変則状態解消のため、秋津村大字秋田の一部が熊本市に編入。次いで昭和二十九年(一九五四)十月には、秋津村が熊本市に編入され、熊本市秋津町となり、村制時の大字は秋津町を冠称し同市の町名に継承。即ち秋津町沼山津と秋津町秋田となり、同年熊本市役所秋津支所設置。

熊本市の東部発展に伴い、漸次開発が進む。一部が昭和三十一年(一九五六)栄町・東本町・南町・若葉町。 同三十四年(一九五九)昭和町・秋津新町・東原町。

同四十一年(一九六六)東野一〜四丁目。 同四十五年(一九七〇)花立一〜四丁目・桜木一〜四丁目・沼山津一〜三丁目。 同四十八年(一九七三)若葉一〜六丁目・広木町。

同五十六年(一九八一)昭和町・花立一〜四丁目となる。
 町名町界変更で同六十三年(一九八八)東野一〜四丁目・秋津一〜三丁目。

平成元年(一九八九)秋津新町・東本町・昭和町・花立一〜六丁目・桜木一〜六丁目。
 同四年(一九九二)東本町・佐土原一〜三丁目が実施される。

秋津町秋田と秋津町沼山津は、秋津川以南の水田地帯の町名としてその名を留めているに過ぎない。

昭和三十八年(一九六三)以後現主要地方道熊本高森線が二メートルに拡幅され、健軍秋津地方の主要道路となり、沿線に商店・事業所が立ち並ぶ。

昭和三十七年(一九六二)若葉小学校・東野中学校新設。昭和四十二年(一九六七)小楠公園設置。昭和四十六年(一九七一)桜木小学校新設。

昭和五十七年(一九八二)四時軒復元・横井小楠記念館開館など、小楠関係施設が整備された。

昭和六十年(一九八五)秋津市民センター開設。平成元年(一九八九)秋津小学校百周年記念行事が行われる。

平成一四年二月一日現在

	世帯数	人口
秋津	四、九四〇	一三、一七九
桜木	二、九九四	七、七七三
桜木東	二、〇〇八	五、六二〇
若葉	二、三八〇	五、四九〇
計	一二、三三二	三三、〇六二

平成六年（一九九四）桜木中学校開校。十六年に及ぶ圃場整備事業終結。
平成十年（一九九八）桜木東小学校開校。

わたしたちのふるさと秋津地区（あ・さ・ひ・ば）は、戦中の三菱熊本の建設が一大転機となり、健軍と共に戦後半世紀の間に人口七倍強と大きく変貌し、発展してきた。しかし、それは永年にわたる先人達の血のにじむような水害との戦いの上に成り立っていることを忘れてはならない。

その秋津地区は、現在世帯数一万二千三百二十二戸・人口三万二千六十二人（平成十四年二月一日現在）の人々が住む町となっている。

（秋津小百周年記念誌 秋津の歴史・秋津村略史・角川日本地名大辞典 四三熊本県

追記 語りべ学習会）

二・文化財マップ

秋津地区の、考古遺跡3ヶ所・寺社六ヶ所・堂宇七ヶ所・水神や地蔵等の石造物が二十ヶ所・史跡が二十九ヶ所・計七十二ヶ所を紹介する。

校区別には、当然母なる校区である秋津校区に八割強が集中している。秋津校区六十ヶ所若葉校区六ヶ所・桜木校区四ヶ所・桜木東校区二ヶ所の分布となる。

校区別分布状況は次表の通り。詳細は次ページのマップ一覧表を参照のこと。

合計	桜木東校区	桜木校区	若葉校区	秋津校区	石造物			史跡	合計
					遺跡	寺社	堂宇		
3		1		2					
6		1	1	4					
7				7					
7			2	5	水神				
17			3	14	地蔵				
3				3	他				
29	2	2		25					
72	2	4	6	60					

1. マップ一覧表

分類	番号	名称	所在地	校区	頁
考古遺跡	1	沼山津遺跡	沼山津2丁目～桜木2丁目	桜木校区	81
	2	下津代里遺跡	沼山津1丁目	秋津校区	11
	3	沼山津貝塚	秋津3丁目17-1 (1387番地) (秋津浄化センター内)	〃	11
寺社	11	沼山津神社	桜木2丁目16 (757番地)	桜木校区	82
	12	竹内神社	沼山津4丁目2	秋津校区	12
	13	光輪寺(上の寺)	沼山津4丁目8-7	〃	17
	16	浄福寺(下の寺)	沼山津3丁目8-55	〃	19
	19	中無田熊野座神社	秋津3丁目4-38 (1864番地)	〃	13
	22	西無田雨宮神社	若葉6丁目1-20 (1051番地)	若葉校区	73
堂宇	14	妙見社(妙見さん)	沼山津4丁目5-45	秋津校区	20
	15	中津代里薬師堂 (堂ん前の観音さん)	沼山津3丁目10	〃	21
	17	下津代里稲荷社	沼山津2丁目14 (1620番地)	〃	22
	18	鶯観音堂	秋津3丁目2	〃	22
	20	野間薬師堂	秋津1丁目1-74	〃	25
	21	新村の天満宮	東野1丁目3-77	〃	25
	62	三宝大荒神	沼山津4丁目5-25の東側	〃	45
石造物	31	突井戸水神	秋津町沼山津 (上沼山津橋上流)	〃	32
	32	沼山津水神	秋津町沼山津 (沼山津橋上流)	〃	31
	33	中無田石塔水神	秋津町秋田字計路 (鉄塔脇)	〃	26
	34	中無田間島水神	秋津町秋田字月の輪 (水門脇)	〃	28
	35	西無田間島水神	秋津町秋田(秋津・木山川の合流点)	若葉校区	78
	36	中無田野間橋際水神	秋津町秋田字前塘の元 (野間橋)	秋津校区	29
	37	西無田水神	秋津町秋田字筏場	若葉校区	79
	41	上津代里 外村組地藏	沼山津4丁目6-60	秋津校区	34
	42	上津代里 内村組地藏	沼山津4丁目7	〃	35
	43	中津代里 東小路地藏	沼山津3丁目11-1	〃	35
	44	中津代里 光岡氏方地藏	沼山津3丁目9-37	〃	37

合計	桜木東校区
3	
6	
7	
7	
17	
3	
29	2
72	2

頁
83
63
62
67
66
69
59
57
60
56
61
54
56
56
71
63
62

分類	番号	名称	所在地	備考	頁	
石造物	45	中津代里 中小路地藏	沼山津3丁目13-7	秋津校区	36	
	46	中津代里 西小路地藏	沼山津3丁目14-11	"	37	
	47	下津代里 北村組地藏	沼山津2丁目14-48(1608番)	"	37	
	48	" 須崎組地藏	沼山津1丁目25-77(1649番)	"	38	
	49	中無田 上の丁下組地藏	秋津3丁目 2-58	"	39	
	50	" 上の丁上組地藏	秋津2丁目14-24	"	41	
	51	" 下の丁 地藏	秋津2丁目12-32	"	42	
	52	新村地藏	東野1丁目19-32	"	43	
	53	西無田・間島地藏	若葉5丁目 4-50	若葉校区	78	
	61	上津代里石造物	沼山津4丁目5-46(酒井氏方)	秋津校区	46	
	63	光永家墓地	沼山津3丁目10	"	47	
	"	中津代里墓地と板碑群	"	"	46	
	64	下津代里 彼岸花地藏	沼山津3丁目17-1 (秋津浄化センター内)	現存しない	39	
	65	新村的弘法大師	秋津新町4 (水玉公園内)	秋津校区	65	
	66	西無田馬頭観音・聖観音・ 地藏の三体	若葉6丁目 2-53(神社側)	若葉校区	77	
	67	" 馬頭観音等地蔵三体	若葉6丁目 6-46(東側)	"	75	
	史跡	71	四時軒(市指定有形文化財)	沼山津1丁目25-91	秋津校区	50
		71	四時軒跡(市指定史跡)	"	"	51
		72	秋津村役場跡・秋津支所跡	沼山津2丁目 (1517-1番地)	"	64
73		沼山津手永会所跡	沼山津3丁目10-87の隣	"	51	
74		沼山津村元標跡	沼山津3丁目13-7 (1771番地堂床前)	"	66	
75		沼山津校跡	沼山津3丁目11-43 (上田氏宅)	"	67	
76		沼山津舟場跡	秋津町沼山津	"	54	
77		上田龍三郎先生の碑	沼山津3丁目4-33	"	68	
78		小橋公園	沼山津4丁目11番地	"	48	
79		追分石	桜木4丁目19	桜木東校区	87	
80		花立往還(木山往還)		"	88	
81		三菱青年学校跡・ 井関農機工場跡	東本町	桜木校区	84	

分類	番号	名称	所在地	備考	頁
史跡	82	昭和町桜並木(伊姓桜)	昭和町	桜木校区	83
	83	鷺城跡	秋津3丁目 (中無田吉住氏宅)	秋津校区	63
	84	鷺川の堰跡		〃	62
	85	秋田校跡	秋津1丁目2番付近(字野間原)	〃	67
	86	秋田村元標跡	秋津1丁目2-20(2046番地)	〃	66
	87	耕地整理記念碑	秋津町秋田 (中無田橋際)	〃	69
	88	秋田堰跡	秋津町秋田	〃	59
	89	新左衛門の墓と記念碑	秋津町秋田(県道六嘉秋津新町線沿い)	〃	57
	90	しんじゃ堀の堰跡	〃	〃	60
	91	新左衛門堀(しんじゃ堀)跡	〃 (水田内)	〃	56
	92	計路堰跡	〃	〃	61
	93	舟運の中心 間島	〃	〃	54
	94	万蔵堀(万蔵井手)跡	秋津町沼山津 (水田内)	〃	56
	95	裏井手跡	秋津町秋田 (水田内)	〃	56
	96	圃場整備記念碑	秋津町沼山津3101-1 (土地改良区内)	〃	71
	97	突井戸跡	秋津町沼山津	〃	63
		沼山津堰跡	益城町福富地内		62

分類
石造物

史跡

2 マップ 付図7・1参照

(出所) 新熊本市史通史1巻

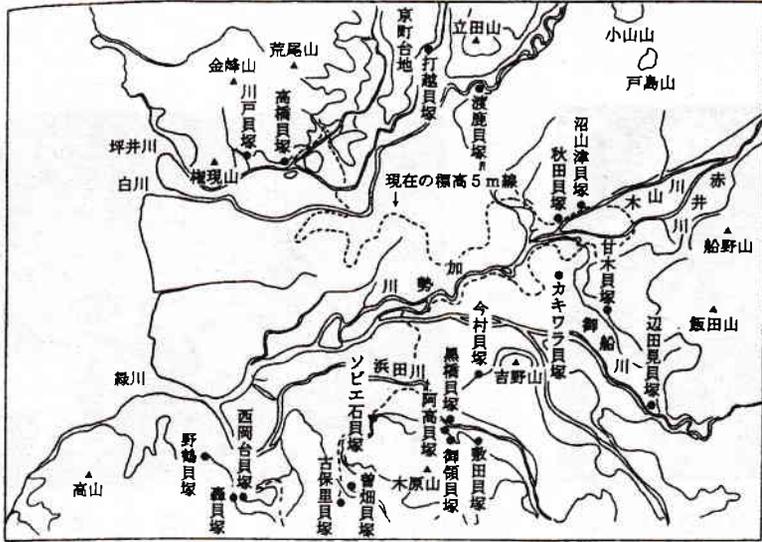


図 3・03 熊本平野の貝塚分布

三 校区別文化財・史跡

三・一 秋津校区

わたしたちのふるさと秋津校区は、秋津地区(秋津・若葉・桜木・桜木東校区)の母なる校区である。

藩政時代より秋津川沿いの台地上に形成されていた沼山津・中無田・下無田(新村)の三集落を基幹として熊本市の東部発展に伴い、漸次開発都市化が進んでいる所である。

校区は、「秋津一〜三丁目・東野一〜四丁目・沼山津一〜四丁目・秋津新町・秋津町秋田の全域と若葉二丁目の一部」を範囲とし、世帯数四千九百四十戸・人口一万三千百七十九人(平成十四年二月一日現在)である。

〔考古遺跡〕

- 1 下津代里遺跡 (マップ番号 2)

所在地 熊本市沼山津二丁目

熊本市の遺跡地図には範囲が示されている。しかし熊本市史にも弥生時代の遺跡と記されているのみでそれ以上の記述はない。

- 2 沼山津貝塚 (マップ番号 3)

所在地 熊本市秋津三丁目一七〇一(一三八七番地)

貝塚の南面には秋津川が流れ、水面からの高さは二桁余である。

(出所 新熊本市史通史1巻)

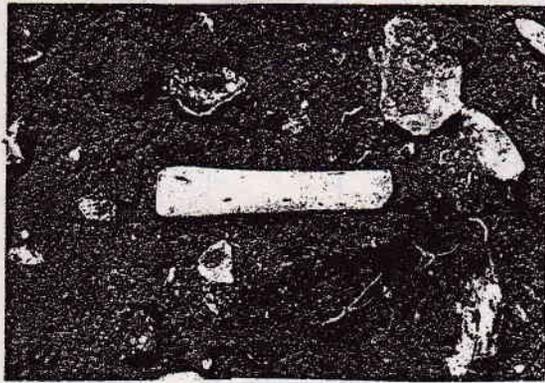


写真3 0骨 2製 へ 沼の 山の 津出 貝土 塚状 熊

(昭和43年)



写真3 0 1 沼 山発 津掘 貝調 塚査 風景

貝塚の標高は約五・五メートルで、現在の海岸線(有明海)とは一五・五メートル隔たり、典型的な縄文海進期の貝塚である。

当貝塚は昔から「貝原(きゃあばる)」との字名で「此の地一二尺を掘れば貝殻を出さざるなし。蓋し往時この辺一帯人海なりしならんか」と云われ、又昭和五年(一九三〇)秋津小学校南側の畑を切り下げ、耕地整理中に無数の石斧が出たことが知られている。このように昭和初年から存在が知られていたが、その後所在は忘れられていた。

昭和四十三年(一九六八)秋津浄化センターの貯水槽拡張工事に伴う事前調査により、一部発掘が行われ、縄文中期より後期前半までを主体とする遺跡であることが確認され、十歳くらいの埋葬された小児人骨も発掘された。(北枕、西向き屈葬、上に石)なお貝塚は同四十二年客土によって覆土され、全貌を知ることが出来ない。

自然遺物はハマグリが主体で、カキ及びヤマトシジミがそれに次ぎ、若干のバイガイと獸片を見た。主な出土品は次の通り

出土土器

「阿高式・並木式・南福寺式・出水式・御手洗A式・鐘ヶ崎式・北久根山式」など縄文中期初頭から晩期初頭の阿高式系や鐘ヶ崎式系の縄文土器

土製品

土錘(石のおもり)

石器

石鏃(やじり)・石匙(石のナイフ)・磨石(木の実などをすりつぶす石)・石皿・凹石

骨角器

骨製のへら

周辺の阿高式系の土器を出す遺跡としては熊本市江津湖遺跡・熊高敷地内・下益城郡城南町阿高貝塚などを挙げることができる。

また、縄文後期前半の鐘ヶ崎式土器を伴う周辺の貝塚には上益城郡嘉島町カキワラ貝塚、同郡御船町甘木貝塚などがあり、縄文海進の線をたどる貴重な遺跡とみてよい。

(日本歴史地名体系 熊本県の地名・熊本市東部文化財調査報告書)

〔土寸社〕

3 竹内神社 (マップ番号 12)

鎮座地 熊本市沼山津四丁目一番 (上津代里)

鎮座地 熊本市沼山津四丁目二番 (上津代里)

祭神 少彦名神

県道木山線と小池竜田線の交差点から南へ折れると、まもなく東入小路の奥にある。
(沼山津神社を南へ約百五十竈) もと「年彌社」と呼ばれていたが、明治以降「竹内
(たけのうち)神社」と呼ばれるに至ったものである。

社殿は、二間四方妻入りの拝殿と二間四方平入りの神殿を組合わせてある。屋根は瓦葺
きで、瓦の紋は違い鷹の羽である。

拝殿には明治二十年(一八八七)の社殿造営の寄附付けがあり、絵馬も同年以降のものば
かりで、明治二十年の造営で面目を一新したようである。

本社は牛馬の神として、農家の信仰が厚く、奉納された絵馬すべて馬の絵である。時代
の移り変わりで、さびれて何枚かは失われている。

拝殿左の手水鉢は凝灰岩製で、「天保八年(一八三七)当村若者中」の銘がある。
社殿右には、周囲四・七竈の榎の大木が往時を偲ぶかのように生い茂っている。

別名「馬ん神さん」とも呼ぶ。

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史)

4 中無田熊野座神社 (マップ番号 19)

鎮座地 熊本市秋津三丁目四番三八号(一八六四番地) (上丁)

祭神 伊奘諾尊

伊奘册尊

速玉男之神

注記

竹内神社は、平成に入って改築されており、
右の写真は改築後である。

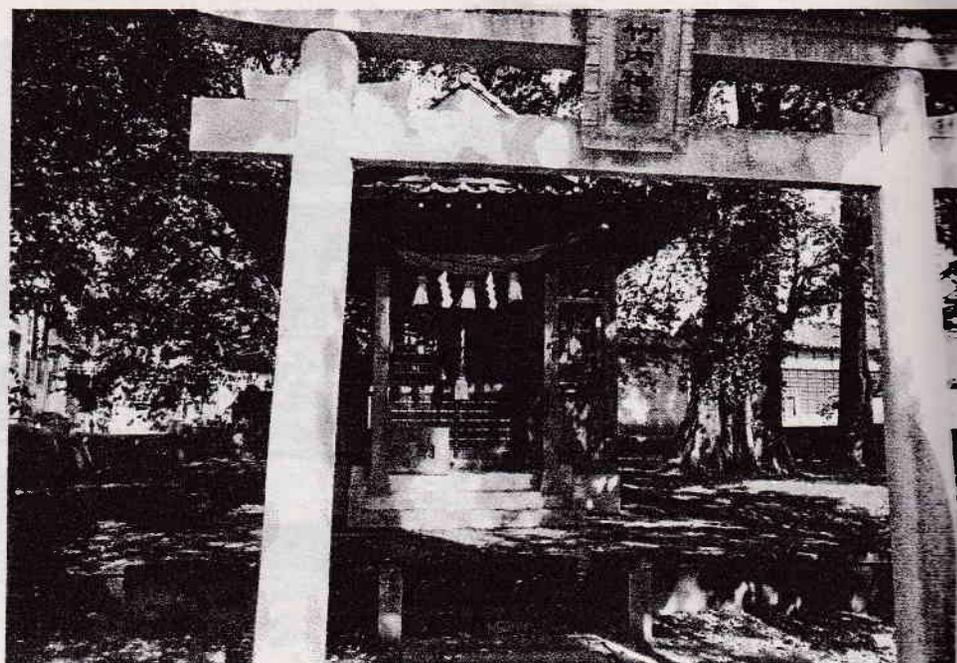


写真 3・03 竹内神社

秋津村誌によれば慶長十八年(一六一三)の創始となっている。

秋津小学校の南、秋津川のほとりに、大木に囲まれた森の中にある。境内も広く、石垣の
上に石の玉垣をめぐらして正面鳥居は南面している。

拝殿には下り藤の紋がついており、奥の神殿の棟には藤輪の中に違い鷹羽の紋がつけら
れている。(注 昭和四十六年二月二十九日の調査時点・現在は平成に入って社殿が改修
され、本来の下り藤の紋のみに直されている)

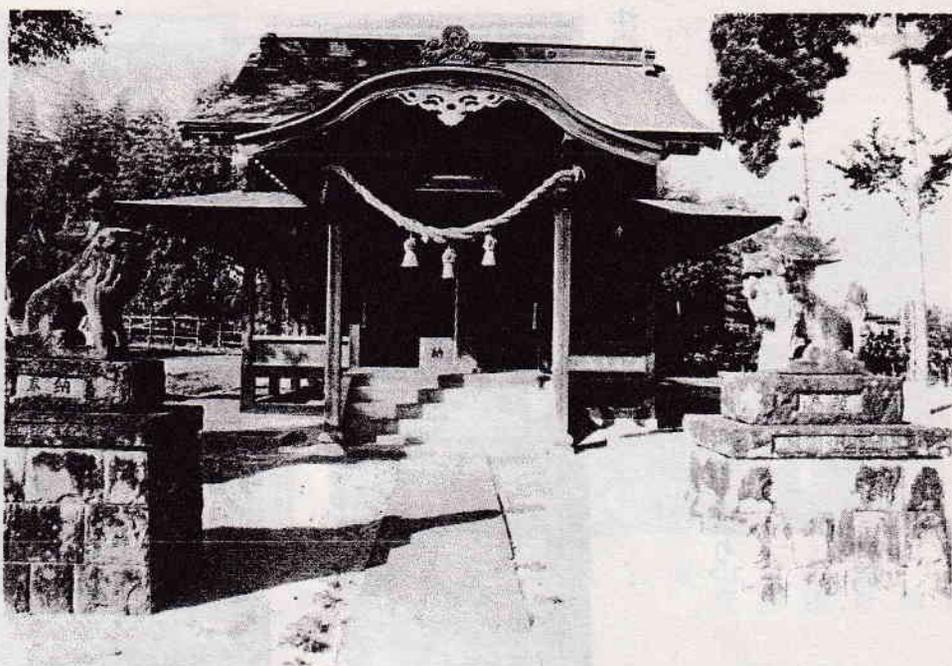


写真 3 ・ 0 4 中無田熊野座神社

注

明治は、明治四五年七月三〇日に大正に改元されている。一月はまだ明治四五年（一九一二）

昔から、中無田の鎮守の神様として信仰が厚い。神社の神殿・拝殿とも沼山津神社と同規模のものであり、社殿は天保七申年（一八三六）の改築とも伝えられている。

寛文の国郡一統志にも「中無田ニ権現アリ」と、肥後国誌にも「権現宮祭九月十九日氏神ナリ」とある。

境内の石灯笼に「元文二丁巳曆（一七三七）八月十九日 奉寄進下産子中」の刻銘がある。

一・三百年経ったと思える大木が、神社の厳かさをもしだしている。境内の大棟は目通し周囲四四二杉を計る。

昭和三十七年（一九六二）に三五〇年祭りが行われている。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史）

当神社には御神体の外に、「僧形神像三体」も併せ祀られている。

神殿内の柱には、今なお西南戦争時（四月十四日と思われる）の、いわゆる西郷弾痕が打ち込まれたままになっている。

明治四十五年（一九一二）一月 三〇〇年季の鳥居が氏子中により、大正十年（一九二一）には齊藤光太郎により手水鉢石が、昭和十二年（一九三七）七月には中山傳吾・ジツにより、灯笼一對が寄進されている。

さらに、昭和十二年（一九三七）に祝詞所・弊殿・拝殿が改築されている。

寄進者の名前を刻んだ玉垣で境内が囲まれているが、昭和三年（一九二八）に昭和天皇の御大禮を記念して西及び南側垣が、平成十年（一九九八）には神社創建三八五年を記念して東側の玉垣が寄進された。

又、昭和三十七年（一九六二）一〇月には、三五〇年祭が行われると共に、三五〇年祭記念碑が建立され、吉本平太郎・高宮政吉により三五〇年記念の狛犬一對が奉納されている。平成十年（一九九八）五月には、傾きつつあった鳥居が移設修正されている。

目通し周囲四四二杉を計る境内の大棟は、熊本市指定保存樹木（昭和五十一年第六十一号）となっている。

大正元年（一九一二）の大洪水記念樹の銀杏もすでに大木となっている。昭和四十七年山本藤太郎によって建立された「大正元年大洪水記念銀杏植樹の記念碑」には、次のように記されている。

明治は、明治四五年七月三〇日に大正に改元されている。一月はまだ明治四五年（一九一二）

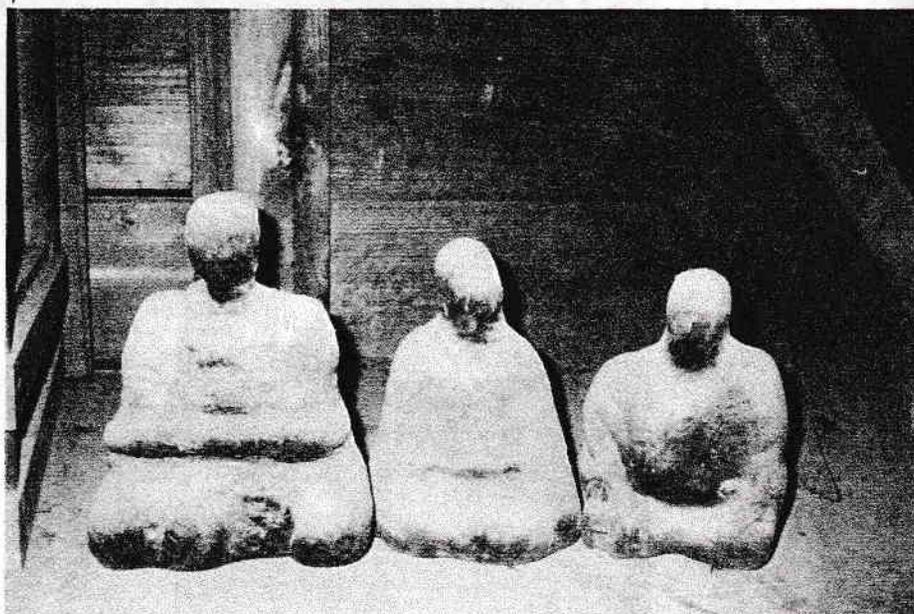


写真 3・05 中無田熊野座神社僧形神像三体

大正元年（一九一二）の大洪水記念樹の銀杏もすでに大木となっている。昭和四十七年山本藤太郎によって建立された「大正元年大洪水記念銀杏植樹の記念碑」には、次のように記されている。

この銀杏樹は、大正元年八月の大洪水の砌り、水勢甚だしく濁流は境内を満々と浸し、舟にて社殿を周遊せり。
この大自然の猛威を記念して田島久次郎・山本藤太郎の両名にて植樹せしものなり。
後年毎々大出水あれど 此の時の大洪水に及ぶもの昭和の今日に至るまで遂に見たことなし。
昭和四十七年八月建之 山本藤太郎

平成元年（一九八九）鷺川改修で境内が一七六一平方メートル買上げられた。その代金で社殿の大改築が行われ、平成三年（一九九一）六月完成したが、その記念碑の台座には次の様に記されている。

地域の氏神として多くの尊崇を集め、中無田の歴史と共に栄えて来た当神社も鷺川改修工事計画によって境内割譲のやむなきに至り、氏子一同合議の上、此の補償費をもって基金

とし、御即位奉祝記念行事と併せて屋根銅板張り替え並びに社殿の修復を行い、貴重な遺産を後世に残す為記念碑を設立する

平成二年七月着工
平成三年六月成就

改修が完成し、平成三年十月五日に落成式を行う予定で準備を進めていたが、九月二十七日の台風一九号。熊本気象台観測初の最大風速五二・六m/sで境内の古木の大部分が吹き倒され、その倒木で折角修理した社殿が大被害を被る。
落成式どころではなく、翌四年再び修理することになった。

平成十一年（一九九九）九月二十四日、再びの台風十八号で辛うじて残っていた椋の古木が途中から吹き折れる。幸いに社殿と落成記念碑すれすれの所に大木の枝が落ちたので危うく大きな被害にならずに助かった。

二、三百年栄えてきた杉・椋の大木は二回の台風で無くなってしまい、東側に一本の椋の古木が残るだけになった。元六本あった保存指定木はこの一本のみとなった。

たび重なる台風でなくなった、かつての杉のなかには、寛政十年（一七九八）から四年

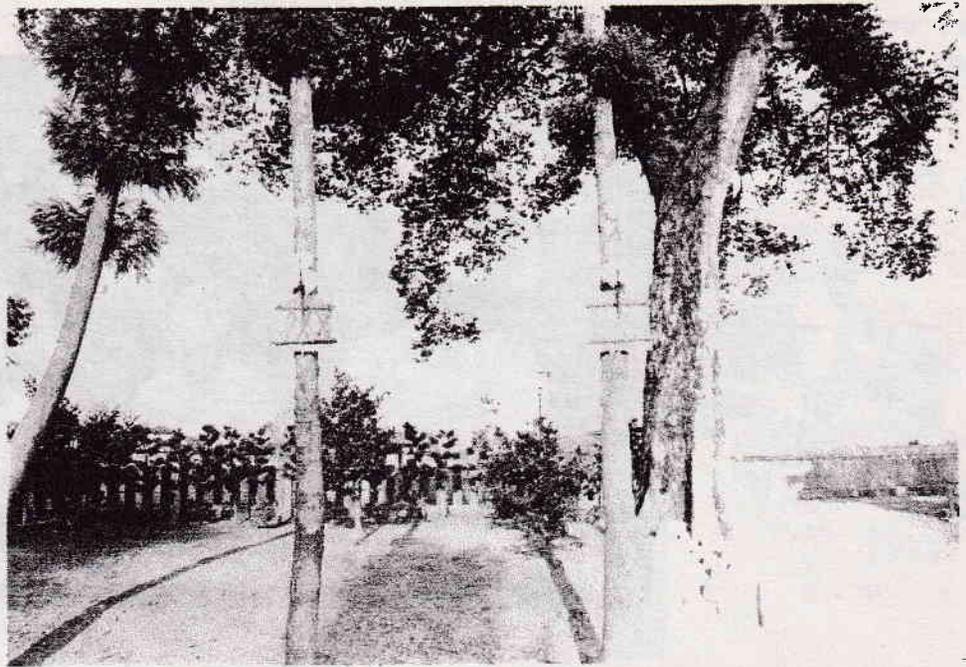


写真 3 ・ 0 6 三社独特の吉田司家追風座

注記

沢田直助

寛政十年（一七九八）から中無田村庄屋

享和二年（一八〇二）から沼山津村庄屋

文化七年（一八〇七）から苗字御免御惣村庄屋

直触を勤める

間中無田村の庄屋を勤めた「沢田直助」が、村の平和と発展を記念して寄進した杉もあったと思われる。

「沢田直助略書置 文政六年末（一八二二）八月」には次のように記している。

沢田直助略書置 文政六年末（一八二二）八月 の中から（意識）

中無田神社内に仕立ててある杉は私が寄進したものです。

私が中無田村の庄屋になった寛政十年（一七九八）頃は、村中殊の外零落して、村内には貫の通った家は五・六戸しかなく、他は皆堀っ立て小屋ばかりで難渋している上にいつも口論が絶えなかった。

この杉が繁る頃は、争いも途絶え、村方全部の人が貫の通った家に住めるように、又、村中が弥栄えることを願ってこの杉を残し庄屋役を辞します。

祭日は九月十九日。

なお当日は藁を四〇度角に編み、それを割り竹で抑えた「吉田司家（通称追風）座と言われるものが、二本の神木に飾られている。これは秋津地区の沼山津神社・西無田雨宮神社（熊野座神社）三社に見られる珍しい祭祀である。

大被茅の輪くぐりは六月下旬・宮座は十月五日に行われている。

注：1 西南戦争時の西郷弾の弾痕

明治十年四月十四日と思われる。御船方面の戦いで破れた薩軍の一隊が、橋を壊しながら木山へ集結する途中、中無田を通過するとき、村の世話役三藤孫四郎らに、食料の提供や道案内を強要する。薩軍への協力を躊躇していると、中無田神社に向けて実弾を発射して、村民を震えあがらせ、言うことを聞かないと火を放ち村中を焼き払うと脅して慥力させた。中無田神社の神殿内の柱には、西郷弾が打込まれたその当時のままになっている。

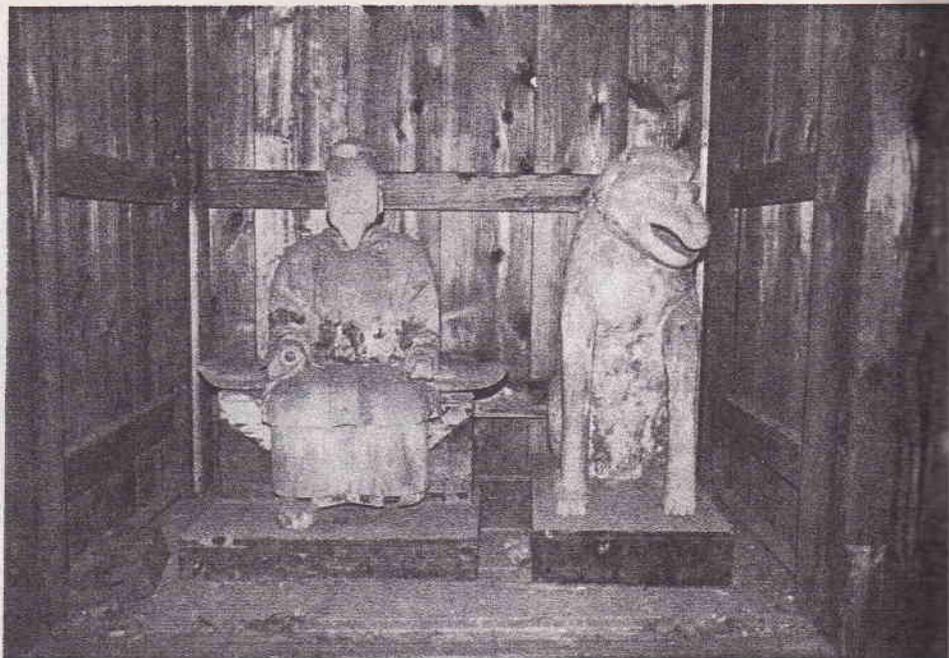


写真3・07 中無田熊野座神社の狛犬

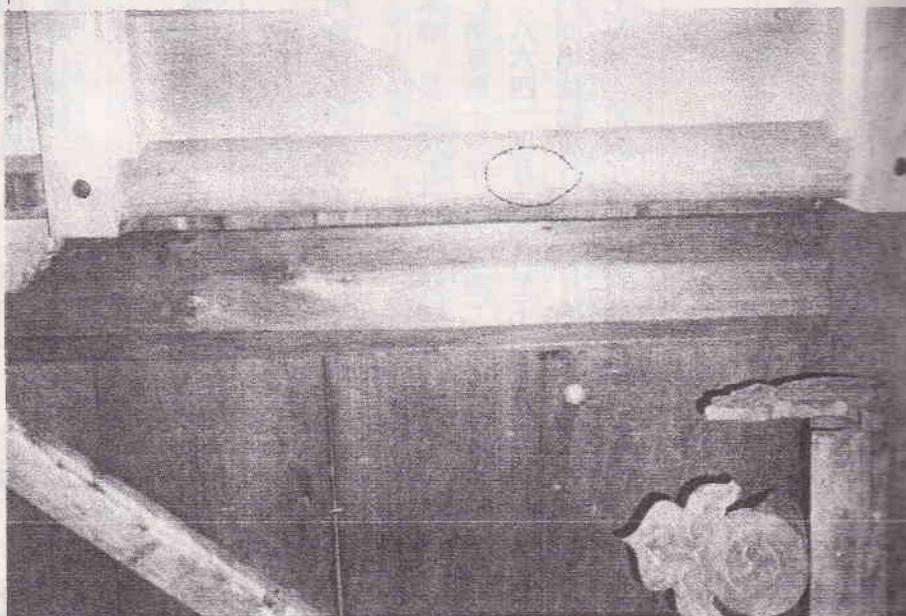


写真3・08 西南戦争時の西郷弾の弾痕

5 福秀山光輪寺 (マップ番号 13)

所在地 熊本市沼山津四丁目八番七号(上津代里)

真宗本願寺派・本尊 阿弥陀如来

(語りべ学習会)

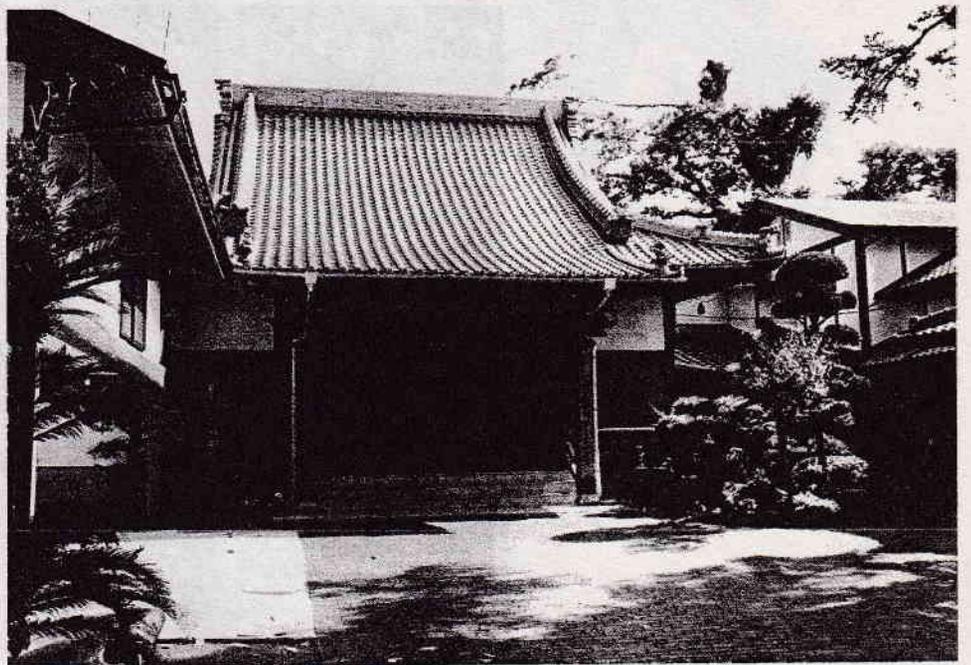


写真 3・09 光輪寺

注記

親鸞上人御正忌

旧暦二月二十八日なので現在は新暦で
一月二六日とされている

小楠公園より南へ約六百メートル左奥。

寺は熊本順正寺の法弟である明義が、明暦三年（一六五七）一代僧業の許可を得た。その後、法榮まで十一代願い続けたので世襲となり、明治十年（一八七七）八月七日願いによって、永代庵室の公許を得て、初めて「千福庵」と称し、順正寺の末庵となる。

明治十二年（一八七九）七月二十三日、寺号公称の許可を得て「光輪寺」と改めた。

同十三年（一八八〇）四月二十九日、本派宗規綱領に基づき本山直末に編入されている当時の御本尊は、元禄十三年（一七〇〇）当庵の本尊であった十一面観世音を改め、阿弥陀仏の木造を本尊として本堂に安置した。

又、寺伝によれば、山田入道正信の開基というが、年代は明らかではない。小西行长肥後領国の時代に焼かれ、文禄三年（一五九四）に、再建されたと伝えられている。

光輪寺は通称「沼山津の上（かみ）の寺」と言われている。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史）

当寺の御本尊について上益城郡誌には次のように記されている。

元禄十三年（一七〇〇）七月十二日当庵の本尊たりし十一面観世音を改めて
阿弥陀仏の本尊となす 木像の銘に曰

肥州益城郡六嘉村龍福寺之住 釈良閑 二十五歳

本尊 長二尺五寸 慈續大師御造

仁者延暦十三年（七九四）生 仁壽四年（八五四）往 延暦寺座主貞観六年

（八六四）正月十日至子□手結印□誦此首右□而逝年七十一□終念阿弥陀念諸

門同唱依勸流行八年七月給□慈□大師往如来上人元文四年（一七三九）四月五日

七高僧上宮太子御影及右御影御□に光輪寺の寺號依願下賜（五世智南）

親鸞上人御正忌法要は十二月十六日から十八日まで、なおお取越しは十二月上旬に行われている。

（語りべ学習会）



写真 3・10 浄福寺

所在地 熊本市沼津三丁目八番五五号 (下津代里)
真宗本願寺派・本尊 阿弥陀如来

沼津津会所跡の西三〇メートルの処に、浄土真宗本願寺派浄福寺がある。

往古は天台宗で、本堂ならびに鐘楼門などがあるが、創建時代は明確ではない。しかし元亀二年(一五七二)に木山城主備後守惟久が再興したことは記録にある。(※注記参照)

天正年間(一五七三〜一五九一)の兵乱に罹り、堂宇等すべて消失したが、当時の住職慈観が辛うじて仏像のみを土中に埋め置き、その後観清と一小堂を建立して本尊を安置した。比叡山延暦寺の末流で、本堂には薬師如来、脇に観音菩薩があって、草創以来何年経っているかは不明。

慈観より三代目の観清の頃までは、天台宗であったが、その弟子秀海に至って慶長十八年(一六一三)に改宗。秀海が浄福寺の初代の住職になって現在に至っている。

創設は戦国期より古いが、現在の建物は新しく、山門も明治四十一年(一九〇八)の建立である。

寺の裏手には、広大な共同墓地がある。十七世紀中葉から十八世紀中葉にかけてのもので、庶民の墓としては、かなり古いものばかりである。

承応二年(一六五三)・万治二年・天和二年・貞享・元禄・宝永・正徳元・享保・元文・寛保などの年号が記録されている。

通称、浄福寺のことを「沼山津の下(しも)の寺」と言われている。

(秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史)

※注記 (上益城郡誌による)

□□御札之写 元亀二年未天

生者天迦陵□伽聲頼主 木山備後守惟久

奉□□南浮□扶桑朝四海□肥之後州□風山浄福寺□□我等今敬禮

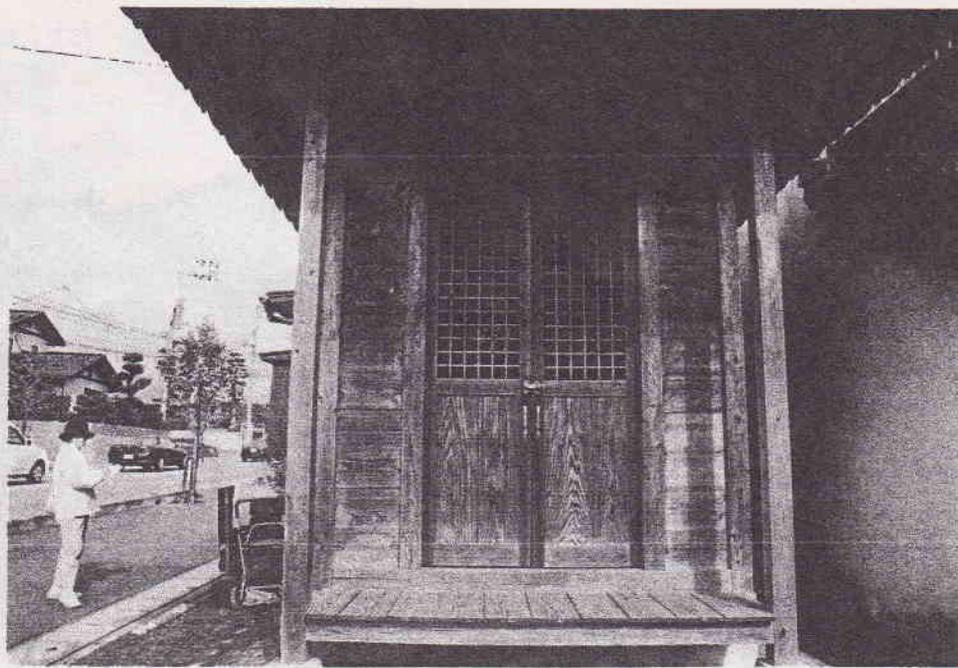


写真 3・1・1 妙見社 妙見さん

なお『熊本市史 別編第二巻 上益城郡誌 沼山津村』によれば『熊本西光寺の法弟である秀海が、一代僧業の許可を得た。その後願い続けたので世襲となり、明治十年（一八七七）八月願によつて、永代庵室の公許を得て、「浄光庵」と称し西光寺の末庵となる。

明治十二年（一八七九）七月、寺号公称の許可を得て、浄福寺と改めた。同十三年（一八八〇）四月、本派宗規綱領に基づき、本山直末に編入されている。』と記されている。

親鸞上人御正忌法要は一月九日から十日まで、なおお取越しは十二月に行われている。

（語り部学習会）

〔堂主 宇子〕

7 妙見社（妙見さん）（マップ番号 14）

所在地 熊本市沼山津四丁目五番四五号（上津代里）

沼山津の中津代里の第一公民館前にある小堂で妙見さんと呼び、俗に「火の神さん」と言う。

社殿は小さいが男女神像各二体、つまり二対の神が鎮座されている。墨書銘としては女神像一体の背部に「願主 九右衛門」とあるのみで、他には紀年その他の徴すべきものがない。

国郡一統志には妙見は記載がなく、肥後国誌には「妙見宮」と見えているので江戸中期に祀られたものと考えられる。

この付近は湧水地帯で、現在でも井戸は浅くて自噴するので、妙見を祀るのも故なしとしない。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史）
開基 建立年月不明

堂 新築落成 平成元年（一九八九）十二月吉日、奉納者一八名の名前がある



写真 3 ・ 1 2 妙見社の神像

開基 建立年月不明
堂 新築落成

平成元年（一九八九）十二月吉日、奉納者一八名の名前がある

堂高

間口×奥行

軒下まで三〇六センチ 内基礎高四〇センチ
二一四センチ×三三二センチ

仕様

木造瓦葺き、堂に妙見社の額が掲げられている

神像

右より男神像・女神像・男神像・女神像

男神像二体

男神 衣冠束帯座像 黒・紺色などで彩色 木造

二体とも 高三二センチ 膝張二〇センチ 肩幅一五センチ 顔高九センチ

顔幅七センチ

女神像二体膝立座像

束帯座像 ピンク色等で彩色 木造

二体とも 高二五センチ 膝張一五センチ 肩幅一四センチ 顔高九センチ

顔幅七センチ

その他

像を祀っている箱に、「奉納者 明治十四年二月一三日生 酒井百喜 七八歳 とり 昭和六十三年十月吉日」と記入

（語りべ学習会）

8

中津代里薬師堂 （マップ番号 15）

（通称 堂ん前の観音さん）

所在地 熊本市沼山津三丁目一〇番 （中津代里）

小池く御船行き産交バス沼山津停留所横。大きさ正面九尺、奥行六尺の木像瓦葺きで仏堂の形をそのまま残している。

正面に両開きの格子戸がある。中の須弥壇には、本格子がはめられ、その中に二体の仏像が、各別の厨子に安置されている。

左の厨子は、薬師如来立像で、右手は下にさげて与願印をとり、左手に薬壺を捧げている。右の厨子には、聖観音座像である。「国郡一統志」の沼山津村の条に「薬師」とあるが、これに当たると推定される。

建物は、往時の物とは思えないが、修復する際は大体同じ大きさに建てるものと考えられる。

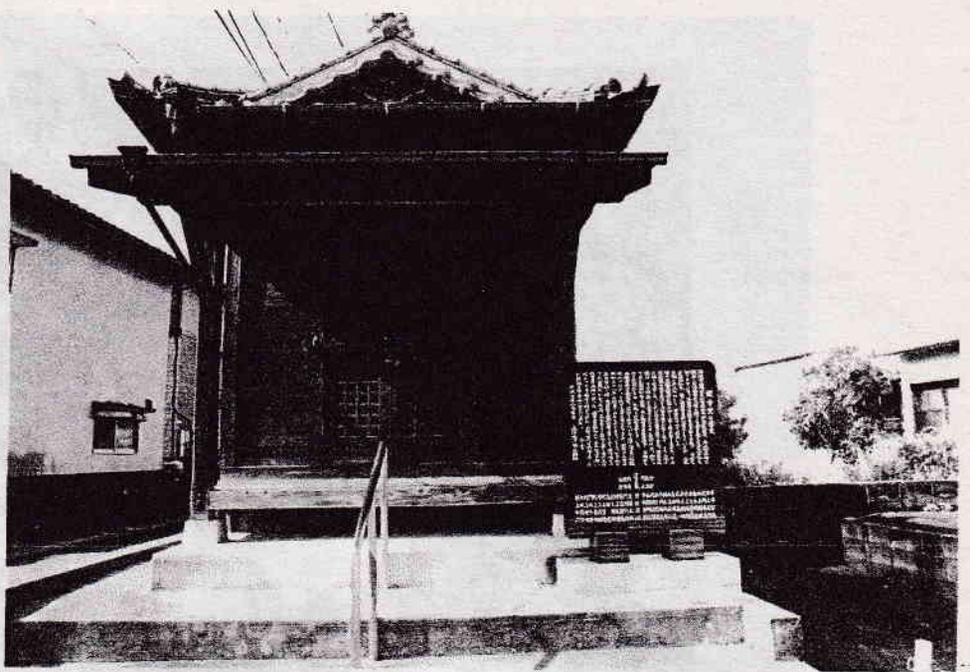


写真 3 ・ 1 3 中津代里薬師堂

〔注記〕

嘉永八卯は、嘉永六年（一八五三）一月二七日に安政に改元されているので、実際は安政二年（一八五五）に当たる。

古文書の記事と古老の口伝で、浄福寺が以前、中津代里にあったと言う事、薬師堂の供養を、代々浄福寺が続けている事から考えても、薬師堂の二仏は、往時の浄福寺の御本尊であると思われる。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史）

9 下津代里王稲荷社 （マップ番号 17）

所在地 熊本市沼山津二丁目一四番（下津代里 一六二〇番地）

沼山津二丁目一四番七七号（一六二〇番地）、四時軒入口の二十餘程西の道角の稲荷社である。

三尺四方の小堂内に一木像の女神座像が安置されている。像高十五呎 顔高三呎 顔幅二・五呎 肩幅九呎 膝張りは左右欠損しているが、現存一〇呎を計る。又、はめこみの両手を失っている。

像の底面に「嘉永八卯二月一日奉彫刻仏師宮武（花押）」の墨書銘がある。

この女神像を納めたと思われる木箱が前に置かれており、正面には「勸請宇迦之御魂神」右側面には「明治十四年（一八八一）二月吉祥日 沼山津神社祀掌古賀喜三太藤原辰臣」と墨書されている。

（熊本東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

10 鶯 観 立日 堂主 （マップ 18）

所在地 熊本市秋津三丁目一番

秋津三丁目の中無田集落の東北部にある正面二間、奥行一・五間の仏堂である。堂の棟木には明治二十七年（一八九四）甲辰三月五日の棟札がある。

本尊は木像座像で頭部に九つの顔があり、十一面観音としか見えないが両手を重ね合わせて親指を合わせており、胎藏界大日の法界定印か釈迦の禪定印か薬師の薬壺印である。

像高は四十六呎 膝張り二十七呎 肩幅二十二呎 顔幅八・五呎である。

〔注記〕

古賀喜三太藤原辰臣は、沼山津神社の祀掌
「六・ふるさとの人物」の項参照



写真 3 ・ 1 4 下津代里稻荷社

さて新指を合せており、胎蔵界大日之法界定印が釈迦の禪定印か薬師の薬壺印である。
像高は四十六釐 膝張り二十七釐 肩幅二十二釐 顔幅八・五釐である。

その傍らに腰から下が腐食してなくなった正体不明の仏像がある。全面に磨耗しており、頭と両手が判別出来るだけで、判定の材料になるものが全くないが、これまでの腐食仏に對比すると地蔵の公算が強い。

残高二十七釐 厚み九釐 肩幅十七釐 顔高八・五釐 顔幅五釐である。

なお堂の前に古賀氏の墓地があり、十基程の墓がまとめられている。享保を最古として元文・宝暦などの紀年銘の墓や古賀作十郎の墓が見える。

(熊本市東部文化財調査報告書)

鶯観音 野原山放光庵

秋津小学校の西方丘陵にあり、俗に鶯観音と言う。

永禄八年(一五六二)阿蘇大宮司家 益城郡御船城主 甲斐明部大輔親直(宗運) 託麻郡竹宮に鶯城を築き、その与力甲斐飛驒守正運を以て居城せしむ。

正運入城して先ず一字の伽藍を建立し、瀧川村邊田見(現御船町辺田見) 黄海山東禅寺 洞春和尚を招きて開基として黄鳥山法光寺と号す。洞春和尚は両寺兼職し、十一面観音・薬師・甲斐正運像を自刻し、仏殿に安置す。

爾来次第に繁盛せしが天正十五年(一五八七)二月豊臣秀吉九州征伐として大軍を帥いて薩州を攻め平ぐ。同年五月帰国の途中大勢入来り、所々の城を攻め落とす。此の時甲斐正運降参して城終に陥る。同時に佐々陸奥守成政に限本城を賜ひ、成政入城の後当寺焼失す。

天正十六年(一五八八)閏五月清正公入城以来、同十七年領地巡検の際、本尊民家に勧請しありを今の地に一堂を建立し、番僧を置き野原山放光庵と号せしとなり。

明治の初土地改正の行はるまでは鶯の地は、託麻郡健軍村に属せり。堂中一の位牌あり。左の如く記す。

大慈七十八世再中興當庵開山大梅常大和尚禪師

延享三丙寅年(一七四六)七月二十三日

□寂 放光庵

(野田幸平手記より)

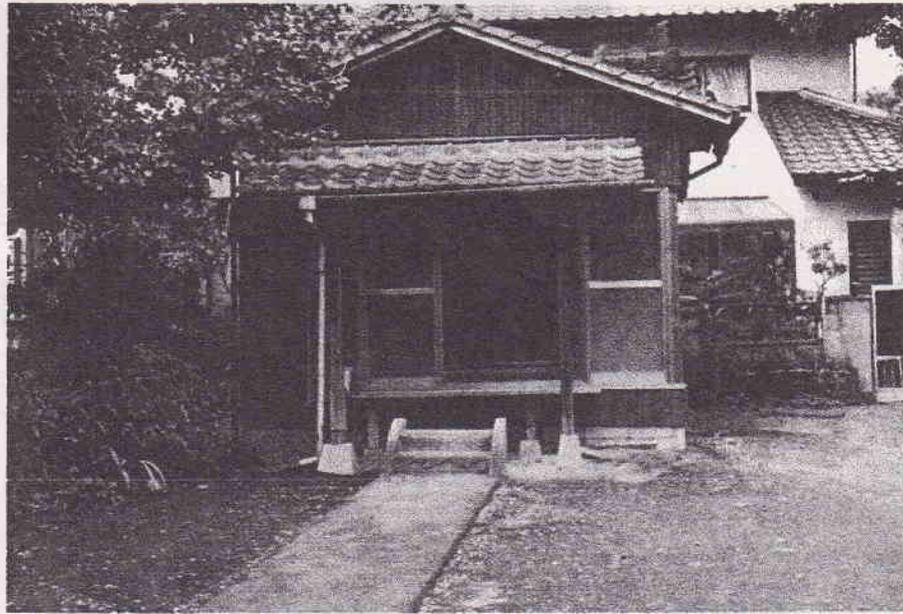


写真 3 ・ 1 5 鷺 観 音 堂



写真 3 ・ 1 6 鷺 観 音 堂 本 尊

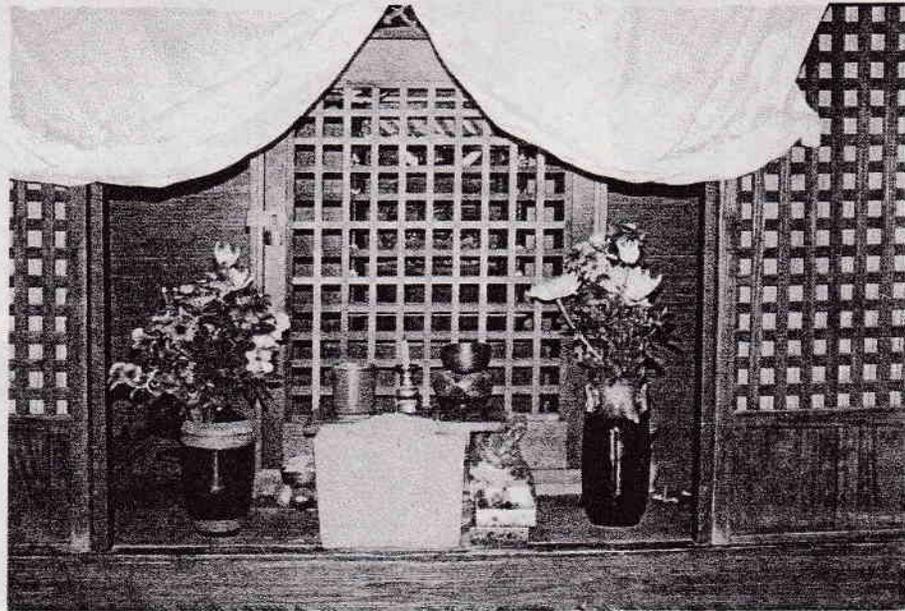


写真 3 ・ 1 7 野間薬師堂

11 野間薬師堂 (マップ番号 20)

所在地 熊本市秋津一丁目一番七四号

秋津一丁目一番の四っ角にある小堂で野間の薬師堂と言われている。

お堂は昭和五十年(一九七五)九月に改築されているが、年代などは不明。

お堂の前の手水鉢は、明治三十八年(一九〇五)十一月一二日に奉寄進されている。

開基 建立年月不明

堂 木造瓦葺き 間口二・〇四m 奥行三・五m

薬師像 木造 円光背 印相薬壺印

座像約三〇cm 膝張り約一五cm 肩幅一三cm 顔幅約五cm

(扉が開かず正確に計測できず)

手水鉢 明治三十八年旧十一月二日 □□□中 と記銘され、幅五〇cm

高さ二六cm 奥行二七cm

(語りべ学習会)

12 新村 天 満 宮 (マップ番号 21)

所在地 熊本市東野一丁目三番七七号 (公民館敷地内)

東野一丁目の第五公民館の前にある小堂で新村の天神さんと呼ばれており、お堂は第五公民館の改築の際、現在地に移転改築されている。

神殿には、左側は天神・右側は観音菩薩の二体が祀られているが、年代等不明。

また集落移転と同時に祭祀したものか、また移転集落形成後祭祀されたのかも不明。

慶長八年(一六〇三)から翌年にかけて、加藤清正が画津塘を築いたが、その結果秋津と隣接の六嘉・大島(現在の嘉島町)・飯野(現在の益城町)などの村々は水害常習地となった。

六嘉村(現在の嘉島町)の一部がその害に耐えず集落こぞって安住の地を求めて移転し、



写真 3・18 新村天満宮

そのまま六嘉村に所属していたが、明治八年（一八七五）境界変更、その後秋田村内となる。

その移転した下無田村が、「新村」と呼ばれたのであり、秋津新町はそれに繋がる町名で、当時の苦勞を今に伝えている。

この新村天神は移転した集落の人々の守り神として祀られたことは間違いないであろう。

創建 開基不明

堂 木造瓦葺き 間口二八七釐 奥行三七七釐

神殿 左像 衣冠束帯座像

右像 菩薩座像 円光背 左手白蓮花を捧げ 二重蓮華座

右手膝上に成弁印か

（語りべ学習会）

〔石造物〕

水神さん

秋津地区には沼山津から西無田に至る田圃や川塘に何ヶ所も水神さんが祀ってある。毎年三月九日、各部落毎に水神さんの祭りが以前はあった。

水害や水不足に悩まされた村人は、水の神様を祭って水に感謝し、豊作を祈ったり、子どもたちを水の事故から守るために「川まつり」をやって川を大切にしたりした。

13 ○ 中無田石塔水神 (マップ番号 33)

所在地 熊本市秋津町秋田字計路 (鉄塔脇)

木山川流域の石塔水神は、水神罔象女神（みずのはめのかみ）を祀り、祭日は三月八日であったが、現在は九月十九日に変更されている。

形が石塔に似ているので、そう呼ばれていた。元々、裏井手上流端の字計路の中程にあっ

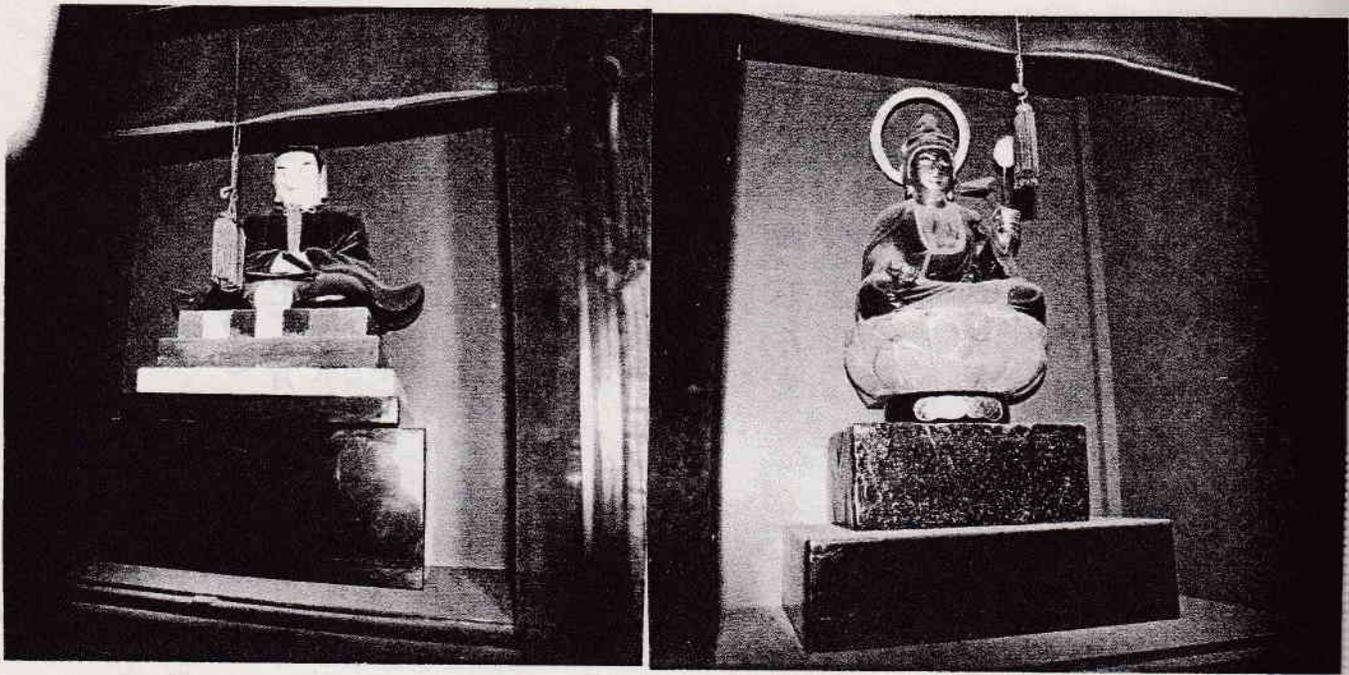


写真 3 ・ 1 9 新村天満宮・左側神像・右菩薩像

であったが、現在は九月十九日に変更されている。
形が石塔に似ているので、そう呼ばれていた。元々、裏井手上流端の字計路の中程にあっ

たものを昭和五十五年（一九八〇）霊場整備事業で現在地に移転された。

建立年月日 天保六年（一八三五）乙未

水神 高七〇釐 幅三〇釐 奥行三〇釐 上部が饅頭型になっている。

中台 高三〇釐 幅五五釐 奥行五五釐

基礎 高一七釐 幅八五釐 奥行八二・五釐

碑文には、次の碑文が記されている。

それまで水面下で荒地地だった所を文化六・七年（一八〇九・一八一〇）に計路の田開きがなされ、それを感謝して天保六年（一八三五）に建立されたとある。

計路石塔水神碑文

天保六乙年

正面 (すいじん みずはのめのかみ)

水神罔象女命

三月八日祭日

南面碑文

抑幾与路登申来平常
之水内及四五尺数百年
来定杭荒二相成居候處
文化六七巳午年二開明新
田出来仕候

読み

(そもそも きよると申し来たり平常
の水内は四五尺に及び 数百年
来 杭を定め荒れに相成り居り候處
文化六七巳午年に開き明け 新
田 出来(しゅつたい)仕り候)

〔注記〕

御惣庄屋 田上文八（格次）

文化四年（一八〇七）八月から文化六年（一八〇九）病死するまで沼山津手永の惣庄屋をつとめる

沢田直助

寛政十年（一七九八）七月二日より中無田村の庄屋となる。

二十八歳。亨和二年（一八〇二）二月西沼山津村へ所替わり

文化五年（一八〇八）六月中無田庄屋兼帯。

文化七年（一八一〇）六月苗字御免惣庄屋直触れとなる。

四十八歳 一領一匹となる。

天保六乙年 ↓（一八三五年）

文化五年 ↓（一八〇八年）

吉本 因幡守 …… 浮島神社社人

光永 四兵衛 ……

沼山 津直助 …… 中無田村庄屋

中台座に

御惣庄屋 田上文八（格次）

新田施主 沢田清七

右 同 沢田直助

右 同立合 沢田才助

右 同 米村吉三良

□七

建立施主 沢田直助

沢田清七

沢田才助

宇兵工

善助

益城町史編纂基礎資料（三） 福島文書には次のように記されている。

計路新開 文化四卯年（一八〇七）

一目五町一反八畝二四歩 東沼山津村 西沼山津村 中無田村

右畝数きよ路川杭荒地之内捨置候而 者無益の儀に御座候間

手入床揚以申処申談 当卯年より十五ヶ年季請中無田村内者而水深に付

二十五ヶ年季請に奉願候処願之通被仰付手入仕申候事

14 ○ 中無田間島水神 （マップ番号 34 ）

所在地 熊本市秋津町秋田字月ノ輪（水門脇）

字月ノ輪水門脇の間島水神には次の碑文が記されている。

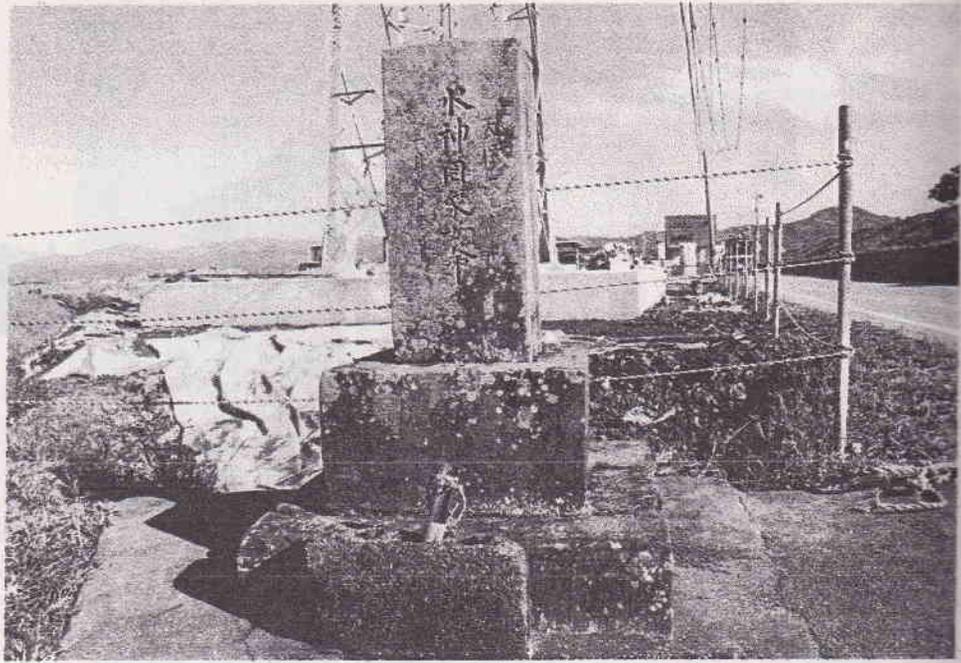


写真 3 ・ 2 0 中無田石塔水神

所在地 熊本市秋津町秋田字月ノ輪（水門脇）
 字月ノ輪水門脇の間島水神には次の碑文が記されている。

石柱に (すいじん みずはのめのかみ) 水神罔象女命	南面 奉 奇 進 氏子 中 戊辰 十月 願 司 吉本 因幡 守 光永 四兵衛 沼山 津直 助
----------------------------------	---

建立年月日 文化五年（一八〇八）戊辰一〇月
 小堂石造物 間口 五四呎 奥行五一呎 軒下九四呎
 屋根高三七呎 間口七八呎 奥行七五呎
 基礎高 五呎 間口七四呎 奥行六六呎
 水神 石柱 高 七八呎 幅 一八呎 奥行一三呎
 もと、赤井川（現木山川）矢形川の旧合流点の川州にあったものを、昭和八年（一九三三）河川改修で字月の輪に移転。昭和五十五年（一九八〇）圃場整備事業で現在地に再移転させられている。

（語りべ学習会）

15 ○ 中無田野間橋際水神 (マップ番号 36)

所在地 熊本市秋津町秋田字前塘ノ元 (野間橋際)

野間橋際水神は、高さ六四呎 幅二一七呎 奥行二二四呎の台座の上に、高さ一二〇呎 幅八〇呎 奥行三〇呎の自然石を御神体として秋津川野間橋際の堤防上に祀っている。



写真 3 ・ 2 1 中無田間島水神

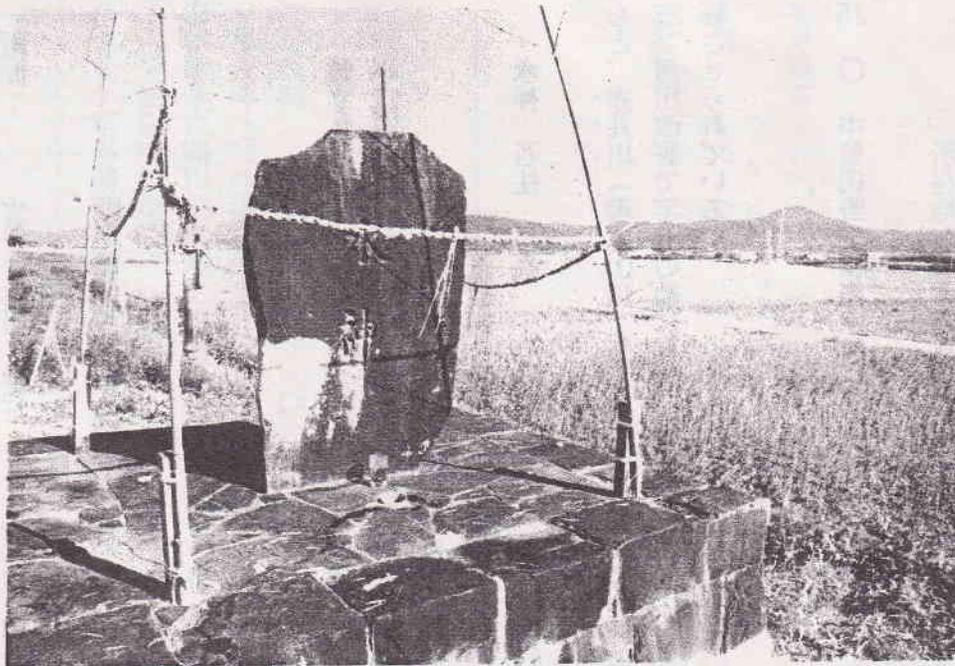


写真 3 ・ 2 2 中無田野間橋際水神

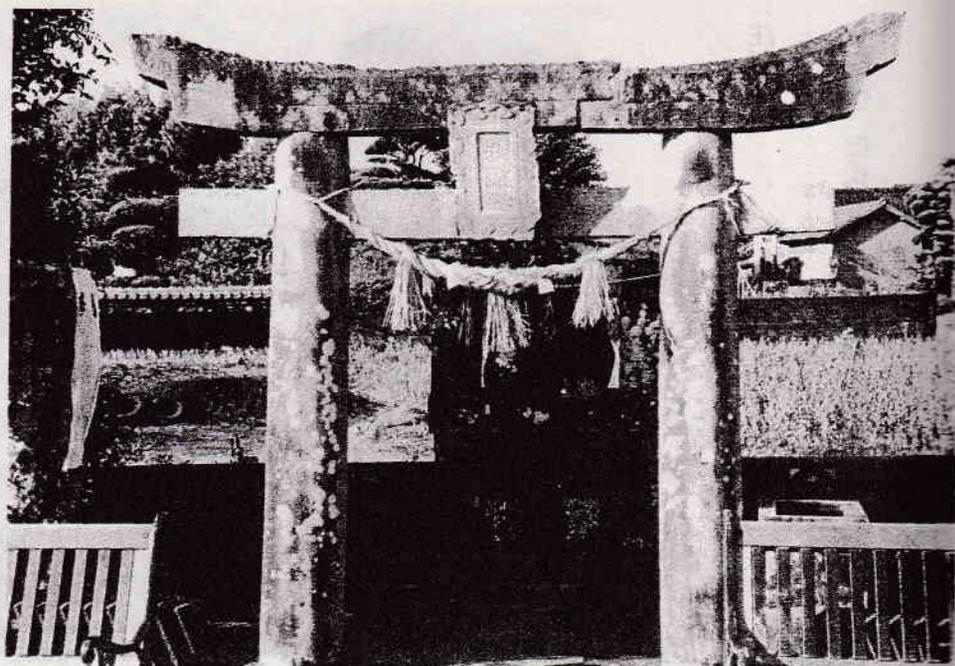


写真 3 ・ 2 3 沼山津水神

次の種文が記されているのみで、記載に説がなく詳細不明。再建としてあるので何かの理由で（水害等で）無くなり、再建されたものと思われる。

水神

大正十年 四月 再建

（語りべ学習会）

16 ○ 沼山津水神

（マップ番号 32）

所在地 熊本市秋津町沼山津 （下沼山津橋上流道端）

敷地は、南面七・二五竽 東面六竽 西面三・四三竽 北面七・七八竽 高〇・七竽のブロック塀の囲いがしてあり、水神としてはかなり大きな造りである。

元秋津川堤防上にあつたが河川改修で現在地に移転されたものである。（ママ）

額に「奉納」・左柱に「秋津村大字沼山津中」・右柱に「明治三十二〇九 二月吉

祥日建立」と記した高一九〇竽 幅一三〇竽 の小振りの鳥居が正面に建てられている。

建立は明治五年（一八七二）。

基礎 高七八竽 幅一〇四竽 奥行一〇五竽 の間知石組

水神 高九二竽の玉垣囲いの中に水神が安置

高六四竽 幅五〇竽 厚二〇竽の自然石を面取りして水神とす

高二〇竽 幅七〇竽 奥行五〇竽 の基礎の上に

高一三〇竽 幅三三竽 奥行三一竽 の角柱を面取りした「水神五〇年祭」

の石柱、大正十一年（一九二二）十月一日の刻銘

高四四竽 幅六七竽 奥行三八竽 「明治四四年（一九一一）吉日奉納

沼山津中」とし記された手水鉢

（語りべ学習会）



写真 3・24 突井戸水神

〔注記〕

上田龍三郎氏……四・伝説・史伝の項の「かみだりよさんの石油堀り」を参照

17 ○ 突井戸水神

(マップ番号 31)

所在地 熊本市秋津町沼山津字東無田 (沼山津橋上流堤防下)

上沼山津橋上流の堤防下の水神は、昭和十八年(一九四三)五月に水田用水の突井戸工事が完成したことを記念して、昭和二十七年(一九五二)五月に建立された水神である。水神には、次の碑文が記されている。

水神	
<p>西暦一九四三年</p> <p>昭和十八年五月完成</p> <p>会計 上田 隆 沼津秀雄</p>	<p>(台座正面)</p> <p>突井戸工事世話人 区长 福田安彦</p> <p>第一区 竹中数喜 上田庄蔵 光岡 満</p> <p>第二区 松本源平 永田末喜 水上軍喜</p> <p>区长 吉永清三 第一区 馬場一蔵 沼津秀雄 中村茂三郎 蔵田和二郎 中川 有</p>
<p>西暦一九五二年</p> <p>昭和二十七年五月修理</p>	<p>(台座裏面)</p> <p>水神建設世話人 村上半次 吉永政信</p> <p>第一区 上田 紘 松本 正 光岡一行 酒井軍太郎</p> <p>第二区 田上又喜 倉永清光 蔵田和二郎 澤田才次郎 沼川辰彦 梅田豊蔵 吉永孝行</p>

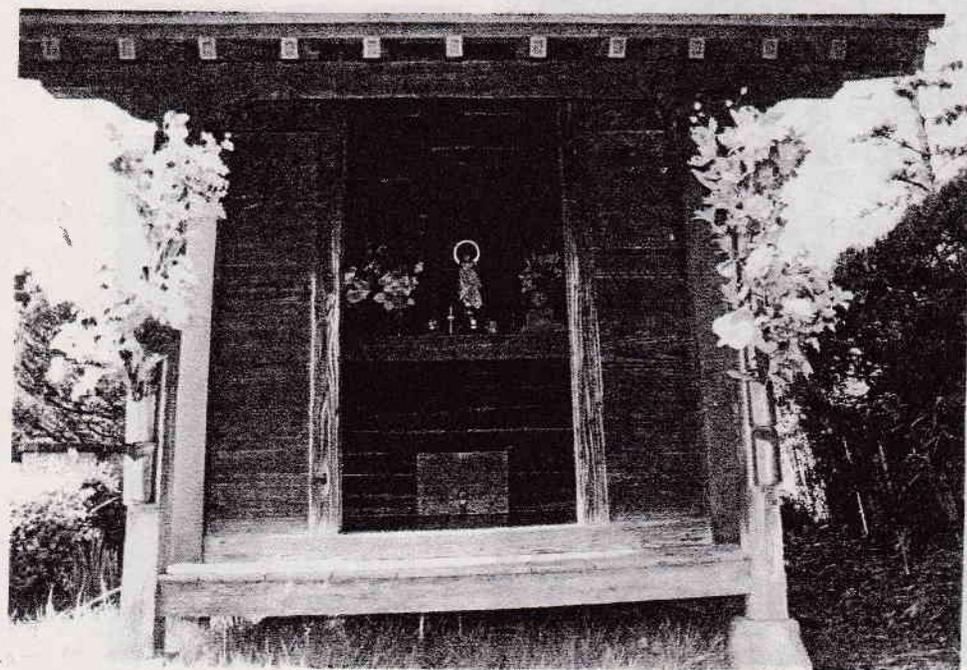


写真 3・25 上津代里・外村組地蔵

水神碑	高一二五〇	幅五二〇	厚二七〇	自然石
台座	高二五〇	幅七〇	奥行九〇	自然石
基礎	高四六〇	幅一一八〇	奥行一一七〇	間知石組
	全高一九六〇			

「秋津村略史では次の様に記している」

沼山津懸かりの田は、沼山津堰から取入れる用水のみであったので、早魃の年は用水不足して、夜も眠らず水引をする苦労は一通りではなかった。

しかるに上田龍三郎氏の石油開発事業の一つとして、中津代里に設けられた箇所から湧水するのを、サイホン式によって木山川を越え橋口に導き、あの一帯約三〇町歩にわたる灌漑に成功した。

この効果を認めて集落協議の結果、別に字東無田地内 弥富熊太氏の田地に鑿井することにしたら同氏はその田地を無償で提供された。

昭和十六年（一九四一）計画されたものの、時は世界大戦の真只中「資材不足」で、この事業には多大の苦心をしたが、志内村長の熱意と、区長福田安彦・同吉永清三氏・その他関係役員・地元の人々の並々ならぬ努力によって完成した。

灌漑実には二〇町歩に及び、さらに今まで「畑苗代」だったのがこれにより「田苗代」が出来るようになった。現地に建立された石碑に芳名を録して永久にその功をたたえてある。

（語りべ学習会）

地蔵群

秋津には数多くの石地蔵が村中の道の角々にある。

上津代里・中津代里・下津代里など、昔はそれぞれの組によって地蔵を祀つたらしい。

それが今なお有志によって丁寧に扱われ、集落の信仰のもとになっている。子どもを大切にしたい証拠でもあると思われる。

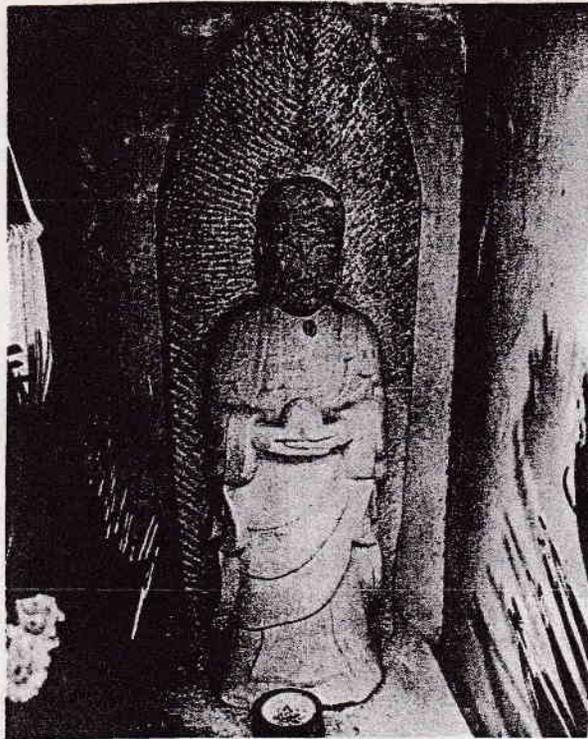


写真 3・26 上津代里・外村組地藏

18 ○ 上津代里・外村組地藏 (マップ番号 41)

所在地 熊本市沼山津四丁目六番六〇号 (上津代里)

沼山津の最東部の通称外村(ほかむら)の道角にある地藏で一問四方の小堂である。本尊は一木像の地藏立像で、岩座上の蓮華座上に立ち、右手に錫杖を持ち、左手を前に出す形である。

台座裏には「安政六年末(一八五九)八月下旬 …… 国家安全奉願上 光輪寺源□」と墨書銘がある。

地藏像は台座幅二三〇 蓮華座までの高さ一二・五〇 仏高三八・五〇 肩幅八〇 である。

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

建立年月日 安政六年末(一八五九)八月下旬

間口一九一 奥行二〇〇 軒下二一〇 屋根高一三〇の木造の堂である。

本尊は、木造造りの円光背で右手に錫杖を持ち、金箔塗りの立像で、円光背までの高さ三八〇 肘張一一〇 肩幅八〇 顔高七・五〇 顔幅 六〇の蓮華座の上に立っている。蓮華座は、高六〇 幅一四〇 奥行一一〇で高八〇 幅二四〇 奥行一五〇の岩座にある。

台座裏には「安政六年末 八月下旬

当外村 儀平□ 善□ 藤□

右三人願より尊像 仕直し

奉并さい志き仕直し

国家安全奉願上 光輪寺源□」と墨書銘がある。「仕直し」の文字があるが、安政六年に開基されたものか、又は修理されたものか判らない。修理されたものであれば開基はもっと古いことになる。

本尊脇に、高二八〇 肘張二五〇 顔高一〇〇 顔幅八〇、光背台座なしの石造座像の地藏が安置されている。

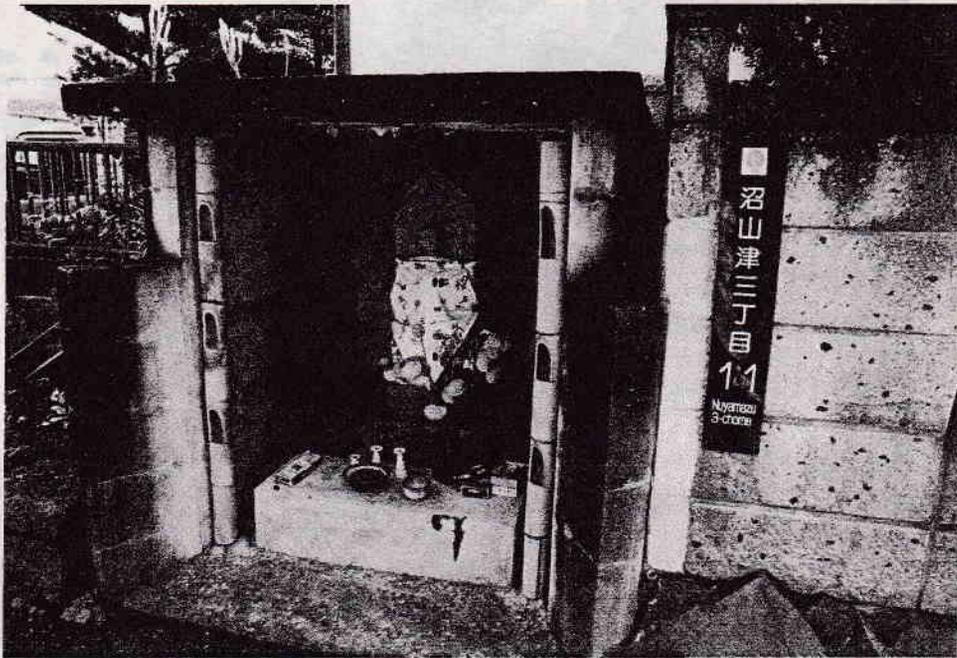


写真 3・27 中津代里・東小路地蔵

地蔵が安置されている。

昭和三十三年(一九五八)一月二四日、「野島政一・上田末記・藤山彦次」を世話人として上組・中組・外村組一同で地蔵尊堂屋根の改造を行っている。

又、平成七年(一九九五)に座主「福島只秋・福島勝也」で、本尊の菩薩に修理が加えられており、更に平成九年(一九九七)一月吉日「泉秀晴・福島秀雄・高木幸義」を世話人として上組・中組・外村組一同で屋根改造が行われている。

(語りベ学習会)

19 ○ 上津代里・内村組地蔵 (マップ番号 42)

所在地 熊本市沼山津四丁目七番 (上津代里)

舟場と呼ばれている沼山津四丁目七番三三号の住宅北側の道路に面して、間口八七釐奥行九一釐 高一五〇釐 の陸屋根ブロック上塗仕上げの祠がある。建立年月日不明。

幅一二五×一〇〇釐 高さ三五釐の基礎、四五釐角・高さ一三釐の台座上に蓮華座があり、その中に中央が盛り上がっている舟形光背を持つ石地蔵が立っている。

舟形光背高九一釐 仏高七〇釐 肘張二五釐 肩幅二三釐 顔高一八釐 顔幅一〇釐である。

大きめの地蔵で痛みも少なく綺麗にしている。光背にも台座にも刻銘はなく、堂内壁面「昭和五十六年(一九八一)九月吉日改修」とだけある。

(語りベ学習会)

○ 中津代里地蔵群 所在地 熊本市沼山津

20 東小路地蔵 沼山津三丁目二番一号 (マップ番号 43)

沼山津の中津代里の旧道沿いには三つの石地蔵がある。

一番東のものは旧会所跡の井戸のある所の南側に入る小路に建てられ、舟形光背高七三釐

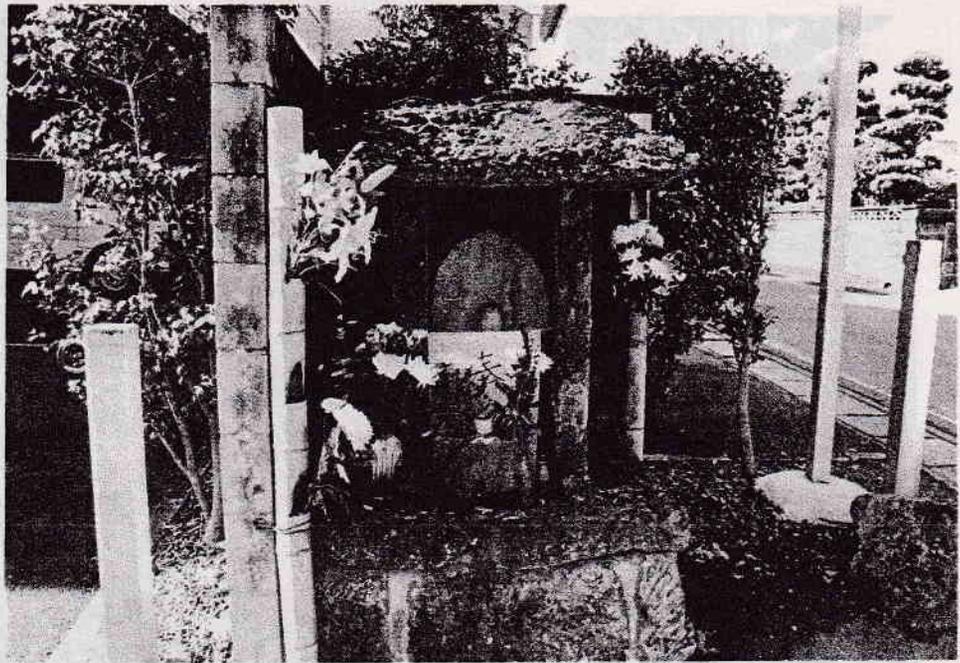


写真 3・28 中津代里・中小路地蔵

で、十三段の台座がある。

地蔵は身高三七段の立像で光背に「寛政五癸丑（一七九三）三月日、若者中建立」とある
 （熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

地蔵堂 高一五〇段 間口一三一段 奥行一二〇段 ブロック上塗仕上陸屋根
 地蔵 石造物 舟形光背 光背迄高七四段 蓮華座
 身高三八段 肘張一〇段 肩幅一一段 顔高八・五段 顔幅七段
 台座 上台高一四段 幅三〇段 一寸丸みかかった石
 中台高一六段 三七×三七段
 下台高一五段 六〇×六〇段

（語りべ学習会）

21 中小路地蔵 沼山津三丁目一三番七号 （マップ番号 45）

次の一つはより西の南へ入る小路の角にあり、三段積みの石垣の上の石屋形の中に鎮座
 されている。

前の石の花立てには「仲正路組」とあり、本体は舟形光背の中に立像を彫り、「慶応三
 卯（一八六七）十月二四日」の紀年銘がある。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

建立年月 慶応三年（一八六七）
 地蔵堂 高一二二段 間口五四・五段 奥行 四四段 屋根共石
 地蔵 石造物 舟形光背 光背迄高七七段 蓮華座一二段
 身高四一段 肘張一三・五段 肩幅一二・五段
 基礎 石組高五三・五段 ・幅九八×九八段
 刻銘 光背に「慶応三卯年十月廿四日 花台に仲正路組」

（語りべ学習会）

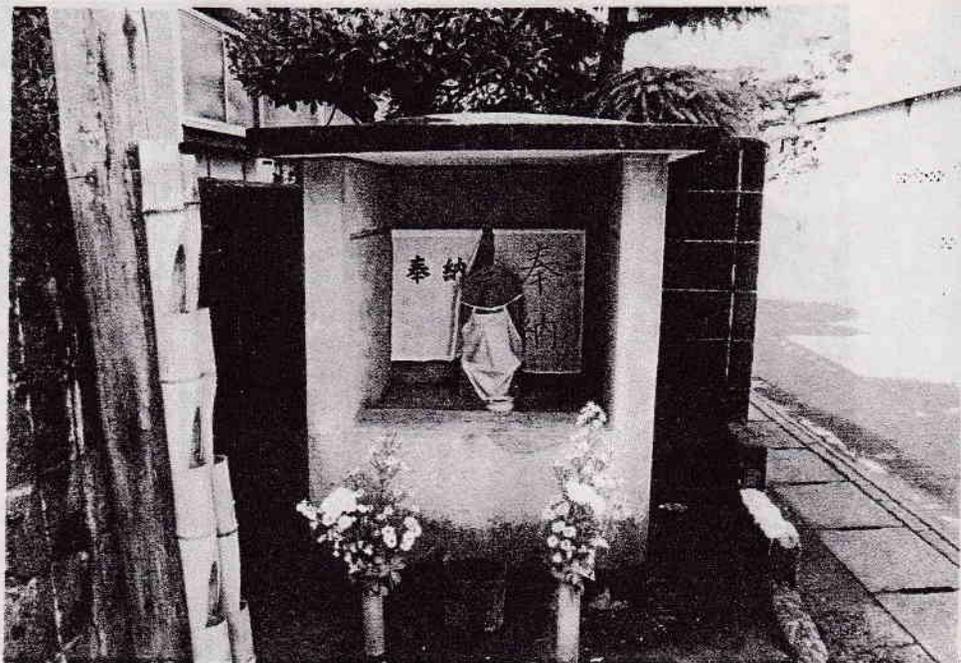


写真 3・29 中津代里・西小路地蔵

次は会所より西の北側へ入る小路の角にある石地蔵で、高さ一五〇釐 間口一〇二釐 奥行八一釐 ブロック造り陸屋根の地蔵堂の中に鎮座されている。

地蔵は、舟形光背の中に蓮華座を刻み立像地蔵が彫り出されており、全高さ四九釐 身高二九釐 肘張一二釐 肩幅八釐 顔高八釐 顔幅六釐で、五二釐の内台座上に立っている。香台に奉納としてあるだけで、他に文字は見えない。

（語りべ学習会）

23 ○ 中津代里地蔵（光岡氏方）（マップ番号 44）

所在地 熊本市沼山津三丁目九番三七号

沼山津三丁目九番の光岡氏方の道路に面した三叉路に、高さ六六釐 間口六二釐 奥行五五釐のブロック造りコンクリート屋根の祠があり、その中に舟形光背を持った石地蔵立像が、高さ五八釐の台座基礎、高さ六釐の蓮華座の上に安置されている。

舟形光背高さ五〇釐 地蔵の身高さ三四釐 肘張一二釐 顔高九釐 顔幅六釐である。光背に「戊寅文化一五年（一八一八）五月吉日 弥富」と刻してある。

（語りべ学習会）

24 ○ 下津代里・北村組地蔵（マップ番号 47）

所在地 熊本市沼山津三丁目一四番四八号（一六〇八番地）（下津代里）

四時軒の東約一五〇釐ほどの沼山津三丁目一四番四八号（下津代里一六〇八番地）にある。三段の石垣の上に三尺四方の小堂があり、その中に舟形光背をもつ石地蔵が両手に宝珠を捧げ立っている。

光背には銘刻はなく、台石に「安永六年酉二月吉日 西沼山津若者中と記されている。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

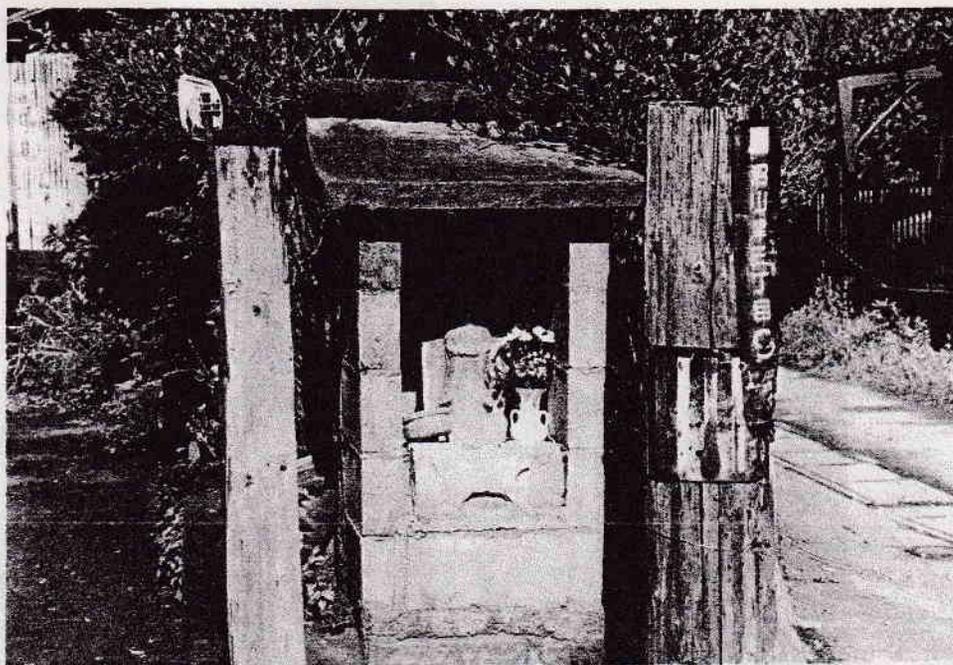


写真 3・30 中津代里・光岡氏方地蔵

建立は安永六年（一七七七）二月吉日。

地蔵堂は、間口一〇一センチ、奥行一〇六センチ、高さ一〇八センチ木造瓦葺き。

高さ九〇センチの石組の基礎の上に、高さ四〇センチ、幅二五センチ、奥行二五センチの台座がある。

石像地蔵は、光背迄高さ六九センチ、蓮華座一一センチ、身高さ三五センチ、肘張一二センチ、肩幅一〇センチ、顔高九センチ、顔幅七センチである。

台座に「安永六年酉二月吉日 西沼山津若者中」の刻銘がある。

（語りべ学習会）

25 ○ 下津代里・須崎組地蔵（マップ番号 48）

所在地 熊本市沼山津一丁目二五番七七号（一六四九番地）（下津代里）

下津代里稲荷社の西、道角を曲がったすぐのところ沼山津一丁目二五番七七号（一六四九番地）に一小堂があり、舟形光背を持つ地蔵石像が安置されている。

顔面は磨耗しているが、両手に宝珠を捧げた立像で、蓮華座の花弁は二重に縁取りされている。光背右に明和元年（一七六四）左に甲申九月とあり、台石はこの地蔵のものであるかどうか不明ながら次のように彫られている。

「俗名 宇吉 恵吉 宇太良 幸吉 茂市 大八 十歳 □もせ」

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

建立年月日 明和元年（一七六四）九月

地蔵堂 高一四六センチ 間口一一二センチ 奥行九九センチ ブロック造り陸屋根

地蔵 舟形光背 光背迄の全高一〇五センチ 二重蓮華座一一センチ

立像高二八センチ 肘張八センチ 肩幅八センチ 顔高八センチ 顔幅六・五センチ

台座 中台高三八センチ 幅二二センチ 奥行一八センチ

下台高二〇センチ 幅三二センチ 奥行三〇センチ

刻銘 光背右に「明和元年」左に「甲申九月」、中台に「俗名 宇吉 恵吉

宇太良 幸吉 茂市 大八 十歳 □もせ」と記されている。

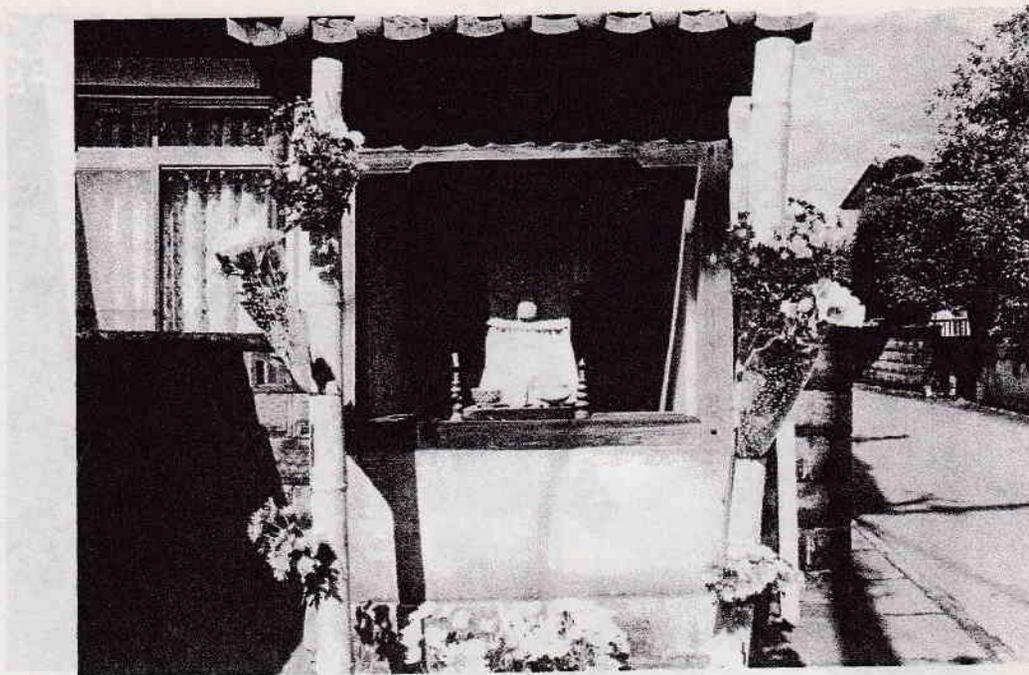


写真 3・31 下津代里・北村組地蔵

光背右に「明治元年」左に「甲申九月」、中台に「俗名 宇吉 恵吉 宇太良 幸吉 茂市 大八 十蔵 □もせ」と記されている。

五ヶ所(須崎)に一本山(須崎)に高一五八八石(須崎)と云う(須崎)あり」とあり、なお「須崎」という小村(こむら)もあつたと伝えられる。(角川日本地名大辞典四三 熊本県)

又、字名に「須崎原(すざきばら)」という地名があつたが、「須崎組」とはそれに関連があるのかも知れない。元須崎原に住んでいた人達が現須崎組地蔵付近に移住してきたとも考えられる。

(語りべ学習会)

26 ○ 下津代里・彼岸花地蔵 (マップ番号 64)

所在地 熊本市沼山津三丁目一七番一号 秋津浄化センター内

(現存しない)

沼山津の下津代里 旧蔵田氏方前にある石祠である。石祠は屋根つきで、屋根の中央に破風が設けられている。

中に舟形光背を持った地蔵立像が安置されている。地蔵は二重に縁取りした蓮華座上に立ち、袂は風に吹かれて右(向かって)に靡いている。

光背には右に「寛政五年(一七九三)己丑三月日」、左に「弥富氏□□(施主)」とあるが、この石祠はもと秋津浄化センター裏の沼山津貝塚(字貝原)に安置されていたものである。おそらく寛政五年頃、貝原で開墾中に人骨に掘り当てたため、弥富氏が施主となって供養の地蔵を建立したものであろう。

浄化センター設置後もこの地に石祠は現地に存在したが、昭和四五年(一九七〇)現地から消失した。

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

○ 中無田地蔵群

27 上の丁下組地蔵 (マップ番号 49)

所在地 熊本市秋津三丁目二番五八号

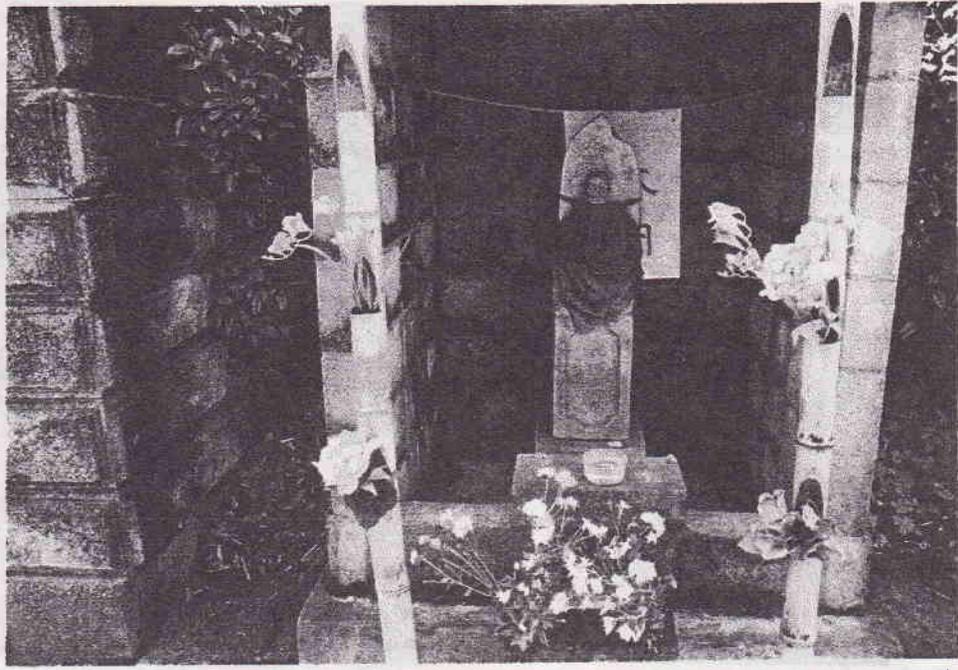


写真 3・3・2 下津代里・須崎組地藏



写真 3・3・3 中無田・上の丁下組地藏

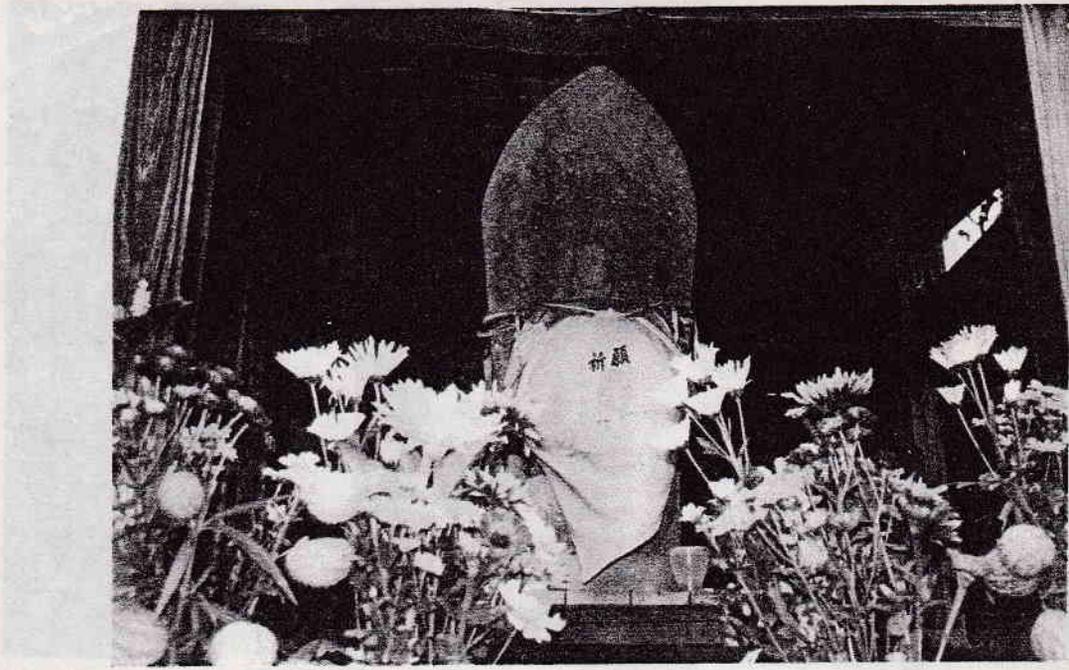


写真 3・34 中無田・上の丁上組地蔵

秋津二丁目十番二四号の道路に面して間口一三五〇 奥行一一〇〇 軒下高さ一一二〇 屋根高八〇 石地蔵立像が安置されている。

舟形光背全高さ四六〇 蓮華座高九〇 地蔵の仏高さ二四〇 肘張り九〇 肩幅九〇 顔高六〇 顔幅五〇である。

台座は、高さ二五〇 幅三一〇 奥行三〇〇。

年代は不明、大正末頃と思われる。小振りな地蔵で新しいわりには磨耗している。かつて此処の付近は子供の遊び場で、地蔵が小さいので子供達がよく押し倒して遊んでいたとのことである。

光背には記名はないが、台座には次の十三名の名前が刻んである。

「吉本政彦・三藤恒記・三藤俊雄・北野繁三郎・緒方政次・小田亮三・山本直記・

濱口善九郎・松本ウラ・高野保太・吉村二九次・赤星栄吉・岡田スエ」

(かたりべ学習会)

28 上の丁上組地蔵 (マップ番号 50)

所在地 熊本市秋津二丁目一四番二四号

秋津二丁目十番二四号の道路に面して間口一二〇 奥行一一八 棟までの高二一五の銅板葺きの祠があり、その中に舟形光背・合掌印の石地蔵立像が安置されている。

建立年月日は、安永七年(一七七八)甲戌(戊戌)二月吉日。

舟形光背全高さ八六〇 内蓮華座高一二〇 地蔵の像高さ三八〇 肩幅一五〇 顔高九〇 顔幅六〇である。

台座は、高さ三九〇 前幅三二〇 奥行三〇〇である。

台座には次の銘がある。

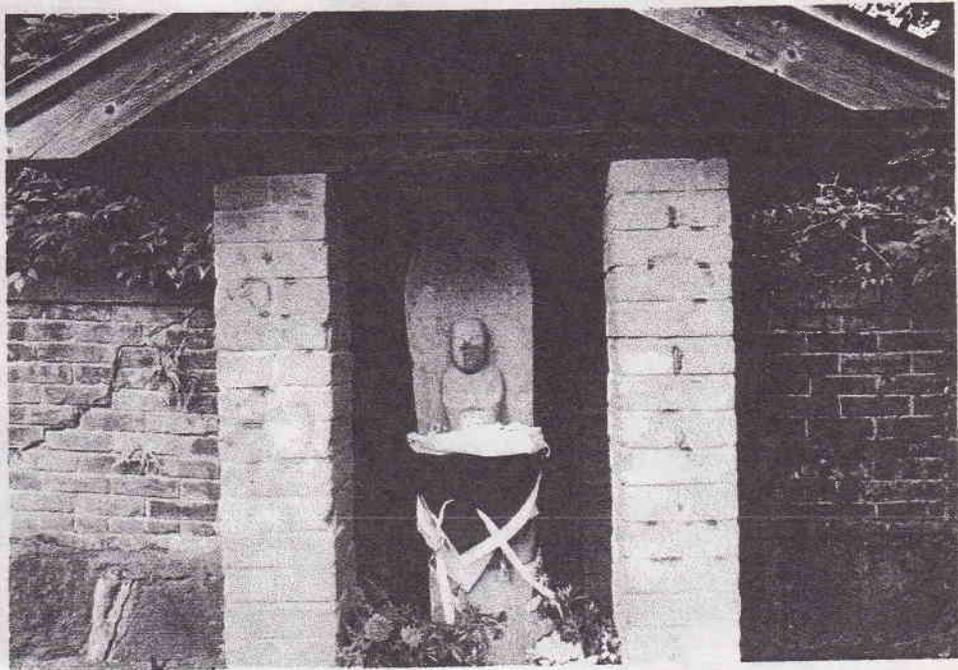


写真 3・35 中無田・下の丁地蔵

左面	正面	右面
中無田村 七中 若者中	安永七甲戌 法田介苗内聖 二月吉日	昭和五十一年十月改築 (墨書)

(語りべ学習会)

29 下の丁地蔵 (マップ番号 51)

所在地 熊本市秋津二丁目一二番三二号

秋津二丁目十二番の道路角に面して間口九五〇、奥行一〇〇、軒下高さ一二〇、屋根高さ五三の屋根木造で塀にマッチした煉瓦作りの祠があり、その中に舟形光背・合掌印の石地蔵が立っている。

建立年月日は、明和九年(一七七二)辰稔正月吉日。

蓮華座共で舟形光背全高さ八〇、地蔵の仏高さ五八、肘張二三、肩幅一三、顔高一〇、顔幅七である。

台座は、高さ四〇、幅二五、奥行二五、台座と花台に次の銘がある。

台座に	明和九年辰稔
法田介苗内聖	
正月吉日	

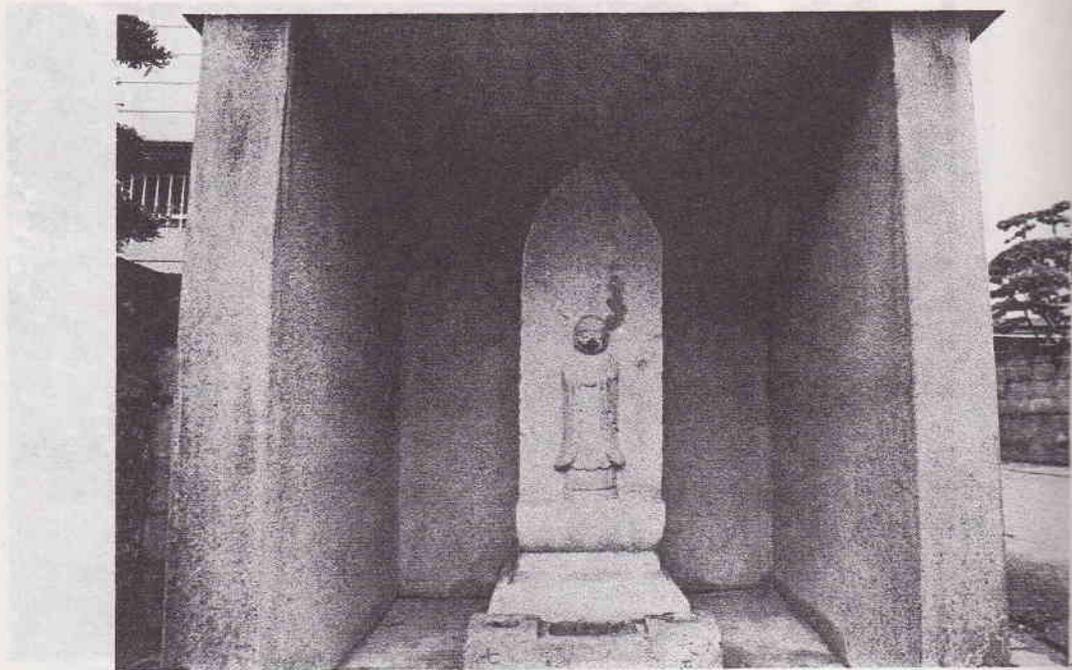


写真 3・36 新村地蔵

30 ○ 新村地蔵 (マップ番号 52)

所在地 熊本市東野一丁目一九番三二号

東野一丁目一九番の道路に面して間口一・八・五呎 奥行九二呎 高さ一三六呎のコンクリート陸屋根の祠があり、その中に舟形光背の石地蔵が立っている。

建立年月日は、天明五年(一七八五)乙巳吉日。

舟形光背全高さ一〇一呎 地蔵の身高さ三七呎 肘張一一呎 顔高八呎 肩幅一〇呎 顔幅七呎である。

蓮華座幅三〇呎 高さ一五呎。台座幅三〇呎 高さ一五呎。

祠は、大正十二年(一九二三)に改修されており、七人の世話人が「大正十二年(一九二三)七月吉日寄進」と記銘のある手水鉢を奉納している。

光背に仏語らしいものが彫ってあり、光背と花台に次の銘がある。

花台に	
大正拾年拾月吉日	
奉	寄
世	進
濱口浅吉	住岡 清
話	西 虎熊
土田 肇	西 虎熊
人	清野安雄
清田□雄	清野安雄

(語りべ学習会)

正月吉日

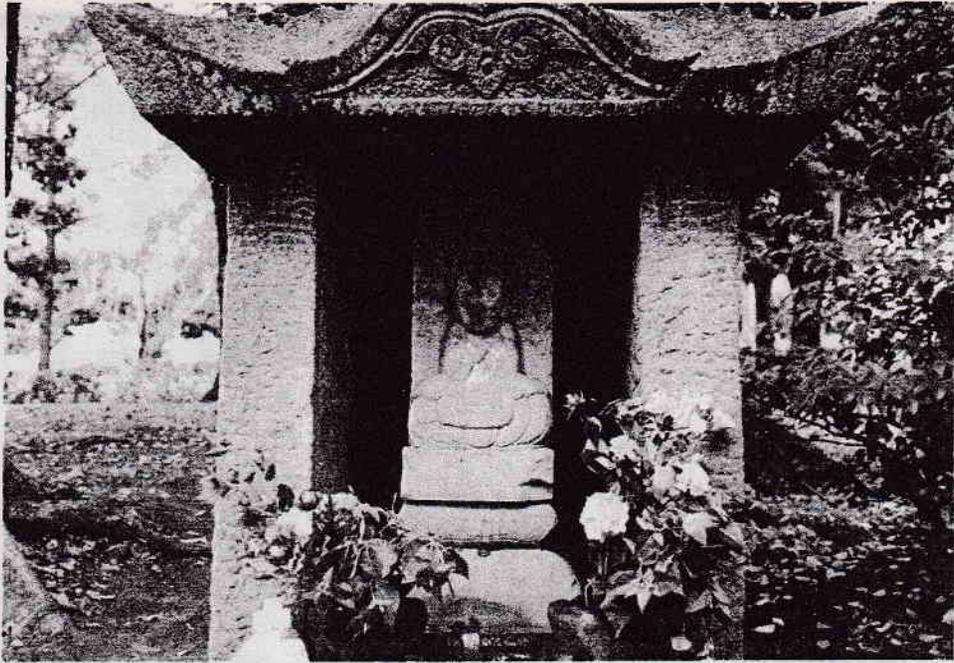


写真 3・37 新村の弘法さん

31 新村の弘法大師 (マップ番号 65)

所在地 熊本市秋津新町四 (水玉公園内)

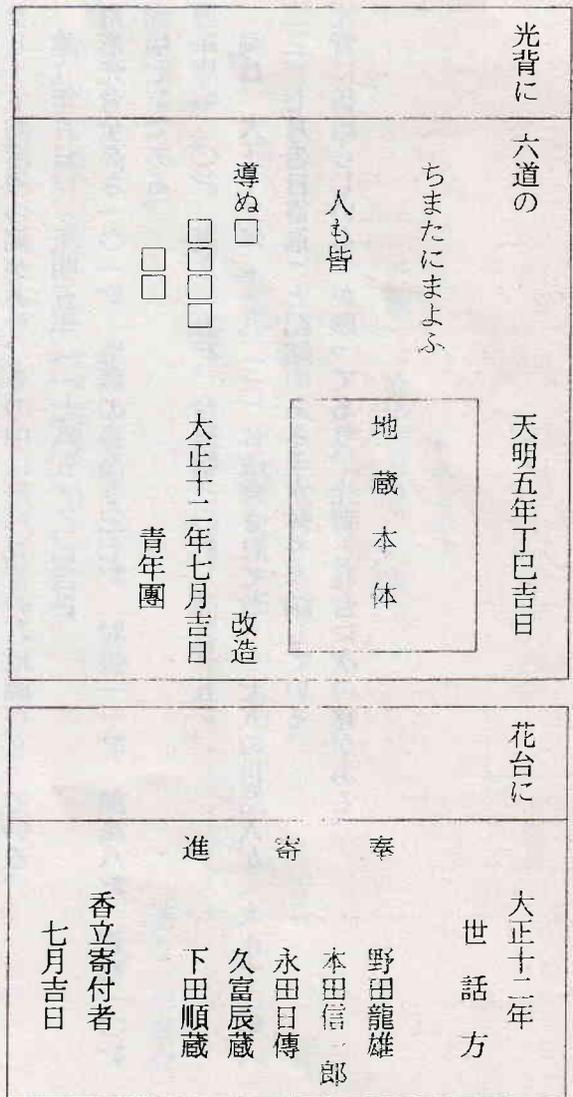
新村の弘法さんと言われて、元「字境塚」(現在の東野四丁目二番町付近)の「やんぼし塚」にあつたものを、昭和九年(一九三四)四月「字水溜」(現在の秋津新町)に移設して祀っていたが、戦後住宅化の進展に伴い、さらに水玉公園内に移設安置された。

間口八五呎 奥行六八呎 軒下一〇六呎 屋根高さ五五呎 屋根正面は唐破風の石作りの祠に、その中に舟形光背・蓮華座で左手膝上に念珠を持ち、右手は胸に獨鈷持つ石像が祀ってある。

建立年月日は、弘化三年(一八四六)丙午二月

地蔵は、全さ高一〇三呎 座像高さ三三呎 膝張二五呎 肩幅一二呎 顔高一一呎 顔幅九呎である。

台座は、一段台座二三呎 二段一五呎 三段九呎 四段九呎の高さで、台座に



(かたりべ学習会)

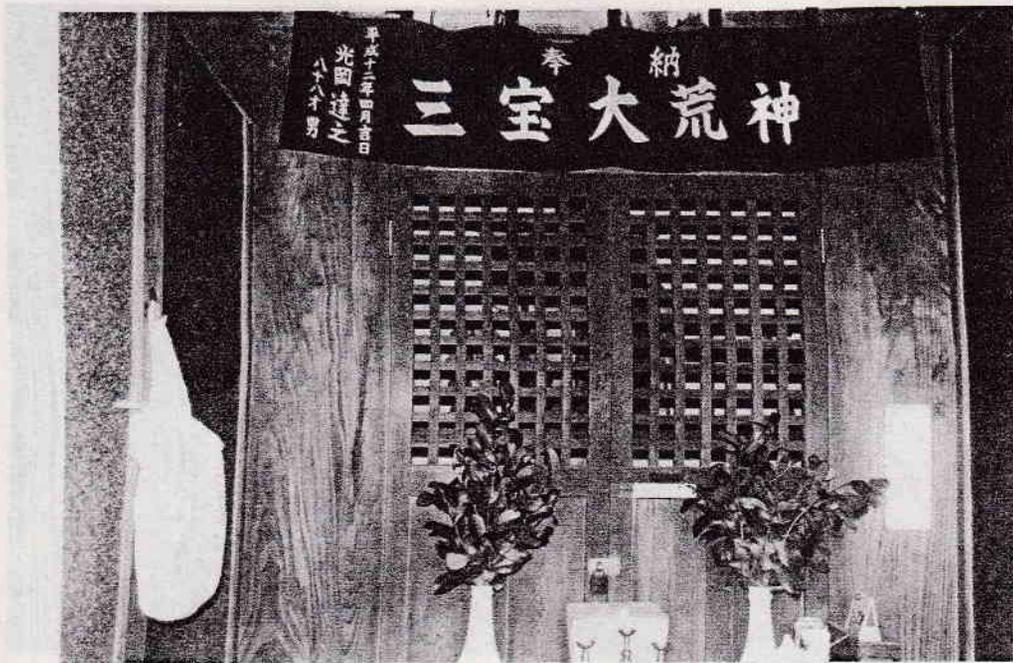


写真 3・38 三宝大荒神

九段である。
台座は、一段台座二二〇釐 二段一五〇釐 三段九〇釐 四段九〇釐の高さで、台座に

一新村 弘化三丙午年 為一切衆生 二月吉辰 施主喜明院」と銘記がある。
又、祠の左壁に「昭和九年四月二二日 村方全部当って移設す 七人 世話人」と彫んである。

仏体は風化がひどく顔面が崩れかけている。多分昔は露像だったと思われる、堂は新しく移転時に造ったものか。

〔台座に〕

〔堂の左側壁の内側に〕

新村
弘化三年丙午二月
為一切衆生
二月吉辰
施主
喜明院

昭和九年四月二十一日
村方全部出テ
移転ス
世話人
世話人
田浦清八
田浦伊一郎
永田文記
吉村文雄
村上壽一郎
上田國太郎
村上清蔵

注

(西曆一九三四)

(語りべ学習会)

32 二二〇玉大荒神 (マップ番号 62)

所在地 熊本市沼山津四丁目五番二五号

沼山津四丁目五番二五号の家屋東横まで道路から奥に入った所に、間口一九〇釐 奥行三三四釐 高さ三〇〇釐(内基礎高二〇釐)の木造瓦葺きの小堂があり、三宝大荒神が祀ってある。

御神体は神棚の中に安置されていて、外部から拝見することは出来ない。
西浦の荒神さんより霊験あらかたと言われて崇拝されており、堂内も綺麗に掃除整備が行き届いて周辺の人々の信仰の深さが窺われる。



写真 3・39A 酒井氏方大歳神

堂内に「新築 昭和五十七年（一九八二）一月吉日 三五名の奉納者の名前」が墨書されておられ、又「昭和二年（一九二七）二月 勝山政吉奉納」と記銘された花立が奉納されている。しかし手水鉢には銘がない。

（語りべ学習会）

33 上津代里王石像物（マップ番号 61）

所在地 熊本市沼山津四丁目五番（酒井氏方）

沼山津四丁目五番の酒井軍太郎氏方に堂宇と一基の石碑がある。

縦一〇〇センチ 横六五センチ 高さ九二センチの台座の上に、総高さ九三センチ 最大幅二八センチの自然石の表面を高さ四一センチ 幅一九センチに彫り凹めて平面をつくり、「大歳之大神、護孫明神」と二行にわけて記されている。碑の後ろには大きな椎の木がある。

（熊本市東部文化財調査報告書）

酒井氏方では、二一八センチ×二二〇センチの堂をつくり、「農作業の神」として敬神されている。

（語りべ学習会）

34 中津代墓地と板碑群（マップ番号 63）

所在地 熊本市沼山津三丁目十番

秋津の集落には、昭和の初期まで、古墓・新墓と称して二ヶ所以上の墓地があったが、納骨堂の建設に伴い墓地が整理された。最も古い現存墓地として中津代里がある。

御船く熊本線産交バス沼山津停留所のすぐ横に、「通称 堂ん前の観音さん」と呼ばれる薬師堂がある。

そのすぐ北側に、光永家を中心にした墓地がある。

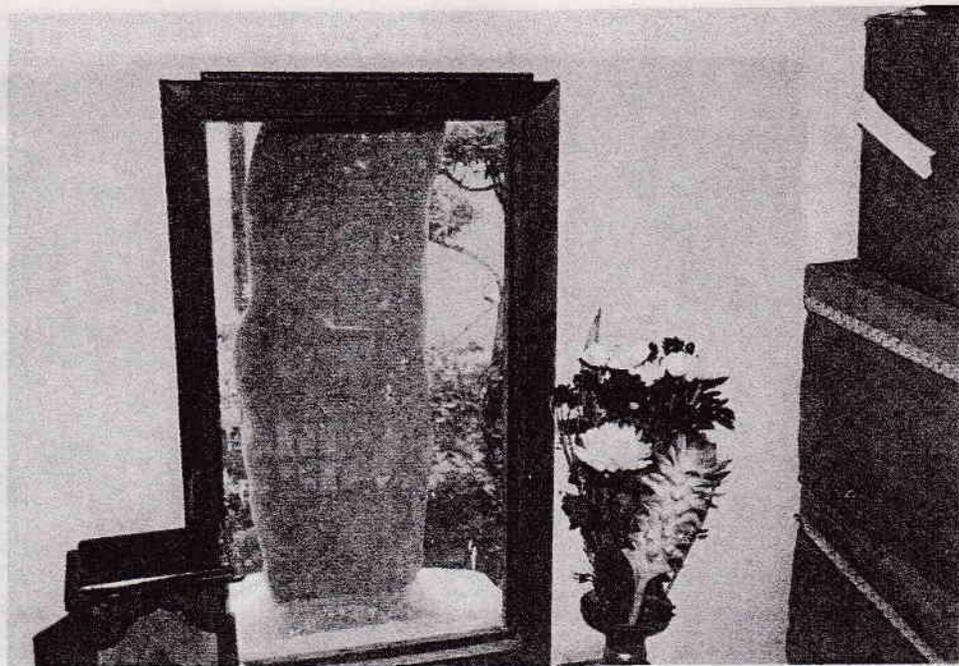


写真 3・39 B 酒井氏方大歳神

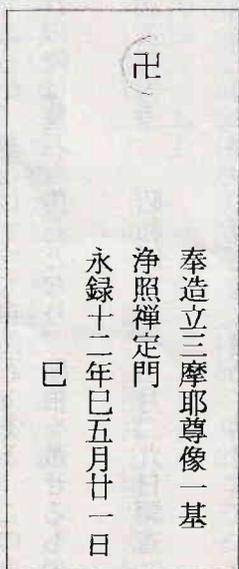
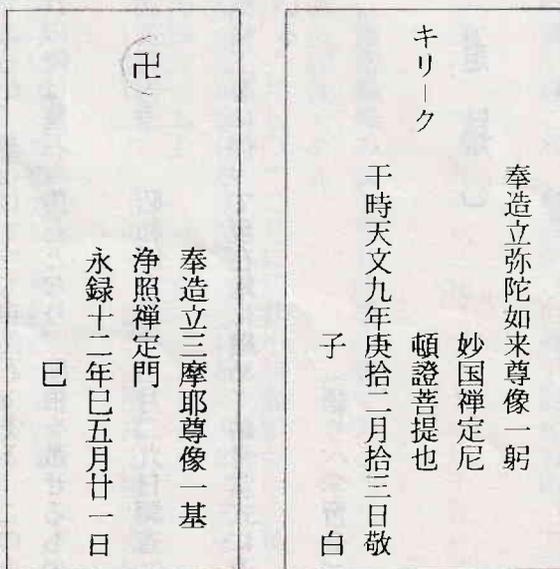
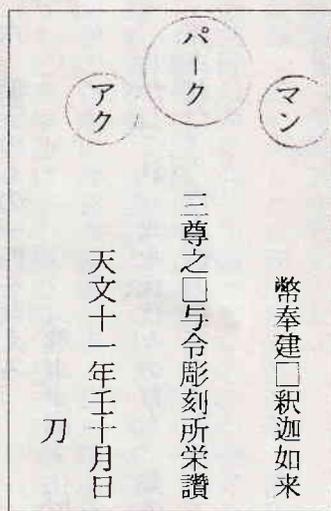
そのすぐ北側に、光永家を中心にした墓地がある。

○ 板碑群

墓の中に四基の板碑が、西向きに建てられているが、戦国期の板碑がこんなに一ヶ所に集中しているのは珍しく、西山地区の成道寺の三基以外にはその例をみない。

板碑は、安山岩か砂岩様の自然石を板状に加工し、片面を粗く研磨したもので、周囲は自然石のままである。

現在の配列は天文十一年（一五四二）碑を最前列（西）におき、その右後（南）に天文九年（一五四〇）碑をおき、後列左側（北）に永録十二年（一五六九）碑、右に無名碑が立てある。



35 ○光永家墓地 熊本市沼山津三丁目一〇番

光永氏は阿蘇氏の一族と称し、中世末下陣城主となり、近世には在地豪族として寛永の頃より明治に至るまで沼山津・高森など諸手永の惣庄屋をつとめた家である。

板碑群の後方一帯に、光永氏代々の墓が一群をなして建っている。

永録十二年碑のすぐ前には高さ七〇釐ほどの寛文六年（一六六六）の自然石の墓碑があ

(享保四年以降)



写真 3・40 改葬前の光永氏墓地

り、正面中央に「南無阿弥陀仏 釈迦牟尼 玄禪定門 靈位 光永久七 欽立」と記し、左右に「寛文六年（一六六六）二月廿四日」と刻んでいる。

それに続くものは寛文十一年（一六七一）五月一三日の「南無阿弥陀仏 釈迦牟尼 安禪定門 不 退位 光永久七 欽立」で、

次に貞享四年（一六八七）二月七日の「釈了心 禪門」、

元禄四年（一六九一）正月二〇日の「釈妙忍 禪尼 不退」、

正徳二年（一七一一）七月九日の「栄玄居士」など順に並んでいる。

以上の墓は下の台石は加工された方形石であるが、墓石はすべて自然石である。このあとは享保四年（一七一九）となるが、それ以降は墓石も角石となり、屋根を載せるもの六、無蓋のもの一四を数える。

（熊本東部文化財調査報告書 昭和四六年二月二九日調査）

しかしこれら光永氏代々の墓も、県道拡幅工事に伴って現在地に纏めて納骨堂式に改葬された。堂ん前の観音さんと並んでいる。

（語りべ学習会）

〔歴史遺跡〕

36 小楠公園 (マップ番号 78)

所在地 熊本市沼山津四丁目一 一番

産交バス小楠公園前下車三分。沼山津の東端、益城町境に近く、県道木山線の南側のこゝにもりと茂った公園。

この小楠公園には横井小楠の墓（髪塚）と小楠先生頌徳之碑および小楠銅像が建てられている。

この地の小楠の墓は、京都での遭難の後に、門人岩男俊貞氏が持ち帰った遺髪を葬ったものである。

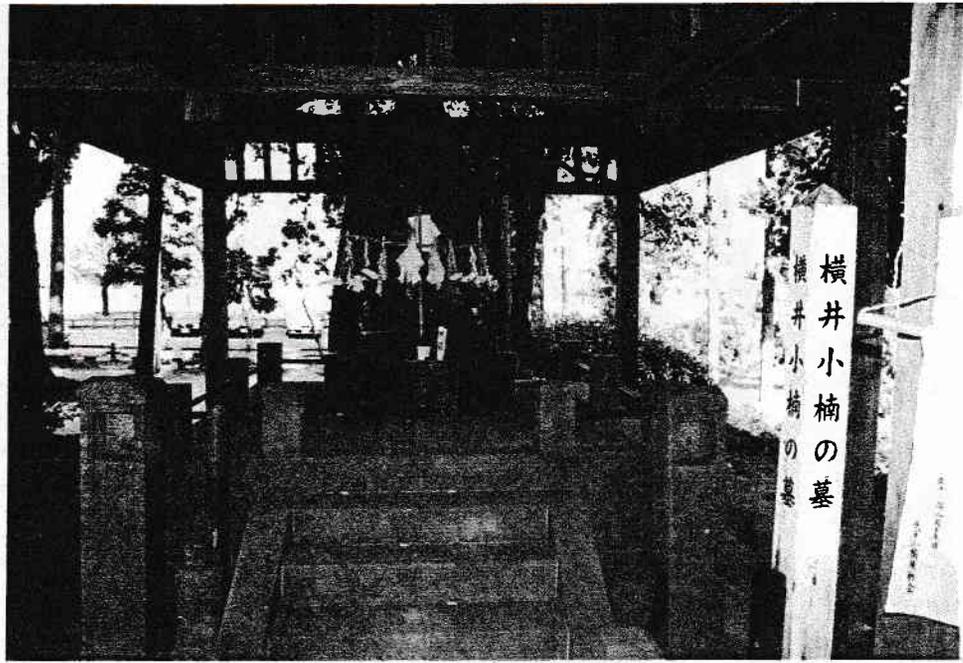


写真 3・4 1 小楠公園・横井小楠の墓

この地の小楠の墓は、京都での遭難の後に、門人岩男俊貞氏が持ち帰った遭難を葬ったものである。

古老の話では「飯田山の見える小高い場所にとの」かねての小楠の言葉により、この地が選ばれたとのことである。

墓碑は自然石で、正面に飯野村（益城町）の書家水野貞秀の筆で「小楠先生 横井君之墓」と彫られ、裏面に「明治二年（一八六九）己巳正月五日」と記されている。

墓はもと平地に、三尺角の椽取石を置いて建てられていたが、明治百年を記念して畳上げされ、地上六十センチの高さに石垣を積み、その上に持ち上げられている。

墓前には、「大正七年（一九一八）一月五日 本家彌富奉燈」と記した一對の燈籠が立てられている。

墓の西隣には巨大な小楠の頌徳碑が建っている。これは大正七年が小楠没後五十年に当たるので、その記念事業として頌徳碑建設の議が起り、皇室からの御下賜金もあって建設された。

天草の登立の飛岳の巨岩を整若して碑文を刻み、大正九年（一九二〇）十一月十五日に現在地で除幕式が行われた。

篆額（てんがく）は細川護立侯の筆、碑文は徳富蘇峰の撰で横井時敬の書である。

頌徳碑の西に今一つ建っているのが横井小楠の銅像である。

この銅像は没後百年を記念して昭和四十五年（一九七〇）二月に横井小楠顕彰会（会長 彌富秀次郎）が建設したもので、熊本市在住の彫刻家田島亀彦氏の手に成るものである。

銅像の台座には日本談義主宰 荒木精之氏の撰文がある。

なおこの銅像は、小楠の唯一枚の写真をもとに製作されたもので、原型は横井小楠記念館に展示されている。

毎年二月十五日墓前祭が、地元の顕彰会の手によって盛大にとり行われている。

昔は沼山津郷地区の学校（七・八ヶ村）の小学校六年生の参加があった。今でも地元秋津桜木・桜木東小学校の児童代表が参加している。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌、秋津の歴史）

横井小楠顕彰会により建設された銅像は、昭和四十二年（一九六七）一月建立計画立案同年八月より募金活動開始。地元は勿論顕彰会の役員達は県内外・阪神・京浜方面まで出向いて関係者・協賛者への募金を呼びかけ活動する。

熊本県五〇万円・熊本市二〇〇万円・一般の寄付金三〇九万四千四七三円・合計五五九万

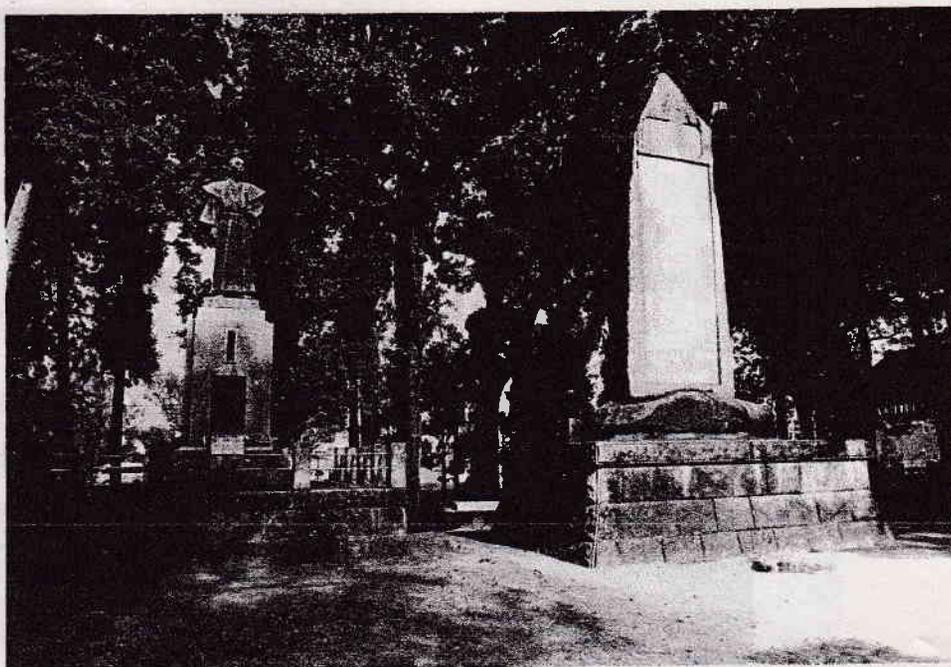


写真 3・4 2 小楠公園・小楠の頌徳碑と銅像

四千四七三円の浄財が集まる。

昭和四十四年（一九六九）十一月一日銅像起工式。一〇一回忌目の墓前祭に当たる昭和四十五年（一九七〇）二月一五日除幕式。
銅像は、横井小楠顕彰会より熊本市に寄贈された。

（かたりべ学習会）

37 四時軒（マップ番号 71）

所在地 熊本市沼山津一丁目二五番九一号

熊本市指定有形文化財（昭和四十三年八月二三日指定）

市バス野口健軍線、秋津小楠記念館行きで秋津終点下車五分。横井小楠こと横井平四郎時存の旧居である。小楠がここに移ったのは、安政二年（一八五五）五月のことである。兄時明が病死した後、小楠が家督を継いだ。城下町での生活は困難であったので、生活立直しのため在宅願を出して、相撲町からここ沼山津に移転した。

家を「四時軒」と名づけ、雅号を「沼山」と称した。若くして、藩校時習館の居寮長となった。小楠は江戸留学を命ぜられたが、書物の上での学問に満足せず帰郷した後、沼山津に塾を開き、実学派のよりどころとなった。

小楠は、安政五年（一八五八）から、越前福井藩に招かれ、幕府に建言書を差出し採用されるなど名声は高まる一方であったが、文久三年（一八六三）江戸に於ける土道忘却事件を口実にして、武士の身分を取り上げられ、沼山津に蟄居させられた。

然し、彼の評価は変わりなく、慶応三年（一八六七）大政奉還されるや、明治元年（一八六八）新政府の参与に召出されたが、翌二年一月五日京都で惜しくも暗殺された。

小楠の沼山津在住は、前後合わせて約八年八ヶ月であったが、四時軒での生活が、彼にとって最も充実した時期であった。

茲には、坂本龍馬を始め幕末に活躍した多くの人々が訪れ、彼の教えを受けた。

私塾は早く解体され、住居の一部も明治年間に焼失したため住居の一部、即ち玄関と二畳の座敷、四畳の板の間、縁側、廁だけで、中二階の物置が続いているのみであった。

小楠顕彰の気運が高まり、小楠記念館が昭和五十七年竣工した。

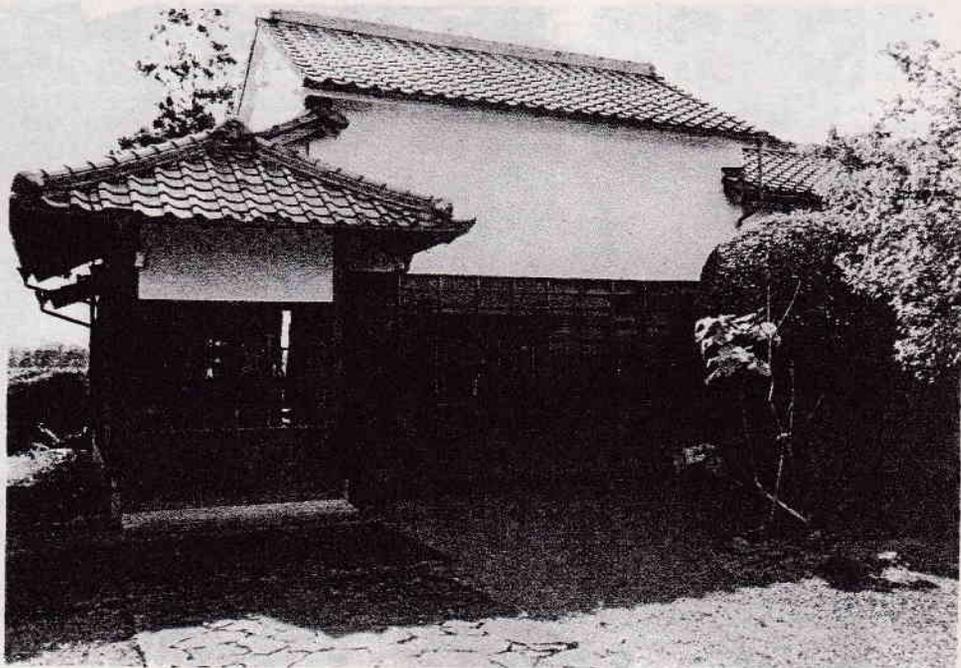


写真 3・4 3 四時軒

小権顕彰の気運が高まり、小権記念館が昭和五十七年竣工した。

なお小権先生についてのいろいろの参考資料は、記念館に展示されている。

(秋津小百周年記念誌、秋津の歴史)

38 四時軒跡 (マップ番号 71)

所在地 熊本市沼山津一丁目二五番九一号

熊本市指定史跡(昭和四三年八月一三日指定)

横井小楠が安政二年(一八五五)から明治元年(一八六八)までの一三年間に実質八年八カ月居住した四時軒の所在地である。

敷地のすぐ南に秋津川が流れ、一面にひろがる水田の先方には東南にかけて船野山・飯田山が眺められる。

小楠がこの旧居を四時軒と名づけたのも、春・夏・秋・冬四季折々の景色の絶佳をたたえた命名であった。

このことは徳富蘆花の『竹崎順子』の中でも言及している。

小楠は土道忘却事件でこの地に閑居していた間、弥富家を尋ねたり釣りや網打ちに講じたりして日々を送っていたが、今日ではこの旧居に残るものとしては遺愛の「さざんか」が一株あるだけである。

(熊本市史 別編第二巻 民俗文化)

39 沼山津壬子、永△云所跡 (マップ番号 73)

所在地 熊本市沼山津三丁目一〇番八七号の隣

御船く熊本線の産交バス沼山津停留所より、西へ五十メートルの処に五段石垣が残っている。この一帯が会所跡である。

遺跡としては、石垣の根石がそこそこにあり、古井戸や二百年以上を経たと思われる一本の榎、「門前・裏門・仕事場」などの地名が残っている。

熊本藩では地方(じかた)行政の区画として郡と村の中間に手永(てなが)が設定され

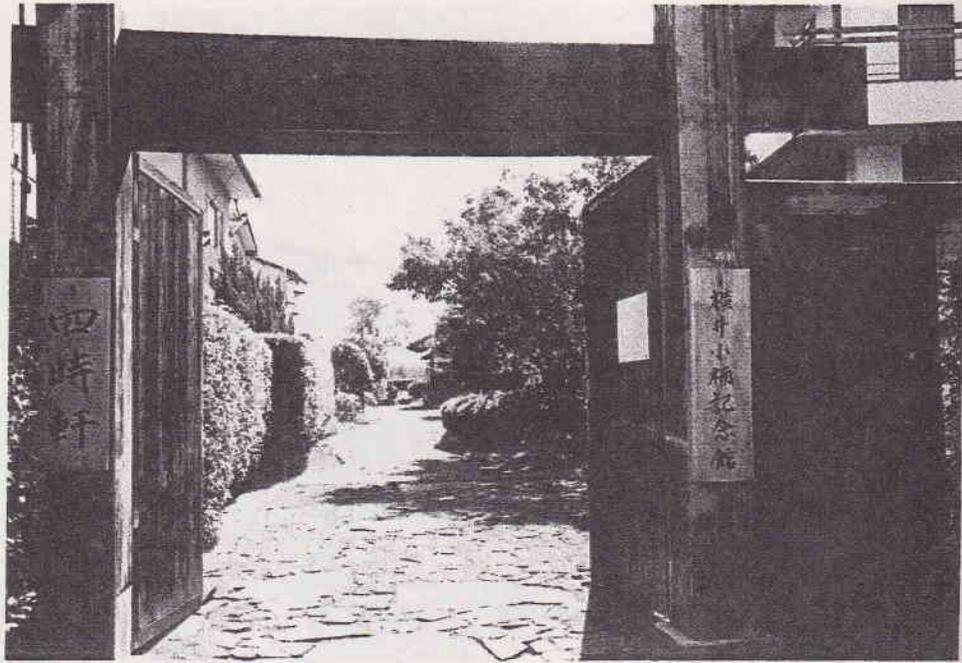


写真 3・45 四時軒跡

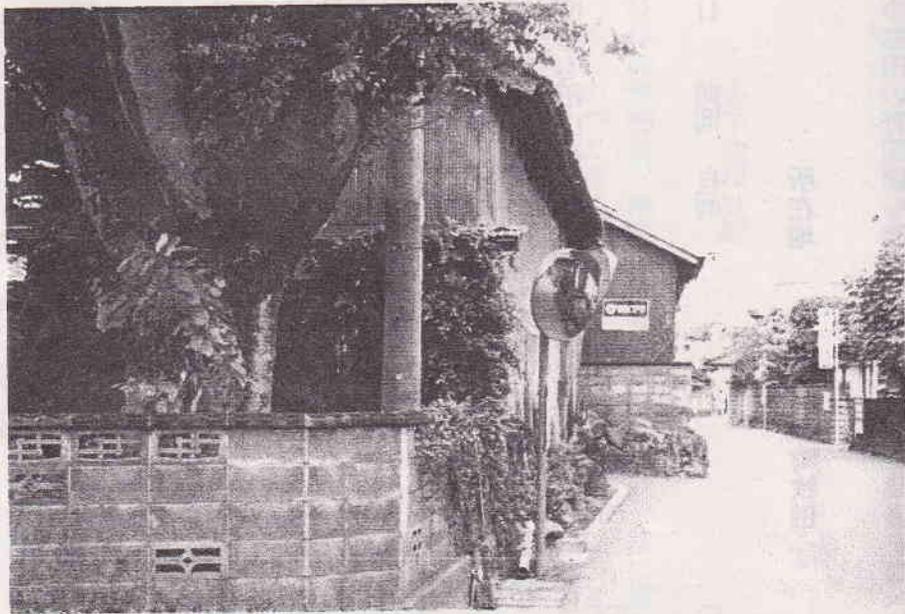


写真 3・46 沼山津会所跡

沼山津に戻った。

明治三年（一八七〇）改革により沼山津会所は廃止される。

（秋津小百周年記念誌

秋津の歴史・益城町史）

○ 光永氏

中世の時代、郷土の豪族であった。

光永一族は、阿蘇氏からの出で、益城郡下陳城主光永中務の弟に、光永刑部という者がおり、その孫が光永雅楽である。

寛永一〇年、沼山津の初代惣庄屋に任命されたが、以後寛永の頃から明治に至るまで木山・高森などの惣庄屋を務めた。

(秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

40 沼山津舟場跡 (マップ番号 76)

所在地 熊本市秋津町沼山津

会所跡より南へ約百五十疔の川辺(旧木山川・現秋津川の上沼山津橋の右岸)に舟着き場があった。

たびたびの洪水・河川改修にて、今は埋没してしまったが、昭和二十三年頃までは石段があって、昔の名残りを残し、集落の人々の洗濯場であった。すぐ近くには土蔵もあった。

江戸時代は舟による米・木材・日用雑貨・肥料などの運搬で重要な役割りを果していた舟問屋も沼山津には二軒あって隆盛をきわめたらしい。

(秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

41 間島 (マップ番号 93)

所在地 熊本市秋津町秋田

中無田の野間橋を渡って、六嘉く御船県道を南へ約二百疔、間島橋付近のことである。

間島は、藩政当時舟運の中心であった。山西・戸島方面の物資が、戸島往還によって運ばれ、ここから川尻に送られた。

又、赤井川(現木山川)は、間島から東無田・新川を上って赤井に達する舟航があった

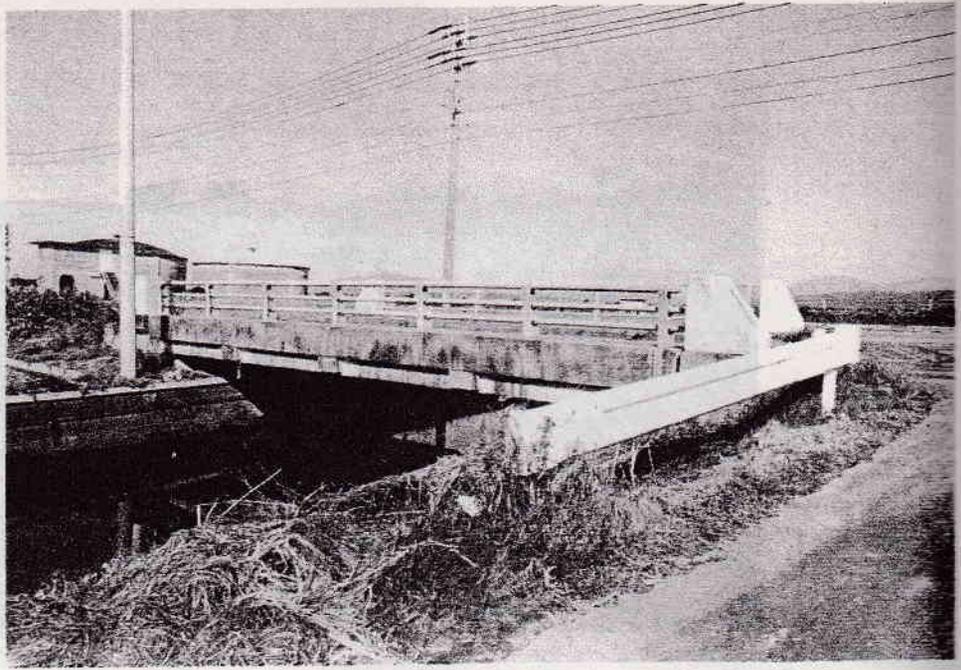


写真 3・4 7 万蔵堀と新万蔵堀橋

注記

写真の万蔵堀は、圃場整備事業（一九七八～一九九四）で旧万蔵井手の北側に掘られた幹線排水路橋は、県道小池竜田線との交差に架かる橋

又、赤井川（現木山川）は、間島から東無田・新川を上って赤井に達する舟航があつて

赤井・木崎部落にも現在船着き場の跡がある。ここは馬場橋・道明・戸島方面からの物資が、木山を経て船着き場に集められ、舟便で間島に来るのである。

年貢の上納の時期ともなれば、舟の上り下りも相当に頻繁であつた。明治の始めまでは、白い帆かけ舟が、間島から赤井川を上る姿がよく見かけられたところである。

（秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

水路跡

秋津の地勢は、西北から北にかけて託麻が原に連なり、阿蘇外輪山の裾がなだらかに北から南にのびた台地で、やがて秋津川に落ちている。

この台地の畑地は火山灰地で、水もちが悪く、一度大雨が降れば、畑の表面は一面水に被われ、それが凹路の道に集まり、濁流となって、恐ろしい野水（のみず）となって一気に秋津川に流れ、水かさを増して洪水となる。

梅雨末期の大雨は、どこかの集落の橋（土橋）が流失するか、秋津川の堤防決壊などがあり、その水害は年度行事であつた。

低地の水田に、一旦流れ込んだ泥水は、一面の海で一週間位或いは十日間もの永い間、水が引くことなく、流失物の処理は集落総出の公役作業であつた。

これら幼い頃の思い出をたどれば、昔の人々の水との戦いは想像に余りあるものがある。

もともと低地で水はけが悪いところに、加藤清正が、画図から川尻方面にかけて大堤防を築き、無田新地の造成で、託麻田園の穀倉地帯を作ったことにより、水害常襲地が一層ひどくなった。そのため水害に耐えきれず、集落こぞって他に住居を求めて移転した所もある。（現在の東野一丁目）

このような状態で、地域住民の生活は、将に心身共に苦悩の中に営まれていたが、折角の収穫も、水害のため皆無の年も多く、三年に一度とればよいという諦めの気持ちとなつた。

しかし先祖はどうにかして、この苦難から免れようと数百年の間、水利事業に努力を続けた。

注記

圃場整備事業前の新左衛門橋を上流より
写す

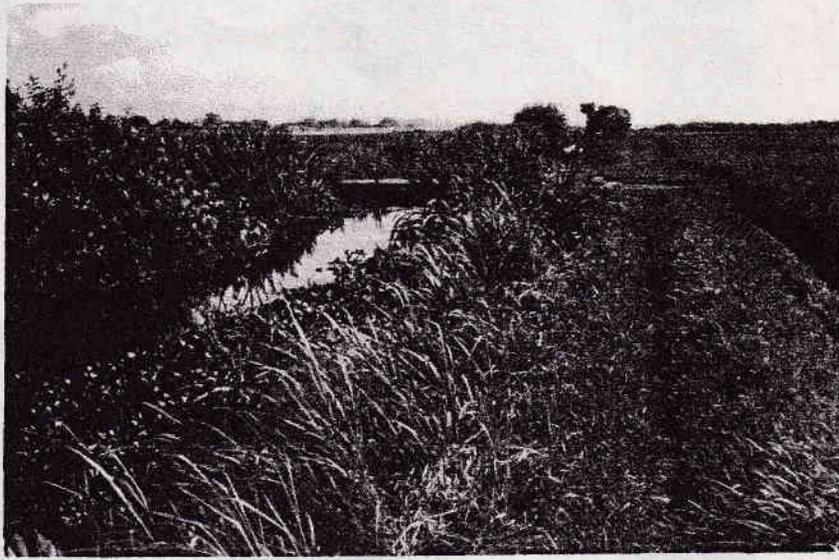


写真 3・48 昭和 5 年 8 月頃の 新左衛門 堀

42 ○万蔵堀（万蔵井手）跡

（マップ番号 94）

万蔵堀は、木山川と秋津川との間にあって、沼山津橋より南へ凡そ一〇〇〇㍍の地点を上流広安（現益城町）から西へ、中無田境に達している。
文化年間（一八〇四〜一八一七）、荒木万蔵（当時は上益城郡会所役人では）の手によって掘削されたもので万蔵井手とも呼ばれている。

43 ○新左衛門堀（しんじゃ堀）跡

（マップ番号 91）

万蔵井手の北側に並行して、間島横道の処に達している「しんじゃ堀」がある。
寛政の初期、中無田の庄屋 八重桜新左衛門の事業によるものでその名があり、堀は長さ四百二十二間・幅五間・深さ五尺。（長さ約七六〇㍍ 幅九㍍ 深さ一・五㍍）
その恩恵を蒙る田地二十町歩。墓は中無田の間島橋近くの県道沿いに今も残っている。

44 ○裏井手跡

（マップ番号 95）

万蔵井手・新左衛門堀（しんじゃ堀）の井手を裏井手に導いて、下流西無田懸かりの方に流したのは嘉永年間（一八四八〜一八五三）の惣庄屋河瀬安兵衛の嗣子 典次の力による。

（秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

これら東西幹線に対して無数の南北支線が掘られており、耕地面積より排水路の面積が広いのではと思われる位の状況である。

これらの改修で以前よりはよくなり、更に昭和になり、河川改修・排水ポンプの設置や土地基盤整備事業等が進められ、耕地の姿は一変したが、現在も水害の心配は免れない。
かつての万蔵堀（万蔵井手）・新左衛門堀（しんじゃ堀）・裏井手は付図二・三の

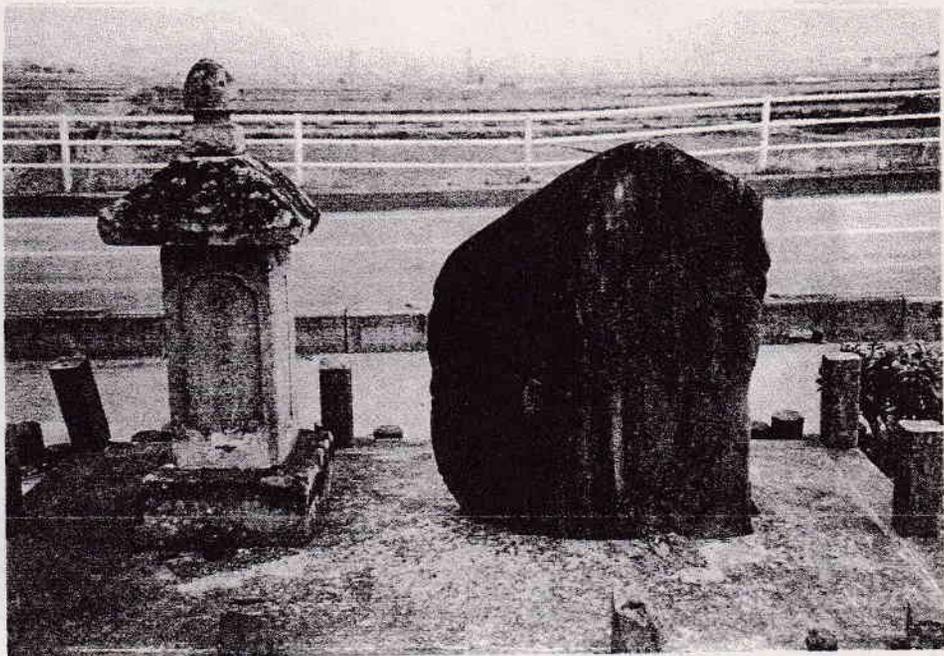


写真 3・50 新左衛門の墓と記念碑

〔注記〕

寛政十年は（一七九八）
昭和三十三年は（一九五八）

墓は、四八×四八 高さ二一〇の台座に、三〇×三〇 高さ六五・五の墓石、五一×五一 高さ二二〇の傘石、一五×一五 高さ二六〇の宝珠から出来ている。
なお息子の彌右衛門の墓は、出口の三藤氏の墓地内にある。（彌右衛門夫人は三藤家の出）

○新左衛門堀の碑

新左衛門堀の碑は、昭和三十二年（一九五八）五月にしんじや堀りのしもにあたる現在地に建てられた。

幅九〇 厚さ二五 高さ一一〇の自然石の碑が、二八〇×二八〇 高さ一八の基礎の上に建てられている。

正面の「新左衛門堀之碑」は当時の熊本市長坂口主税氏の書、裏面は当時の秋津村長富島末雄氏の碑文で次のように記されている。

<p>正面 新左衛門堀之碑</p>	<p>世話人 区長小田 亮三 富永彦次郎 三藤俊雄 吉本芳彦 高野 昇 住岡 清 浜口茂春 森下芳太郎 浜口久雄 園田政秋 三藤行雄 田島久之</p>
<p>裏面</p> <p>寛政の初期庄屋新左衛門翁此の地に新たな堀を通し用排水両用に便じた堀は長さ四百二十間幅五間深さ五尺其の恩恵を蒙る田地二十町歩村民歓喜して翁の功績を讃えた 本春初めて浚渫を行い翁の偉業を偲び感激新なものがある</p> <p>かくて新左衛門堀の名は永く伝わり村民ひとしく翁の餘徳を仰ぐのである</p> <p>昭和三十三年五月 中無田区民一同</p>	

（語りべ学習会）

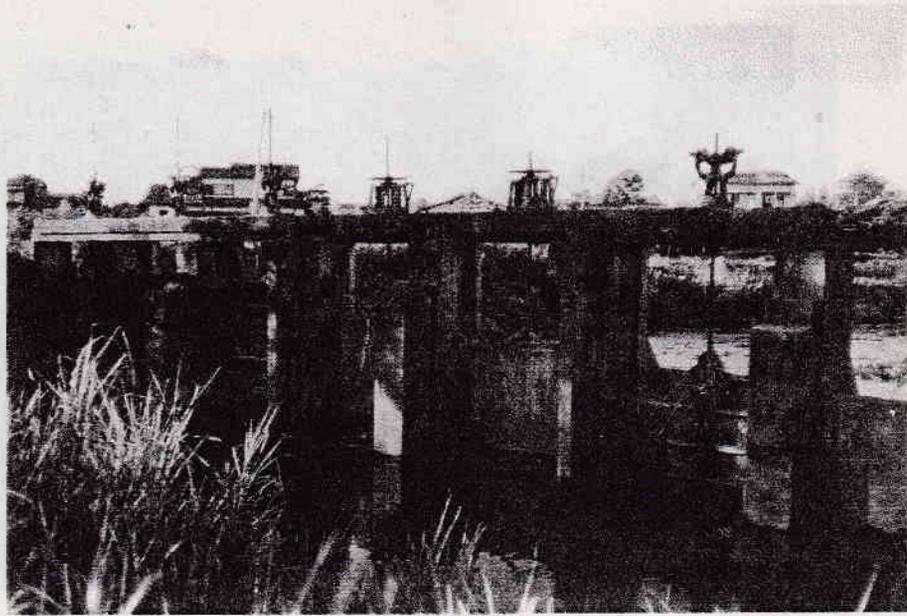


写真 3・5 1 昭和 6 1 年 撤 去 前 の 秋 田 堰

堰 跡 と 堰 回 想

46 ○秋田堰跡 (マップ番号 88)

野間橋から下流へ百米ぐらい下った位置に、熊本市水道局の水道管が南の岸より北の岸に向かって秋津川を横断しています。

この付近が元「秋田堰」のあった所です。いつ頃の年代に建設されたものかわかりませんが、石柱・石畳等石材だけを使用した作りで、セメントは使われていません。かなり古い年代に作られたものと思われます。

今は基盤整備事業成って堰も取り壊されて、昔日の面影はなく、人々の脳裏から忘れ去らんとしていますが、永い歳月にわたってこの堰の水が、中無田・西無田・沼山津の一部の水田を潤してきました。

田植えの時期がくれば一度も休むことなく「堰かけ」が行われ、先達から次の時代へと継承され、先人達は何を思い堰をかけてきたであろうか。

永々と続けられてきたこの行事も時の流れと共に旧から新へと移り変わり今は木山川から秋津川へと名をかえた。この川のしずかな流れを見るだけです。

秋田堰は「板堰」でありました。昭和二十年前後までの木山川は川幅が十六畝ぐらいであつたと思います。

堰所の所はくびれて狭くなつていて、十畝ぐらいであつたようです。堰所は右岸・左岸とも高さ三・五畝、横幅五畝ぐらいの石垣で護岸されていて、川底は石畳が敷かれています。

石垣の middle に「堰板」を架ける石柱が両岸に立てられていました。

根本(九十釐)・末口(六十釐)長さ十三畝ぐらいの丸太の一本物が北岸の上から南岸の石柱の上に架けられていました。この丸太を通称「オモノキ(重い木の意味)」と言います。

この「オモノキ」は堰所では重要な役目をする木です。次のような方法で「堰かけ」が行われていました。

先ず四本の中柱を岸の石柱より一間の幅をあけて立てて行きます。柱のホゾをオモノキの切り込みに、下を石畳の切り込みに組み込みますと五つの堰の間ができるわけです。

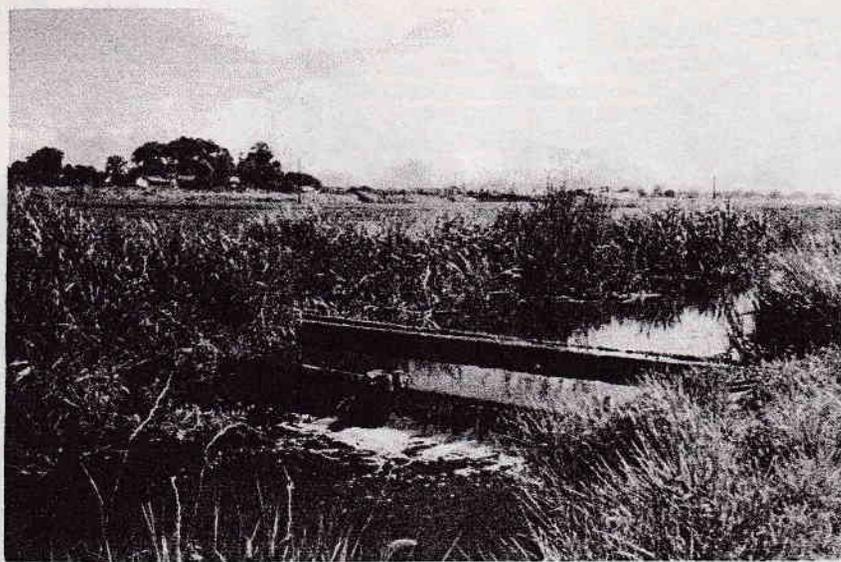


写真 3 ・ 5 2 しんじゃり堀の堰とかけ樋

堰板を一枚、二枚と二・五センチの高さまで積み上げていたようでした。柱と堰板に隙間があればクサビを打って、板と板との隙間には水漏れを防ぐためにワラなど詰めていました。以上で堰かけは終わりです。

十三センチのオモノキと四本の中柱、兩岸の石柱と堰板戸で堰が形成されていました。次に「堰おとし」となりますが、この堰はオモノキを少しこねると簡単に落ちます。

堰を落とす前に若い人がふんどし一つで下流の岸へ待機していき、オモノキをこねあげると同時に立柱がはずれ一時的ではありませんが、物凄い濁流が渦を巻いて流れる中へ、堰板を追って流れに飛び込み、遠くへ流れぬうちに拾い上げて岸辺につけていました。不思議と怪我などなかったものです。

(途中略)

大雨で川が増水してオモノキが動いて自然に堰が外れた事も何度かあったようでした。大雨増水するような時は堰板が遠くへ流れて紛失しないように早めに堰を開けていました。このオモノキは常時かけられていて子供の頃は「一本橋」と言って親しみ、よく渡ったものでした。

最後になりますが、堰かけは西無田(現在の若葉校区)と一年交替で行われていました。

(圃場整備事業完成記念「豊穰」浜口力蔵さんの堰回想による)

秋田堰は昔から板堰であった。

木山川改修の際支柱八間の頑丈なコンクリート製になったが、田植前に取付けた板は、秋の取入れ前まで其のままである。

それで大水の時、水の調節をはかることの出来るようにと昭和二十七年中無田・西無田両区長の幹旋で、土地改良区と村からの補助併せて約十五万円で、二間だけを上下開閉の鉄扉に改造、これによって漏水を防ぎ且つ水の調節をとる事が出来るようになった。富永彦次郎・内田莠両区長の幹旋が大であった。

(秋津村略史による)

昭和六十一年に秋田堰は撤去された。

(昭和54年圃場整備事業前・下流から見る)

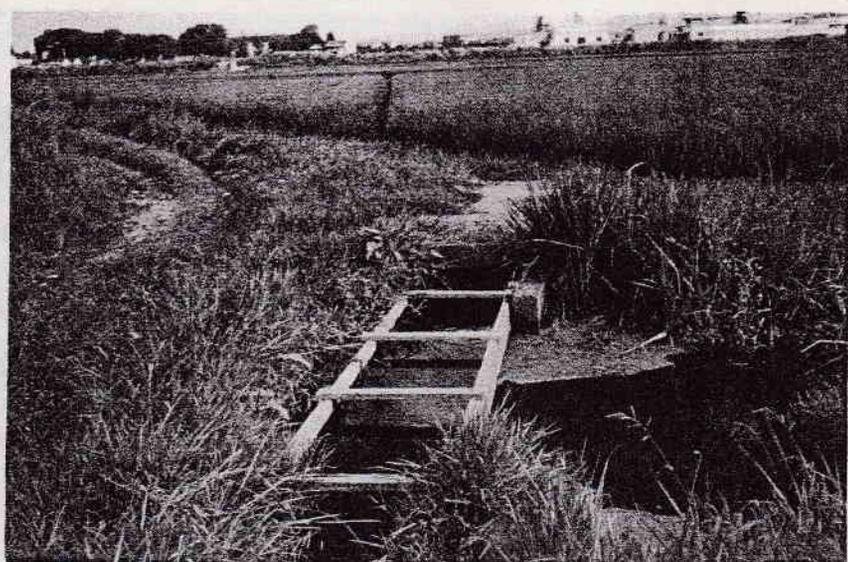


写真 3・53 しんじゃ堀の堰とかけ樋

この堰は寛政年間、時の庄屋新左衛門がこの排水路を堀った時代に作られたものと伝えられています。

高さ一・二石、一間幅の堰が二つありました。石組の作りで天変地異にもびくともしないような頑丈な作りでした。

この堰の水は「床水」と言って、用水路の水口からどんどん水を入れる方法ではありません。田圃に用水路がついていません。

堰の水が増えていくに従って海の潮が満ちてくるように、水田にじわじわと水がのってくるものです。

水のレベルは一定であり、水田は高低が一枚一枚違いますので、どうしても水引きに無理が生じます。

田植え後、高い水田に十分水を引きますと低い水田は冠水状態で葉先が見えるだけの深水となり、低い水田の人は背に腹は変えられず堰板を二枚ほど外します。

翌日高い水田の人がまた堰板をかけます。

苗が伸びるまでの一ヶ月間ぐらひは開けたり、閉めたりの繰り返しで水の調節が保たれていたようです。

この堰の水は堀の南側の水田を主に涵養していたようでした。

地域の人たちに永い歳月にわたり、親しみ、馴染まれてきたしんじゃ堀の堰も基盤整備によって堰としての使命が終わり、寛政年代から続いて堰所も世の移り変わりと共にその寿命を閉じました。

(圃場整備事業完成記念「豊穰」浜口力蔵さんの堰回想による)

48 ○計路堰

(マップ番号 92)

裏井手にあった計路堰はその名のごとく、計路方面の水田を養っていました。

この堰はしんじゃ堀の堰より川幅が広いだけ大きかったようです。

戦後何回が架けられていたのを見ましたが、いつの頃からか計路の樋門の開閉によって水の調節を行っていたようです。

(圃場整備事業完成記念「豊穰」浜口力蔵さんの堰回想による)



写真 3・54 計路塘より中無田を見る

鷺川にも小さな堰が二箇所ありました。天神木の中島さんの水田あたりに五尺ぐらいの幅でありました。

この堰の水は流域の水田を養い、またこの地域は数少ない貴重な田苗の苗床であり、特に有意義な堰であったと思います。

下流の堰は小学校の南西あたりで川が西に曲がっていて、曲がる所に堰が設けられ、川の水は真っ直ぐに貝原地区の用水路に流れていました。

付近の住宅化と河川改修に伴い、堰も取り壊され、その後上流に二箇所下流に一個所ポイントリングが突かれましたが、上流は今、跡形もありません。

貝原地区の吉本宏徳さんの田の横のものはそのままいっているとありますが、現在貝原地区は埋め立てられ畑地となり、公園も建設されて水を必要とする水田は付近には見られません。

(圃場整備事業完成記念「豊穰」浜口力蔵さんの堰回想による)

50 ○沼山津堰

沼山津堰は、益城町福富懸かりにあったということで、石積みの極めて大きっぱなもの毎年築直しには多大の労力と少からぬ資材を要した。

それで従来もこの改造が行われたが完全には出来なかった。

昭和二十五年の災害復旧事業として地方事務所申請し、豊田農地課長監督の下に設計が出来、第一区長村上半次、第二区長沼津秀雄の両氏大いに斡旋に努め、総工費五十九万円、昭和二十八年(一九五三)五月着工した。

(昭和二十八年の秋津村収支決算が一千五百万円規模の時代)

時しも大雨続き六・二六の水害にあつて工事は遅延したが、同年十一月竣工した。

経費は六割五分国庫補助と一割五分の村支出で、資材の収集運搬構築の助手は総て集落の力によつたものである。

(秋津村略史による)

しかるに上田龍三郎(かみたりよさぶろう)氏の石油開発事業の一として、中津代里に設けられた個所から湧水するのを、サイホン式によって木山川を越え橋口に導き、あの一帯約三十町歩にわたる灌漑に成功した。

又、此の効果を認めて集落協議の結果、別に字東無田地内弥富熊太氏の田地に鑿井することにしたら同氏はその田地を無償で提供された。

昭和十六年(一九四一)のことである。時は世界対戦の真只中でこの事業には多大の苦心をしたが、志内村長の熱意と、区長福田安彦、同吉永清三氏、その他関係役員の並々ならぬ努力によって完成した。

灌漑実地に二十町歩に及んでをる。現地に建立された石碑に芳名を録して永久にその功をたたえてある。(上沼山津橋上流の突井戸水神の項参照)

この二つの用水によって、沼山津は従来畑苗のみであつたが、田苗を作ることが出来るようになった。

然るにサイホンによる用水は用材が腐食して漏水が甚だしかったので昭和二十七年(一九五二)五月、村費を以てヒューム管によるサイホン式に取替えた。総工費二十五万円。

この工事に対しては村上・沼津両区長の労苦、常にこれを推進した集落選出議員諸氏の斡旋、並びに作業に従事した人々の熱意は、このサイホンの有る限り長く忘れられないであらう。

(秋津村略史による)

52 鶯 城 跡

(マップ番号 83)

所在地 熊本市東秋津三丁目一番

(鶯原)

(現在 中無田吉住氏宅)

永録八年(一五六五)阿蘇大宮司家 益城郡御船城主甲斐民部大輔親直(宗運) 託麻



写真 3 ・ 5 5 鶯 城 跡 地

郡竹宮に鶯城築きその与力 甲斐飛騨守正運を以て居城せしむ。

天正十五年（一五八六）二月 豊臣秀吉九州征伐とし大軍を師ひて薩州を攻め平ぐ、同年五月御国へ大勢人來り所々の城を攻め落とす。

此時甲斐正運降参して城終に陥る。

……と上益城郡誌に記されている。

健軍陣内城に「永録年中 国乱ノ節（戦国時代）城主光永撰津守人道浄英クスシテ落城ス 其後甲斐宗運カ一族甲斐正運ヲ城代とす」とある。（光永氏家記・古城考）

御船城の出城であった鶯城も、現在では、城跡の窪地・「うっぼげ」と言われる鶯川周辺の地形や鶯観音堂からしか往時をしのぶことはできない。

（かたりべ学習会）

53 秋津村役場跡

秋津支所跡 （マップ番号 72）

所在地 熊本市沼山津二丁目一五二七一（下津代里）

○秋津村役場跡

明治二十二年（一八八九）市制町村制が実施され、沼山津村と秋田村が合併して『秋津村』が成立。村名は、秋田の「秋」と沼山津の「津」をとり、日本の古名「あきつ島」になぞらえて命名されたという。（秋津村略史）

村役場は沼山津下津代里におかれ、昭和二十九年（一九五四）熊本市に合併するまで村行政の中心であった。

戦後の諸制度の改革によって役場も従来の各係の外に「厚生・衛生・統計・保険」等が設けられ、職員も増員に増員を重ねて熊本市編入直前は総員十七名に達していた。

予算規模も、二十八年度の収支決算は一千五百万と昭和二十三年の当初予算二十七万七千円に比べると隔世の感があると言われる程の巨額になっていった。

設けられ、職員も増員に増員を重ねて熊本市編入直前は総員十七名に達していた。予算規模も、二十八年度の収支決算は一千五百万と昭和二十三年の当初予算二十七万七千円に比べると隔世の感があると言われる程の巨額になっていった。

初代村長から熊本市編入までの歴代村長は次の通り。

氏名	就任	退任
1 野田 真吾	明治二十二年 五月	明治二十六年 五月
2 志内孫太郎	二十六年 五月	二十九年 五月
3 内山志津馬	二十九年 五月	三十四年 五月
4 野田 真吾	三十四年 六月	大正 九年 五月
5 弥富 為雄	大正 九年 五月	十三年 五月
6 上田龍三郎	十三年 六月	十三年十二月
7 榑田 一	十三年十二月	昭和 三年十二月
8 内田 亀雄	昭和 三年十二月	四年 五月
9 吉本 聖二	四年 五月	八年 五月
10 野田 幸平	八年 六月	十二年 六月
11 志内 貞広	十二年 六月	十九年 七月
12 辛川 実男	十九年一〇月	二十一年十二月
13 富島 末雄	二十二年 四月	二十九年 九月

○秋津支所跡

昭和二十八年（一九五三）九月一日合併促進法が公布され、地方自治の強化をめざして合併が強力に推進された。

秋津村と熊本市は、親密な関係にあったが、県の町村合併計画試案では、「飯野・広安村」と三村の合併を示された。

即ち、秋津村は、益城中学校組合を作っている「飯野・広安」との三村合併か、又は熊本市との合併かで検討されたが、各集落・村民の意向は地理的にもっとも近い熊本市への編入合併」が圧倒的であり、昭和二十九年（一九五四）二月十八日熊本市と合併することが決定。

熊本市側の手続きが踏まれて、昭和二十九年十月一日秋津村は熊本市へ合併編入され、熊本市秋津町」となり、役場庁舎に「熊本市役所秋津支所」が設けられ、秋津市民の利便が図られた。

昭和六十年（一九八五）八月一日熊本市秋津三丁目一五番一号に秋津市民センターが開設され、支所のその役割は終わった。
その跡地は、二町内公民館として活用されている。

（語りべ学習会）

54 秋田村元標跡

（マップ番号 86）

所在地 熊本市秋津一丁目二番二〇号の前（野間原二〇四六番地）

注記

野間原（のまばる）は、原文のまま記載している。

秋田村は明治十年（一八七七）から二十二年（一八八九）までの村名。
明治九年（一八七六）三月上益城郡の中無田村・西無田村・下無田村と託麻郡健軍村のうち野間が合併して成立。

秋田村の元標は、本村字野間原（のまばる）二〇四六番地宅地の前、（現在の熊本市秋津一丁目二番二〇号）に設置されていた。

元標へは、熊本県庁ヨリ南東二里十丁五十六間三尺（約九・八キロ）四隣託麻郡健軍村元標へ二十一丁十間（約二・三キロ）。沼山津村元標へ十八丁五十八間（約二・〇キロ）。六嘉村へ二十五丁三十一間三尺（約二・七キロ）。井寺村へ二十二丁十七間（約二・四キロ）。

……と郡村誌には記されている。

（語りべ学習会）

55 沼山津村元標跡

（マップ番号 74）

所在地 熊本市沼山津三丁目一三番七号（中津代里・千七百七十一番堂床前）

沼山津村は明治八年（一八七五）から二十二年（一八八九）までの村名。

沼山津村は明治八年（一八七五）から二十二年（一八八九）までの村名。

明治八年（一八七五）乙支に上益城郡の東沼山津村・西沼山津村が合併して成立。

沼山津村元標は、本村字中津代里千七百七十一番堂床前・西小路地蔵の角地（現在の熊本市沼山津三丁目一三番七号）に設置されていた。

元標へは、熊本県庁ヨリ東二里二十三丁三十六間三尺（約一一・二キロ）。

四隣廣崎村元標へ十五丁三十五間（約一・七キロ）。秋田村元標へ十八丁五十八間（約二・〇キロ）。健軍村へ三十三丁五十間（約三・六キロ）。島田村へ二十丁八間三尺（約二・二キロ）と郡村誌には記されている。

（語りべ学習会）

56 沼山津校跡

（マップ番号 75）

所在地 熊本市沼山津三丁目一一番四三 （下津代里）

明治七年（一八七四）から明治二十二年（一八八九）三月までの人民共立小学校。

慶応年間沼山津村では、坂本貫が寺小屋を開いていた。（男五十五名）

明治五年（一八七二）に学制が布かれて、「村に不学の戸なく、家に不学の人がないように」と、全国津々浦々に小学校が建てられた。

沼山津小学校は、明治七年（一八七四）四月現在のの上田隆氏邸内（熊本市沼山津三丁目一一番四三号上田氏宅）に設けられて、始めて学校教育が施されるようになった。

郡村誌には「村の西、字下津代里ニアリ。生徒数男三十人・女九人」と記されている。

明治二十二年（一八八九）市町村制が布かれて、秋田・沼山津の二つが合併して秋津村となるに及んで現在の地に秋津尋常小学校（修業年限四ヶ年・二学級）が設立された。

（語りべ学習会）

57 秋田校跡

（マップ番号 85）

所在地 熊本市秋津一丁目二番付近 （野間原）

明治七年（一八七四）から明治二十二年（一八八九）三月までの人民共立小学校。慶応年間秋田村では、吉住桂蔵が寺小屋を開いていた。（男二十五名）

明治五年（一八七二）に学制が布かれて、「村に不学の戸なく、家に不学の人がないように」と、全国津々浦々に小学校が建てられた。

秋田小学校は、明治七年（一八七四）四月字野間原（熊本秋津一丁目二番付近）に設けられて、始めて学校教育が施されようになった。

郡村誌には「村の中央。字野間原ニアリ。生徒数男四十一人・女三十三人」と記されている。

秋田校は新築されたが、数年を経ずして火災にかかり、民屋を借入れして教場として頗る不振の状態であった。

明治二十二年（一八八九）市町村制が布かれて、秋田・沼山津の二つが合併して秋津村となるに及んで現在の地に秋津尋常小学校（修業年限四ヶ年・二学級）が設立された。

（語りべ学習会）

58 上田龍二郎先生上の碑（マップ番号 77）

所在地 熊本市沼山津三丁目四番三三号（一町内公民館敷地内）

沼山津懸かりは沼山津堰から取入れる用水のみであったので、早魃の年は用水不足で夜も眠らず水引きをする苦労は一通りではなかった。

しかるに上田龍三郎氏（通称かみだりょうさん）の石油開発事業の一として、中津代里に設けられた個所から湧水するのを（現県道小池龍田線脇・所謂堂ん前の流れ）、サイホン式によって木山川（現秋津川）を越え橋口に導き、あの一帯約三十町歩にわたる灌漑に成功した。

昭和初年代の頃である。このサイホンは昭和六十年（一九八五）圃場整備事業でポンプが稼働するまで潤してきた。

上田龍三郎・通称かみだりょうさんは、沼山津の中でも、指折りの資産家で、大正十三年（一九二四）頃、一時村長もしておられた。

道楽者で、かなりの山気もあったようで、石油掘削には失敗したが、怪我の巧妙というか

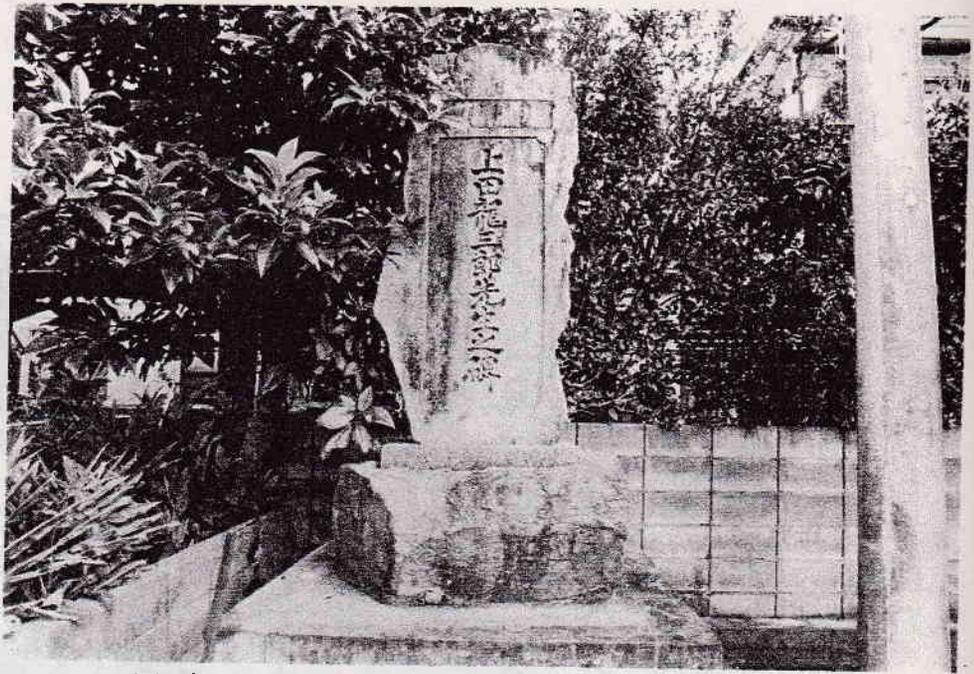


写真 3・56 上田龍三郎先生之碑

道楽者で、かなりの山気もあったようで、石油掘削には失敗したが、怪我の巧妙というか

大量に噴出した水は、現県道小池龍田線脇の、水路を清流とし、所謂堂ん前の流れとなつて、周辺の人達の洗い物等の生活用水と灌漑用水となったのである。

現在は県道が拡張され、水路は蓋で覆われ、又水位が下がり水も出なくなり、その役割が終わったが、沼山津には計り知れない恩恵をもたらしてきた。

その恩恵に感謝して地元では、一町内公民館敷地内に、「水神」として記念碑を建て、その功績を顕彰している。

一六一×一六一の台座の上に、全高さ三桁の自然石に「水神・上田龍三郎先生之碑」と記されている。

台座 基礎 一六一×一六一 高さ七二の間の知石組

中台 一〇五×一〇五 高さ四九の自然石

上台 七八×七八 高さ八のコンクリート

碑 上幅 一七四 中幅八〇 下幅五七 厚さ三三 高さ一七四

注：史記・史伝の「かみだりようさんの石油掘り」を参照

(語りべ学習会)

59 耕地整理記念碑 (マップ番号 87)

所在地 熊本市秋津町秋田 (秋津川・中無田橋際)

昭和四年(一九二九)「字塘下」が堀が多く低湿田だったので、「字貝原」の畑の土を木山川(現秋津川)を越えてトラックで運び、嵩上げ耕地整理をした記念碑である。

碑は昭和四十二年(一九六七)建設。

台座 幅八一 奥行六三 高さ四〇

碑 幅四一 厚さ三五 高さ一六五 割石の自然石



写真 3 ・ 5 7 耕地整理記念碑

裏面	昭和四年耕地整理施工	正面	耕地整理記念碑
組合長	吉本 聖二	建設委員	昭和四十二年建設
副組合長	志内 次郎	委員長	浜口 久雄
同	田島久次郎	委員	吉本 芳彦
會計	三藤熊太郎	同	三藤 俊雄
委員	住岡 米吉	同	吉本 利治
同	吉本喜世記	同	森下芳太郎
同	吉本政次郎	同	三藤 行夫
同	北野繁三郎	同	高宮 政吉
同	緒方 政次	同	山本 定雄
同	志内孫太郎	同	三藤 哲夫
同	富岡芳太郎	同	山田 藤徳
同	三藤 清三	同	小田 能弘
同	三藤 仁平	同	清田 清春
同	清田俊三郎	同	浜口 忠寛

(語りべ学習会)



写真 3・58 圃場整備事業記念碑・豊穰

60 圃場整備工事完成記念石碑 (マップ番号 96)

所在地 熊本市秋津町沼山津三二〇一一 (土地改良区内)

昭和から平成にかけて十五年に亘る圃場整備の大事業を記念して、平成六年(一九九四)土地改良区内に記念碑が建立されている。

工事の経過 昭和五十三年(一九七八)三月七日 県営事業として公告

昭和五十四年(一九七九) 測量開始

昭和五十五年(一九八〇) 工事着手

平成 六年(一九九四) 事業集結・記念碑除幕

記念碑 基礎 幅五七三×奥行二七三×高さ一三五センチ 間知石組

上段磨石組

台座 幅二八〇×奥行二〇〇×高さ 四五センチ 自然石組

碑 幅二四〇(広い所)×厚さ六〇×高さ二四七センチ 自然石

碑文として次が刻まれている。

事業の沿革

本地域は熊本市東南部に位置し、緑川水系加勢川の支流・木山川と秋津川に挟まれた平坦な水田地帯である。

本地域の耕地は未整備のため、区画は不整形かつ狭小、道路も不完全な状態で、しかも多数のクリークが存在する低湿地帯であった。

また一朝豪雨の際には、両河川の水位が上昇するため地区内の排水機能は低下し、しばしば湛水による被害を受けていた。

このような不利な地形的制約から農作業や導水路の維持管理に多くの労力を費やし

ていた。この為に労働生産性は極めて低く、また地域農業の振興を阻害していた。かかる生産条件を改善し、都市近郊の利点を生かした生産性の高い近代的農業の確立に、関係者一同千秋の思いをよせていた。

このため、生産基盤である農地の区画整理・用排水路・道路などの総合的な整備と分散した農地の集団化を行い併せて湛水被害の解消を図るため、排水対策を一体事業とした県営圃場整備事業の計画を三度目の試みにして樹立し、昭和五五年度に着工。以来一五年間の歳月を経て平成六年度に完成したものである。

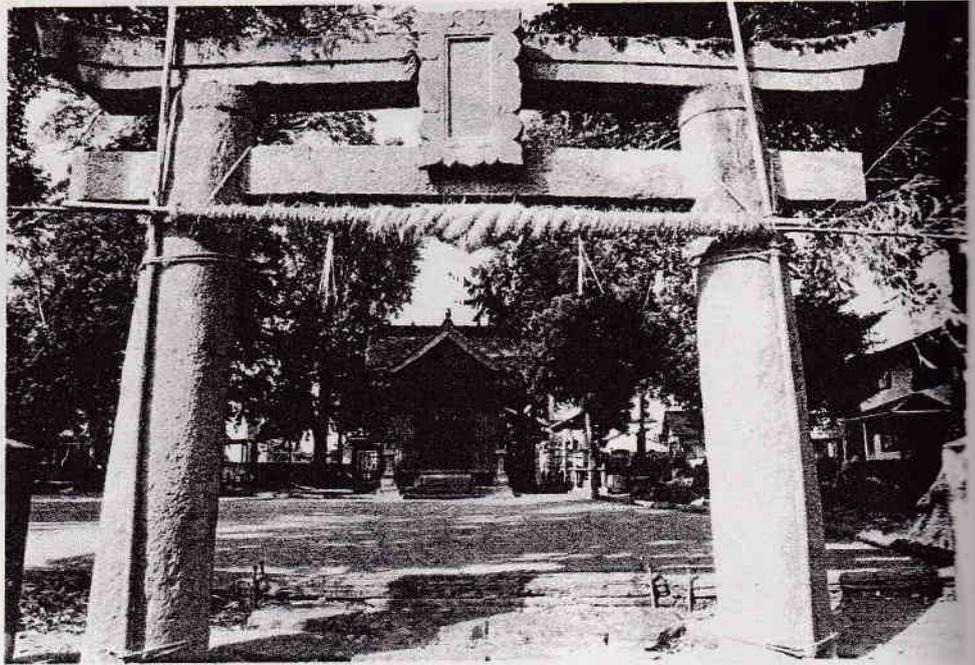
この間、農林省・九州農政局・熊本県・熊本市・益城町・土地改良区の顧問や歴代役員・関係受益者のご尽力ならびに御協力に対して深甚の謝意を表すと共に、先駆者の偉業を称え、秋津飯野地区の豊かな農業の発展を記念し、ここに記念碑を建立する。

平成六年一〇月吉日

秋津飯野土地改良区

- 概要
- 1 事業名 県営秋津地区圃場整備事業
 - 2 事業主体 熊本県農政部
 - 3 事業費 三・五五八・〇〇〇千円
 - 4 施工期間 昭和五五年度～平成六年度
 - 5 施工面積 一八六ha
 - 6 受益戸数 三三六戸

(語りべ学習会)



(注記) 独特な形のしめ縄飾り)

写真 3・59 西無田雨宮神社・全景

二一・一一 若葉校区

わたしたちのふるさと若葉校区は、藩政時代から集落が形成されていた西無田地区の農耕地帯であった。

昭和十七年熊本市健軍町の三菱航空機製作所建設に伴い、その社宅・独身寮が建設され、大きく変貌。

昭和二十年熊本市電健軍線開通。健軍地区の発展に伴い漸次住宅化都市化が進み、昭和三十七年(一九六二)に若葉小学校開校。

現在の校区は、「若葉二丁目・三丁目・四丁目・五丁目・六丁目の全域」と「若葉一丁目・東本町・広木町の一部」を範囲とし、世帯数二千三百八十戸・人口五千四百九十人(平成十四年二月一日現在)である。

〔 寺 社 〕

1 西無田 雨宮神社(熊野座神社) (マップ番号 22)

鎮座地 熊本市若葉六丁目一番二〇号 (一〇五一番地)

祭神 伊奘諾尊 伊奘冊尊 速玉男之神

西無田の南端に近く雨宮神社がある。

国郡一統志の西牟田(西無田)村には「雨宮大明神」、国誌の西牟田(西無田)村にも「雨ノ宮祭九月十九日 氏神ナリ」とあり、相当古くから有名な神社であったことがわかる。可なり広い境内には椋・榎・杉などの大木があり、鳥居も相当古いと思われる。

石灯籠一对は安永三甲牛(一七七四)のもので、手水鉢には「文政十二年丑(一八二九)九月五日」「奉寄進 惣助 国分村石工惣助」と刻まれているが、文字面だけが磨かれ、あとは切り出したままの石である。



西無田雨宮神社・社殿 写真 3・60

注記

御神体の色彩について
 正徳四年（一七一四）の彩色の他に
 「元文六年（一七四一）か延享五年（一七四八）
 に刻記してある氏名を多少削除して書き換え
 彩色した」とも伝られる。（上益城郡誌）

拜殿と神殿は別棟で、拜殿の格天井には草花図が各狭間ごとに描かれ、四枚の絵馬がかかっている。神紋は左上違い鷹の羽で、阿蘇系であり、健軍神社との関連を思わせる。この境内の二本の杉には変わったしめ縄が張られている。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

西無田雨宮神社は天文元年（一五三二）七月井寺村熊野宮（現嘉島町井寺・浮島熊野座神社）を分霊。創建当時は若葉六丁目一番一号の矢田氏方北の「神屋敷」に建立されていた。元文元年（一七三六）現在地に遷宮、安永七年（一七七八）改築される。

西無田雨宮神社の御神体には次の由来が伝えられている。

「文禄元年（一五九二）加藤清正朝鮮が出兵の際、「島崎半兵衛尉正経」が船頭かしらとして従軍した時。慶長三年（一五九八）引揚げの帰路、材木が船についてきて、いくら押し流しても、押し流してもついてくるので、これは何かの因縁と思ひ持ち帰り、その奇木の一部で御神体を刻んだもの。

その残りの材木は今も神殿の下に置いてある。それで西無田神社を「雨宮由屋浮木の権現（あめみや ゆやろきき ごんげん）」と言う。

正徳四年（一七一四）六月ブルー色に彩色される。

榊の大株を玉垣で囲い遙拝所としてある。昭和十年（一九三五）八月建設、神殿・神楽殿・拜殿が棟別に連なっている。拜殿の格天井には草花図があり絵馬が掛かっている。

明治十二年（一八七九）に牛若弁慶の図が奉納されている。

台風十九号の被害修復改築が平成十三年に行われた。

鳥居は仕上げが雑で相当古い感じだが、文字は刻んでない。磨き額面には「雨宮」としてある。

境内には椋・銀杏・杉の原木が数本あり、境内周囲全部を玉垣をめぐらしてあり、境内には、灯籠二対や記念碑が二基がある。猿田彦大神も祀られている。

神殿前には全高さ一三五釐の灯籠一対が奉納されており、右灯籠には「安永三甲年（一七七四）奉寄進」と刻んであるが、左側には文字なし。また拜殿前には全高さ二六〇釐の「昭和十一年（一九三六）氏子中」の灯籠一対が奉納されている。

手水鉢には「文政十二年（一八二九）九月五日奉寄進 国府村 石工惣助」が刻まれている。

に刻してある。氏名を多く削除して「彩色した」とも伝られる。(上益城郡誌)

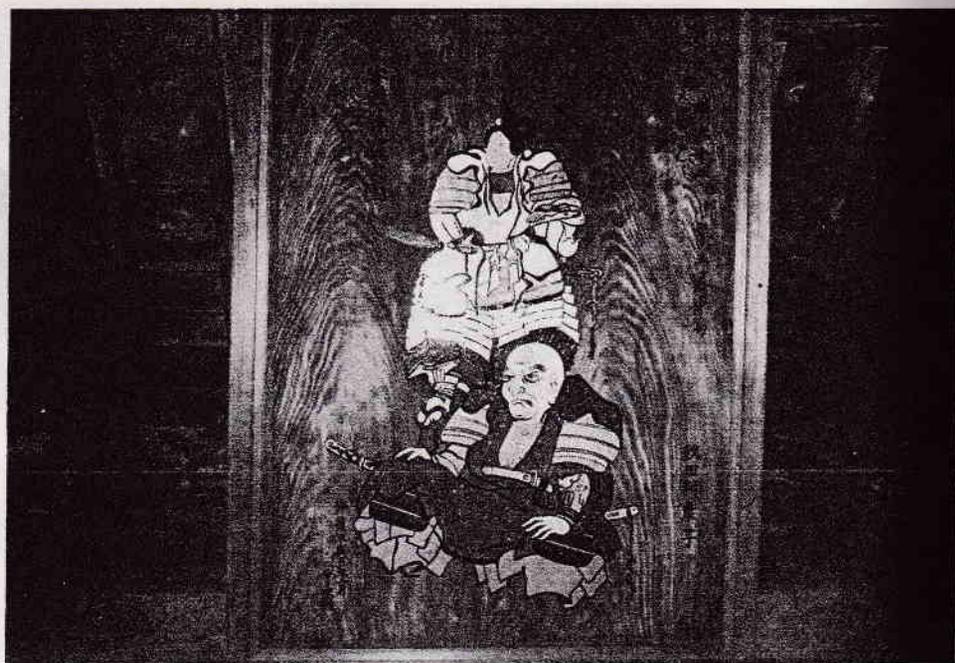


写真 3・6 2 猿田彦大神 写真 3・6 1 西無田雨宮神社・牛若弁慶之

手水鉢には「文政十二年(一八二九)九月五日奉寄進 国府村 石工惣助」が刻まれている。

記念碑

基礎 九六×九六×高さ 八八 〆の間矩石組

中台 五九×五九×高さ 三三 〆

碑 直径 三五×高さ一二五 〆の円筒形

「記念碑文・昭和十一年(一九三六)十月吉日謹誌 委員 石工大工野の名前」が彫ってある。

記念碑

(平成一三年台風一九号の被害修復改築記念碑)

基礎 一二七×七九×高さ九三 〆。正面に「祭神 創建 移築」など

内容が彫ってある。

中台座 九四×四八×高さ一八 〆

碑 厚二五×高さ七七 〆の足付き平石

「工事経過の碑文・世話人の名前」が彫ってある。

猿田彦大神

基礎 一〇八×一〇八×高さ六八 〆

神体 幅七〇×厚三〇×高さ一六五 〆の面取り自然石

「猿田彦大神」の外に文字はない。

猿田彦は、秋津地区では珍しく西無田雨宮神社境内の一ヶ所しか見かけなかった。

鳥居には直線的で独特な形をした珍しいしめ縄が張ってある。

さらに、中無田熊野座神社・沼山津神社と同様に奉納相撲時「吉田司家座(通称追い風座)」が神木に張られている。

(語りべ学習会)

〔石造物〕

西無田地蔵群

2 〆西無田馬頭観音等地蔵三体 (マップ番号 67)

所在地 熊本市若葉六丁目六番四六号(東側)

西無田雨宮宮の東に二〇〇三〆の間隔を置いて小堂が二つ並んでいる。

東側のものは近年の作になる馬頭観音と地蔵、弘化三年(一八四六)銘の地蔵の三体が祀



写真 3・6・3 西無田頭観音等地蔵三体

られている。最後の地蔵は一部セメントで補修されているが、縦長い石の上部を刳って座像を彫み、その下部に「弘化三年二月 進寄 大酒屋才助 西無田村 広木村 上り無田村 中無田村 三郎無田 世話人 鯨村伊工門 西無田村善七 清九郎 永八」と記されている。

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

建立は弘化三年(一八四六)二月。

間口一四三釐 奥行き一一二釐 軒下までの高さ一一五釐 屋根高さ六八釐ブロック上塗仕上、木造屋根の小堂に三体の地蔵が安置されている。

左から一体目の馬頭観音。幅三一釐 高さ一三釐の台座上に、舟形光背の仏像高さ三四釐 膝張二〇釐 肩幅一二釐 顔高さ一一釐 顔幅九釐の三面六臂で、第一手薬壺印・第三手左手弓・第三手左手鉈杵・右手十字杵・右手に宝棒を持った座像である。

正面の二体目は、幅三六釐 高さ一四釐の台座、蓮華座の上に仏像高さ三九釐 膝張二六釐 肩幅二〇釐 顔高さ一一釐 顔幅一一釐、左手膝上念珠、右手は胸の前に鉈杵の座像である。

右側の三体目は、幅二四釐 高さ五二釐の石に地蔵が彫っており、一部セメントで補修されている像の下に次の文字が彫られている。

弘	奉安可進	世話人
化	大阪屋才助	
三	西無田村	鯨村伊工門
午	廣木村	西無田村
二	上り無田村	善七
月	中無田村	清九郎
	三郎無田村	永八

(語りべ学習会)

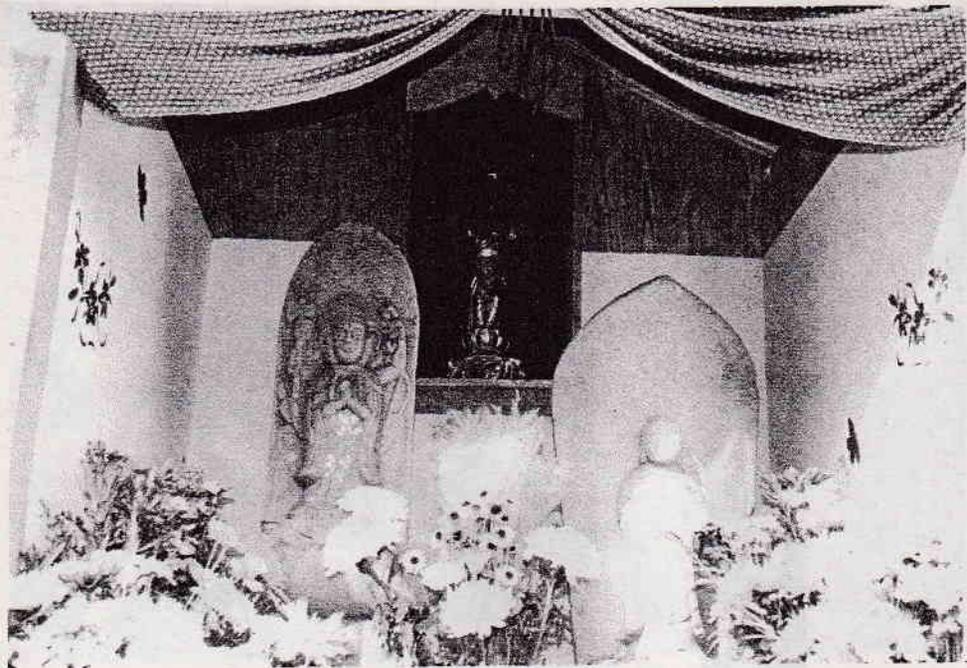


写真 3・6 4 西無田馬頭観音・聖観音・地藏の三体

3 ○西無田馬頭観音・聖観音・地藏の三体 (マップ番号 66)

所在地 熊本市若葉六丁目二番五三号 (神社側)

兩宮寄りの堂には馬頭観音・聖観音・地藏の三体が並び、馬頭観音は近年のものである。地藏は舟型光背を持ち、両手に宝珠を抱き蓮華座上に立っている。光背右に「奉寄進」左に「宝暦二壬申(一七五二)二月吉日 西無田若者中」と刻まれている。

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

建立は宝暦二年(一七五二)壬申二月。

間口一四七釐 奥行き一二〇釐 軒下までの高さ一三一釐 屋根高七三釐 木造瓦葺き ブロック上塗仕上げの小堂に三体の地藏が安置されている。

正面奥の一段高いところに祀っているのは聖観音。

仏像全高五四釐の小さな金箔張りの木像が、肘を曲げ少し広げて左手薬壺印相、右手拳印相の仏像が、高さ七釐の台座・高さ六釐の蓮華座上に立っている。

左側は二体目は馬頭観音。

高さが蓮華座一二釐 下台一六釐 中台二三釐の台座の上に、舟形光背の立像全高五八釐 仏像高三九釐 肘張一二釐 肩幅一二釐 顔高一二釐 顔幅一一釐の三面六臂で第一手合掌印・左第二手独壺・第三手弓・右第二手斧・第三手矢の像である。

右側三体目は地藏。

幅四〇釐 高二一釐の台座、高さ八釐の蓮華座の上に、光背高七八釐 立像高さ四一釐 肘張一四釐 肩幅一四釐 顔高九釐 顔幅七釐の舟形光背き薬壺印相の像が立っている。この右側地藏の光背に次の文字が刻まれている。堂宇は平成三年に新築されている。

奉寄進

宝暦二年壬申二月吉日 西無田若者中

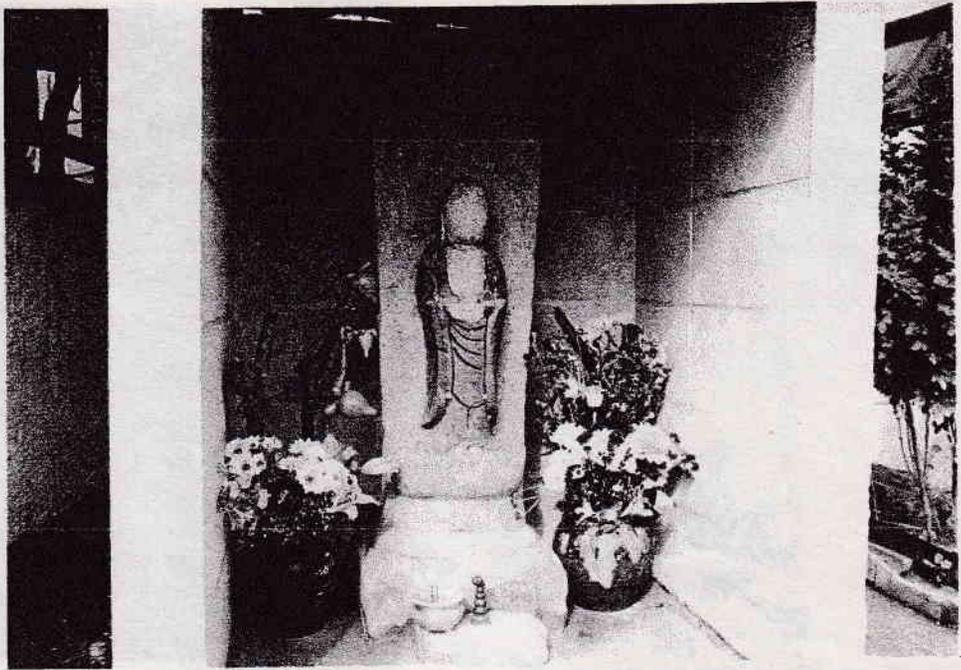


写真 3・65 西無田間島地藏

4 ○西無田間島地藏 (マップ番号 53)

所在地 熊本市若葉五丁目四番五〇号

兩宮神社の北に、間口一〇八釐 奥行八一釐 軒下高さ一一二〇釐 屋根高さ五〇釐の堂の中に、明和三年(一七六六)と刻みのある地藏が祀られている。

高さ一九釐の台座の上に、舟形光背全高さ一二五釐(内蓮華座高さ一六釐) 地藏の身高さ五〇釐 肘張り一七釐 肩幅一六釐 顔高さ一一釐 顔幅八釐の立像であり、印相は薬壺印、衣を彩色してある。

明和三丙戌間島若者中

地藏本体

四月吉祥開眼 真宗寺

石工

和吉

この付近は「新屋敷」と呼ばれている。舟運が盛んな時代に「間島」に住んでいた人達が、舟運が衰えまた水害が酷くなり、住み難くなってこの付近に移住してきたこと。

新しく屋敷が出来たので「新屋敷」と言われてきた所である。

この地藏はもと「間島」にあったものか、又移住してきてから創建されたのかは不明

(語りべ学習会)

水神さん

5 ○西無田間島水神 (マップ番号 35)

所在地 熊本市秋津町秋田 (秋津川と木山川の合流点)

秋津川と木山川の合流地点堤防上の水神。

六×四・二碗の敷地に、縦一一〇釐 横一一〇釐 高さ二四釐の基礎。

更に幅五五釐 横五〇釐 高さ三〇釐の台座を置き、その上に幅四八釐 高さ五三釐の自然石の水神が祀られている。表に「昭和二年(一九二七)」、裏に「間島」の銘がある。

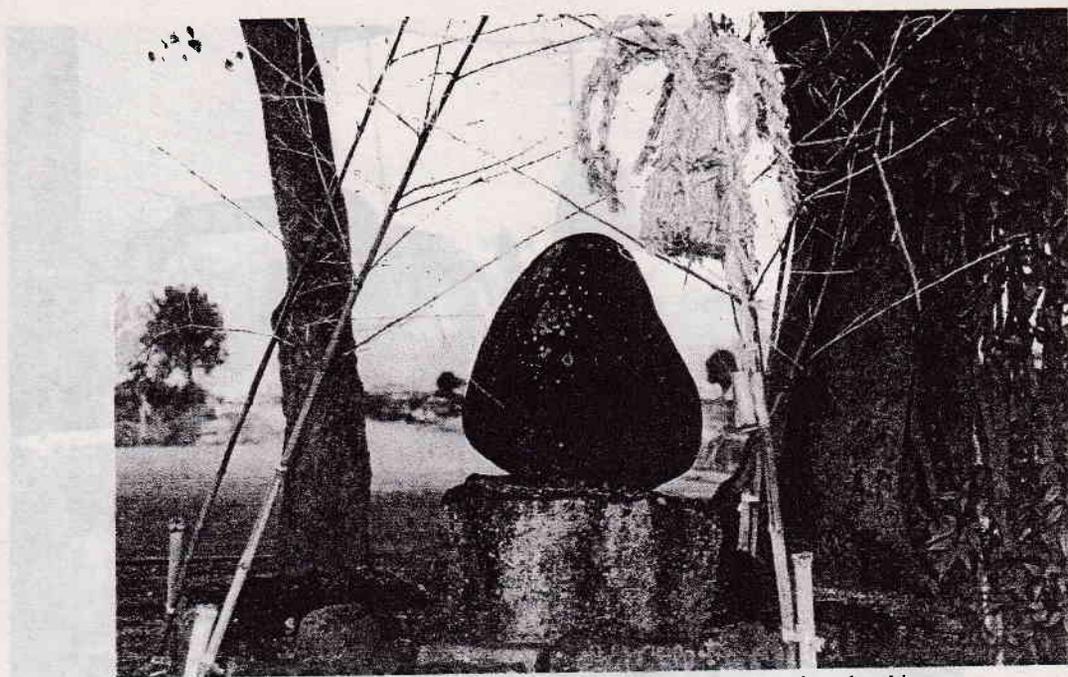


写真 3・6・6 中無田間島水神

更に幅五五〇 横五〇 高さ三〇の台座を置き、その上に幅四八 高さ五二の自然石の水神が祀られている。表に「昭和二年（一九二七）」、裏に「間島」の銘がある。

(本体)

(台座に)

(台座裏面に)

水神	
昭和二年 十月建	間島
間島	

(語りべ学習会)

6 ○西無田水神

(マップ番号 37)

所在地 熊本市秋津町秋田字筏場

秋田字筏場の田圃(若葉六丁目八番の南側)の角に、縦一八一 横一八一の台座の上に、二柱の水神が祀られている。

左側の水神は、幅三〇 高さ七九の自然石で無銘である。

右側の水神は、下幅三〇 高さ五〇の自然石で、風化して見にくいですが次の字が刻まれている。

(正面に)

(南面に)

水神

寶曆元年 創設
明治三十三年三月十二日
百五十年祭改修

もと何処にあったのか不明。圃場整備で現地にまとめて移転されたものと思われる。

(語りべ学習会)

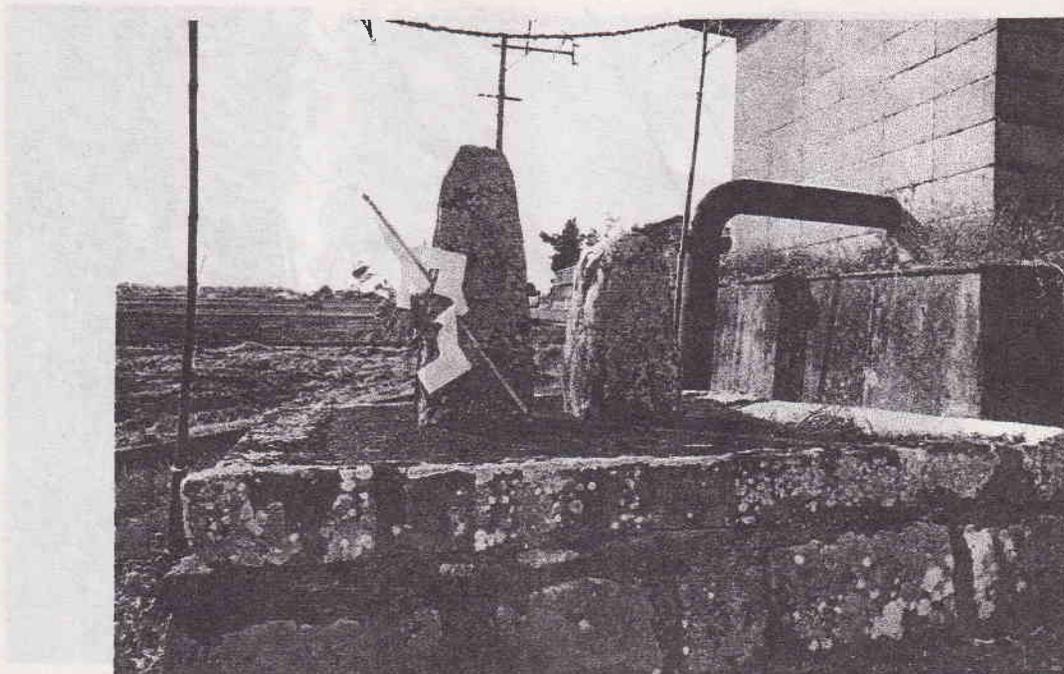


写真 3 ・ 67 西無田水神

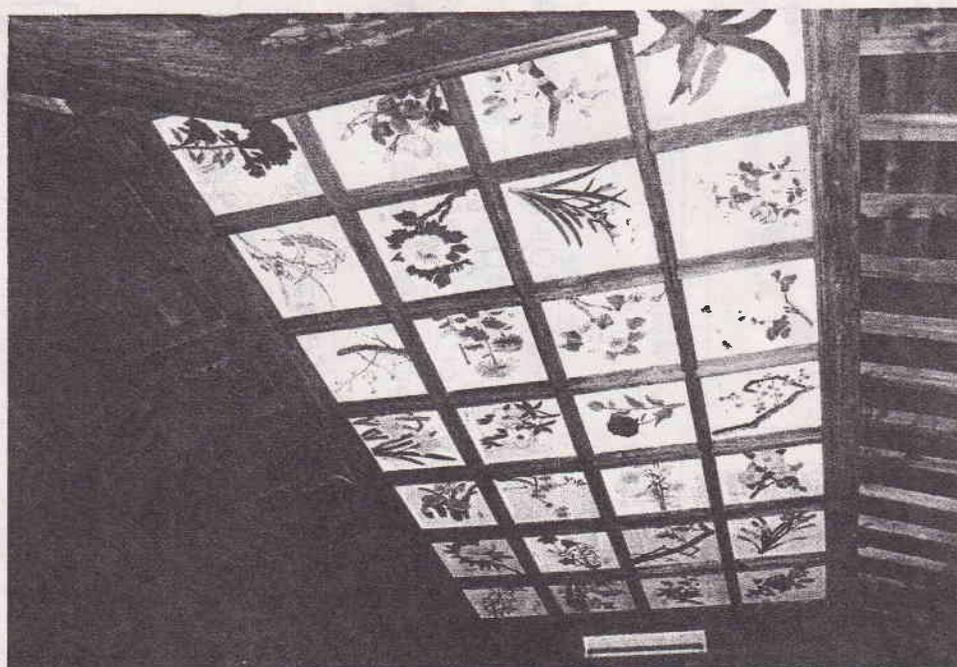


写真 3 ・ 68 西無田雨宮神社

格天井の草花図

わたしたちのふるさと桜木校区は、託麻台地に連なり、健軍原の一部と藩政時代から形成されていた沼山津等の畑作地帯であった。

三菱航空機製作所建設に伴い、昭和十八年付属青年学校が創設。現在の東本町地区が開発された以外、昭和三十年代までは阿蘇の山脈がどこからでも眺望できる広漠たる畑地が東に広がっていた。

熊本市の東部発展に伴い漸次住宅化都市化が進み、昭和四十六年（一九七二）桜木小学校が秋津小学校から分離独立して開校。

校区は、「昭和町・桜木一丁目・二丁目・花立一丁目・二丁目の全域」と「桜木三丁目・花立三丁目・四丁目・東本町」の過半を範囲とし、世帯数二千九百九十四戸・人口七千七百七十三人（平成十四年二月一日現在）である。

台地の畑地であったためか、沼山津遺跡や沼山津の鎮守神である沼山津神社が校区内にある。

〔考古遺跡〕

1 沼山津遺跡（マップ番号 1）

所在地 熊本市沼山津二丁目、桜木二丁目

沼山津神社ならびに竹内神社一帯で、出土品は縄文時代の打製石斧が採集されている。縄文時代の遺物以外では弥生末の土師器の細片のみ。

（秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

〔寺社〕

2 沼山津神社

(マップ番号 11)

鎮座地 熊本市桜木二丁目一六番 (横皇 七五七番地)

いさぎのみこと

いさぎのみこと

はやたまのから

祭神 伊弉諾尊 伊弉册尊 速玉男之神

産交バス停沼山津神社前下車三分、県道木山線と小池竜田線の交差点のすぐ北側に森がある。

昔は鬱蒼とした社叢であったが、付近の樹木が伐採され、近くに住宅が建って、以前とはすっかり変わって来た。それでも、社殿の周囲には大木が生い茂っている。

境内の大楠は目通り周囲五・一七メートルある。

表の鳥居は、昭和の近代のもので沼山津神社の額が掲げられている。石段を上ると中段に権現宮の石額を掛けた旧鳥居がある。この鳥居の右柱に「宝永八辛卯天(一七一一)三月廿日」と彫られている。

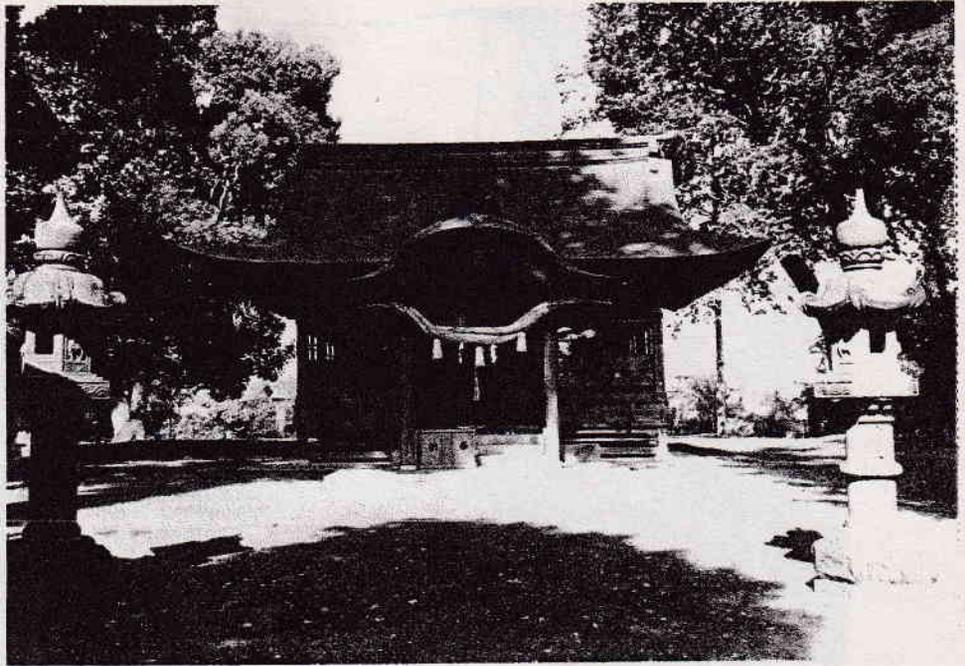
神社は、二間四方の拜殿の奥に玉垣をめぐらした神殿がある。拜殿には、絵馬が四枚かかっており、一番古いのは文化七年(一八一〇)の武内宿禰と応神天皇の図、続いて安政五年(一八五八)彌富亀之助奉納のもの、あとは明治九年(一八七六)志内寿繁奉納のものと、明治十二年(一八七九)の加藤清正奮戦の図である。

境内の手水鉢には、正面彫り四みの中央に丸に違い鷹の羽の紋を描きその下に「奉寄進」左右にかけて「癸丑京保十八年(一七三三)九月吉祥日」と刻し、外右に「願主沼山津四兵衛 光永兵九郎」左外に「同武助・同幸助」と彫ってある。

なお拜殿左側に「奉納」と記した石柱があり、そこに「当熊野宮ハ浮島熊野宮分霊大永二年(一五二二)九月六日勧請 同神殿再建元文五年(一七四〇)十月十四日成就」と由緒を刻んである。

この次の面に「明治四十三年(一九一〇)十一月九日 当神社正遷宮並竣工式」とあり、碑の建設も同年同月で志内孫太郎となっている。

上記の由緒により、この神社が井寺村(現上益城郡嘉島町井寺)の浮島権現の分霊であ



沼山津神社 3・69 写真

注記

宝永八辛卯(一七一一) 宝永は七年の四月に改元さているので実質には正徳元年



写真 3・70 沼山津神社・吉田司家座

碑の建設も同年同月で志内孫太郎となっている。

上記の由緒により、この神社が井寺村（現上益城郡嘉島町井寺）の浮島権現の分霊であることは確かである。浮島権現は、国誌によれば、長保年間（九九九〜一〇〇四）の勧請と伝えられている。

九月九日がこの神社の祭りである。往時は大変賑わっていた。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

昭和三四年（一九五九）一月拝殿改築。平成三年（一九九一）九月二七日の台風一九号の被害を受けたが、平成六年八月新築復旧する。

祭日の九月九日には、今でも子ども相撲が奉納されている。なお当日には、藁を約四〇センチメートル角に編み、それを割竹で抑えた「吉田司家座（通称追風座）」と言われるものが、二本の神木に飾られている。

これは秋津地区の中無田熊野座神社・西無田雨宮神社（熊野神社）の浮島神社系三社に見られる珍しい祭祀である。

また、「大祓、茅ぐり」も継承され、六月中下旬に実施されている。

（かたりべ学習会）

〔 史 跡 〕

3 昭和町桜並木（イセキ桜）（マップ番号 82）

所在地 熊本市東本町（東本町と昭和町秋津新町の境界・排水路沿い）

四月になると自衛隊通りの桜とともに、水玉公園は絶好の花見の場所になる。

人々を楽しませてくれるこの若葉排水路沿いの桜並木は、いつ誰によって植えられたのであろうか。

桜並木の北側「東本町」は、かつて農業機械專業メーカーの井関農機の工場であった。戦後民需に転換していた三菱重工業（株）熊本機器製作所の跡を引継ぎ、昭和二十四年十月から井関農機が操業開始したが、当時の工場周辺は一本の樹木もない広漠たる畑作地帯で、県道高森熊本線からの道路も井関専用進入道路の様相を呈していた。

昭和二十七年五月井関農機熊本製作所（当時）に、将来の中堅技能者を養成する「技能

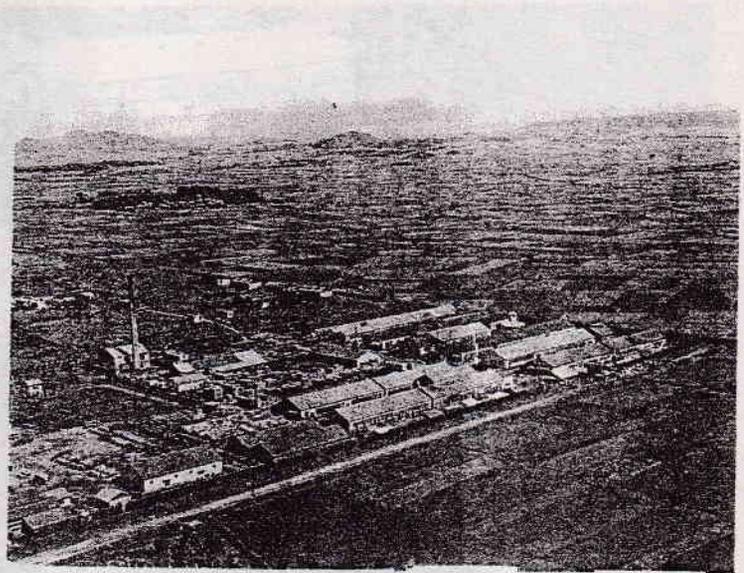


写真 3 昭和 20 年代の東本町付近
手前が昭和

(出所 井関農機六十年史)

参考

自衛隊通りの桜について

自衛隊通り約一・五^キの両側にソメイヨシノ約三百五十本が並ぶ。

この桜は、昭和二十九年陸上自衛隊健軍駐屯地が創立された記念と、四十九年の創隊二十周年記念に、健軍商店街から寄贈された。

市緑保全課では、十二年度二十七本・十三年度二十四本を若木に植え替え、十五年度までに約百本を伐採、若木に植え替える予定。

者養成所」が開設された。

当時の井関博所長が「この養成所開設の記念と工場周辺の緑地化、地域の景観形成を意図して桜を植樹する」ことを発案提案された。そこで井関農機熊本製作所の技能者養成工第一期生二〇名の手により、昭和二十七年(一九五二)秋に七〇本の桜が植えられたのである。

植樹から半世紀、宇野耳鼻科医院から昭和町バス停までの間の六十数本の桜、既に老木となっているが今尚地域の人々を和ませている。

その井関農機も昭和五十年(一九七五)九月、益城町安永(第二空港線沿い)に益城地区工場を建設操業させ、昭和五十五年(一九八〇)四月健軍地区の人員・施設を益城地区に移転統合し、現在は(株)井関熊本製造所として操業している。

当時の井関博所長や植樹に携わった人々も既に会社を去り、往時を知る人も少なくなつたが、桜並木だけは、この東本町界隈の半世紀の移り変わりを静かに見守っている。

(語りべ学習会)

4 東本町は二二菱友月年学校校跡・

井関農機工場跡 (マップ番号 81)

所在地 熊本市東本町

現在の東本町地区には、三菱航空機製作所建設に伴い、昭和十八年(一九四三)付属青年学校が建設され、畑地から一大変貌。その後幾多の変遷を経て現在の町が形成された。

太平洋戦争中のことである。

健軍町とこれに隣接する旧上益城郡秋津村・飽託郡広畑村(現在の長嶺南・西・東)にまたがる広大な畑地に、昭和十七年(一九四二)六月旧陸軍の軍需工場「三菱重工工業株式会社熊本製作所」が設立された。(敷地一四〇万坪、四六二万[㎡]・従業員四万名)

工場のほか飛行場も併設、社宅・寮や付属病院、青年学校などもあり、資材運搬や通勤のため国鉄水前寺から引込み線を敷設、休止中の百貫電車の軌道を取外し、通勤者のため市電を健軍まで延長するなど大規模な工場であった。

勤労学徒や女子挺身隊も働きに就いており、生産されたのは「飛龍」と呼ばれた重爆撃

十四本を若木に植え替え、十五年度までに約百本を伐採、若木に植え替える予定。

市電を健軍まで延長するなど大規模な工場であった。

勤労学徒や女子挺身隊も働きにいており、生産されたのは「飛龍」と呼ばれた重爆撃

機キ一六七であった。

昭和十八年（一九四三）四月一日、飛行機製造工場の中堅技能者養成のため「三菱重工業（株）私立三菱熊本青年学校」が開校した。

教室棟ゾーン（現在の税務大熊本研修所の一帯）と実習工場ゾーン（現在の県営東本町団地の部分）それに運動場（現在の自衛隊病院と市営東本町団地の部分）の配置となっていた。

資格は高等小学校二年終了者で、教育年限三年。職員三〇余名。生徒数は第一期生一五〇〇名、全員入寮。一小隊六〇名の二五小队編制で学科と実習に軍隊式で厳しい教育訓練が行われた。

昭和二十年四月第三期生まで入所。この第三期生には秋津高等小学校卒業等の女子養成工（裁縫）も入所した。

この青年学校で厳しい教育訓練を受けた特に第一・二期生のなかから、戦後熊本の機械加工・钣金加工のレベルアップと発展に貢献した人々が、多数輩出した。

なお第二秋津寮の一棟で診療していた三菱病院が、昭和十九年十月青年学校内に移転し、昭和二十年六月空襲を避けて、現湖東二丁目の職員住宅二十九棟に分散移転するまで病床一六八・従業員二六三名で診療にあっていた。（現在の市民病院の前身）

終戦。昭和二十年（一九四五）十一月三十日私立三菱熊本青年学校は廃校。

第九製作所と称していた三菱の工場は、被災を逃れた青年学校の実習工場を活用して平和産業に転換。

昭和二十二年（一九四七）十二月一日から三菱重工業熊本機器製作所と称して農器具を生産していたが、昭和二十四年（一九四九）九月三十日付で農業機械専門メーカーの井関農機株式会社（本社松山市）へ譲渡した。人員約二〇〇名も引継ぎ、昭和二十四年十月一日井関農機（株）熊本製作所として操業開始。

昭和二十五年（一九五〇）六月二十五日朝鮮動乱勃発。動乱は警察予備隊の設置を促し支隊の熊本駐在が決定。

前日に大慌てで内部の移動を終えた井関農機（株）熊本製作所の一部（西側の事務所部分を、昭和二十五年十一月十五日付で国が買収。

同日、警察予備隊熊本支隊（一五〇〇人）の先遣隊が、引込み線から井関の事務所跡の宿舎に入り、東本町西側部分は警察予備隊の駐屯地となる。

警察予備隊はその後保安隊・自衛隊となり、現在の健軍駐屯地・清水町の熊本駐屯地へ移転。その跡地は、「税務大学校熊本研修所・公務員宿舎・自衛隊熊本地区病院・市営東本町団地」等になっている。

西側を国に譲渡した井関農機は、自動脱穀機の量産専門工場として東側部分で操業していたが、稲作機械化一貫体系の確立による農業機械の大型化と多様化に対応するため、昭和五十年（一九七五）九月、益城町安永（第二空港線沿い）に益城地区新工場を建設操業させ、さらに昭和五十五年（一九八〇）四月健軍地区の人員・施設を益城地区に全面移転統合させた。現在は（株）井関熊本製造所として操業している。

井関農機の工場跡地には、その後「県営東本町団地・ライオンズマンション」等が建設されている。

「健軍町五九〇番地」に合筆されていた三菱工場関係跡地が、昭和三十一年（一九五六）に「東町と東本町」の新町名となる。

昭和三十五年（一九六〇）十月には、第十五回国体に御出席の昭和天皇皇后両陛下が東本町の井関農機熊本工場を見学されている。

かつて、「三菱青年学校の養成工・三菱機器製作所と井関農機の従業員・警察予備隊員」と多くの人々の汗と青春の思い出が残る東本町には世帯数一千一百五十五戸・人口三千十二人（平成十四年二月一日現在）の人々が住む町となっている。

（語りべ学習会）

二・四 桜木東校区

わたしたちのふるさと桜木東校区は、託麻台地に連なり、藩政時代から形成されていた沼山地区の畑作地帯であった。

昭和三十年代後半までは阿蘇の山脈と金峰山がどこからでも眺望できる広漠たる畑地が東に広がっていた。

熊本市の東部発展に伴い漸次住宅化都市化が進み、昭和四十六年（一九七一）桜木小学校が秋津小学校から分離独立して開校。

更に平成十年（一九九八）に桜木小学校から分離独立して桜木東小学校が開校。最も新しい校区である。

校区は、「桜木四丁目・五丁目・六丁目・花立五丁目・六丁目」の全域」と「桜木三丁目・花立三丁目・佐土原二丁目」の一部を範囲とし、世帯数二千八戸・人口五千六百二十人（平成十四年二月一日現在）である。

畑地であったため「花立往還・戸島道や小峰線」などが通っていた以外、歴史遺産は見られない。

〔 史 跡 〕

1 追分石 (マップ番号 79)

所在地 熊本市桜木四丁目一九番

沼山津神社より北東約五百メートル。益城町広崎との境界に「追分け」という地名のある処がある。

地元の人々が花立往還と呼んでいる凹道の木山往還と佐土原からの凹道（木山町道）との交差点に、縦一〇九センチ 幅三五センチ の自然石に「右すなとり、左ぬやま津」という

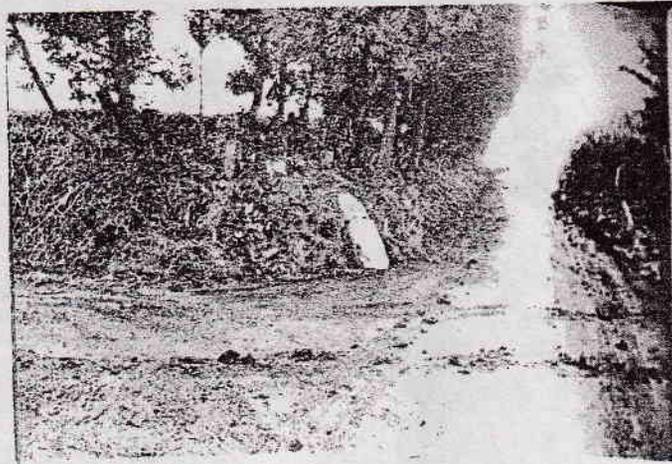


写真 3 ・ 7 2 花立往還と追分石

(出所 熊本県歴史の道調査)



写真 3・73 花立往還・追分石

追分石がある

熊本藩は明和七年（一七七〇）往還筋に石または木で標示を建てさせているので、この追分石もこの頃建てられたものと思われる。

台地を堀割して造った凹道が、二メートル近くの高土手になって進んでいる。加藤清正の深い軍事的配慮があったと言われている。

「旅人、常に御府中の形春を不見為の御供え」「若し敵、来たらん時、両方の高岸を鍬を以て切落さば、人馬の通路断絶す」と薩公道業に記してある

次の十字路には横手の五郎が運んだと伝える「猫伏石」がある。

（秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

2 花立往還

（木山往還―熊本往還）

（マップ番号 80）

地元の人々が「花立往還又は熊本往還」と呼んでいた木山往還の沼山津懸かりは、「字花立と字北花立」・「字桜木と字杉本」の界を通っていた。

郡村誌では、沼山津村・健軍村を通る木山往還について沼山津村「三等県道二属ス。

村の乾（北西）託麻郡健軍村界ヨリ東、廣崎村界ニ至ル。長六丁十八間、幅二間。馬踏・道敷ノ別ナシ」

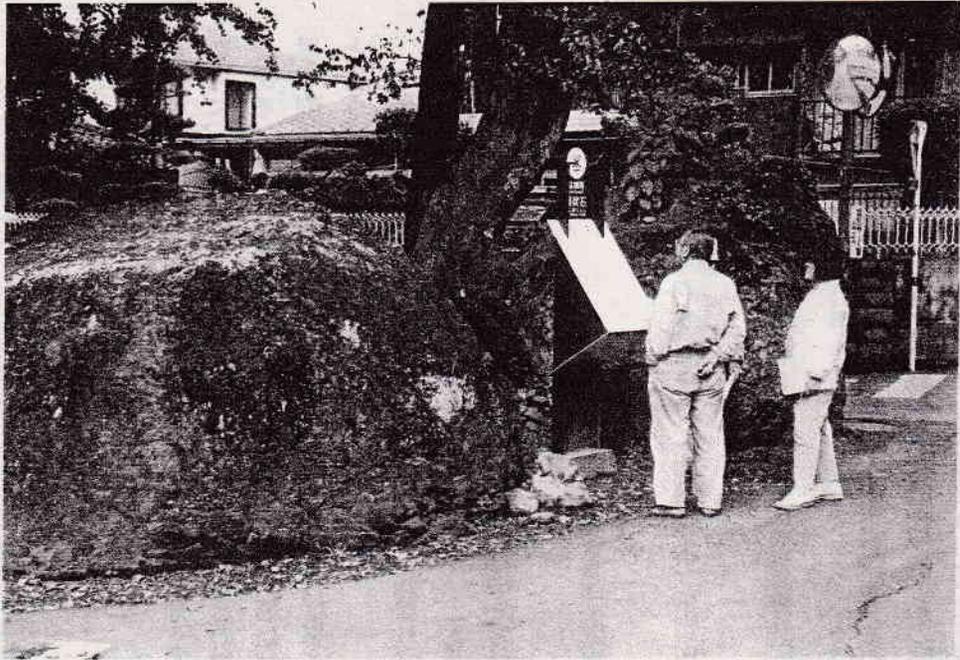
健軍村 「三等県道ニ属ス。村の西、神水村界ヨリ良（北東）、上益城郡沼山津村界ニ至ル。長二十八丁四十三間、幅一間三尺乃至二間。内七丁十四間ハ健軍神社前八丁馬場ト称ス。馬踏四間、道敷十二間、松・杉並木アリ。馬場央ヨリ南ハ秋田村ノ支道アリ。」と記している。

「木山往還」のことを地元では、熊本町向けは「熊本往還」花立懸かりを「花立往還」と呼んでいた。

花立往還は「花立三丁目と五丁目」・「花立四丁目と六丁目」・「桜木三丁目と五丁目」の境界となっている道路がかつての花立往還である。

佐土原からの凹道は、国府から通じており、一等里道に属し、木山町道（きやま まちみち）と呼ばれていた。

（語りべ学習会）



石伏猫 4 7 ・ 3 真 写

御船口から分岐して東南の方向へ進んでゆく街道を、木山往還と呼んでいる。追分は御船口の地藏堂で、御船往還が南へ進むのに対して木山往還は東に向かって通じている。

堂内の地藏光背に、「左こしのを」と刻まれているその「こしのを」は、昔の木山町のことである。

迎町から南の琴平・本庄の境をなしている道路を東進して、南熊本駅通りを横断するとJA会館の北側に出る。これをさらに東進すると、右手に辛崎神社があり、このあたりから東南に方向をかえて二の井手を渡る。

二の井手の手前に春竹説教所がある。(その一画に道に向かって放牛の第六十九体目の地藏が立っている)

二の井手を渡った道は、昔の水田地帯の中を右折、左折して一の井手を渡り、白山小学校の校門に達する。旧往還は小学校の校庭を東に突切り、豊肥線の踏切りを渡って松楠塾の前に出で、堀の内団地を抜け、国府七曲りを経て砂取四つ角近くに出る。

ここから水前寺川を渡り、総合体育館の西側を廻って電車通りを横断すると八丁馬場へ入る。

馬場を東に突き当たると神域である。正面大鳥居の前から南へ下がって真光寺の門前を通り、庄口川を渡ってだから登りの道を進むと自衛隊前の大通りになる。

ここで昔の道がなくなるので、陸運事務所前を東に一直線に進み、東町団地の端で南へ下がると再び旧道に会う。

暫く進むと道は昔懐かしい凹道となり、佐土原からの凹道との交差点には、「右すなとり左ぬやま津」という道標石が残っている。

次の十字路では横手五郎が運んだと伝える猫伏石を眺め、古閑・馬水・安永を通って終点の木山に到達する。熊本より三里の往還である。

(熊本県歴史の道調査)

四 伝説・史伝

〔信仰伝説〕

1. 天神木

『天神木』という地名がある。

旧沼山津十八番字名で、ここには社も鳥居も無くただ住宅に囲まれた畑の中に、天神塚という直径一・五メートルほどの塚がボツンとあるだけである。もとは大きかったが次第に削られて畑になってしまい、持主は早く削って宅地か畑にしたいが、代々触れれば祟ると言われ残していると言ふ。

『上益城郡誌』に「秋津小学校敷地の字名なり。往古天神丸と言ふ船入航して此の地の樹に繋ぎしより起こると」とあり、地名を船名に由来させている。しかし触れれば祟るとの言い伝えのなかに古い天神信仰がうかがわれる。

(熊本県不思議辞典 松野国策)

2. ゆやろききき(由屋浮木)の権現

西無田若宮神社の御神体について「上益城郡誌」は次のように記している。

〔伝説 慶長三年(一五九八)太閤秀吉薨するや遺命によりて征韓の師を班す 既にして諸軍海に航して故国に向ふの時 加藤肥州公の臣島崎某の船尾に 一大奇木追従し来るあり 某之を再三押流せど 付随すること依然たり。因つて其旨を公に告ぐるに 公凱旋の奇瑞となし 之を同人に賜ふ 後同氏は右奇木を以て神體を彫刻し西無田村(当時託

磨郡に属せし部分)の東北隅(現今の矢田氏の北畑なりと、今も同地を宮屋敷・神屋敷と言ふ)に勧請すと。後元文元年(一七三六)七月村の西部(現今の社地)に遷宮し 延享五年(一七四八)八月神體を彩色して現在に及べり。最初神號をゆやろきき(由屋浮木)の大明神と號し西部に遷宮して熊野宮を祭ると。

しかして鳥居には雨宮と刻せり、又、神體の背部には島崎久兵衛門 同繁右衛門奉祀年號等刻記しありしが 元文六年か延享五年か(多分彩色せしときならん)に刻記せるものを多少削除し 今は島崎半右衛門と記しある由 但彩色しあり且年代を経し 今は如何とも見ることも能はず、社務は飽託郡健軍神社々掌之を執る 而して現今の社殿は安永七年(一七七八)の改築たり。

(上益城郡誌より)

奇木を持ち帰った加藤肥州公の臣島崎某(島崎半兵衛尉正徑)について川尻町史には「後藤末松氏提供」として次の様に緒言に記されている
「徑岑は天文二十三年(一五五四)十一月戦死。

当時島崎半兵衛尉正徑初め名は八郎員徑と云う 父戦死後僅か三歳の嬰兒を乳母懷中に助け 所縁を以て飽田郡川尻の庄に潜住す

成長に従い漁獵を業とせしがその頃征韓の事(注：文禄の役)起こりて

加藤氏の命を蒙り 天正十九年(一五九一)船頭を勤め朝鮮に従軍す

その際王城より分取せし釜家蔵す 後祿七十石を給ふ 云々

島崎久兵衛正隆家を継ぐ 寛永九年(一六三二)加藤氏出羽国御改易に付以後浪人となる 同十三年(一六三六)益城郡沼山津郷間島と云う処に転住し 漁獵及び開拓に従事し 征韓の際船に付着したる材木を持ち帰り 神像を刻み鎮守すと云う 熊野浮木権現とも云う 云々」

(川尻町史 緒言より)

又、西無田雨宮神社の御神体について、島崎半兵衛尉正徑の子孫筋の森山家には、次のように伝えられる。

「文禄元年(一五九二)加藤清正朝鮮出兵の際、私の先祖第十代島崎半兵衛尉正徑が船頭かしらとして従軍した時。帰路材木が舟についてき

ること依然たり。因つて其旨を公に告ぐるに、公凱旋の奇瑞となし之を同人に賜ふ。後同氏は右奇木を以て神體を彫刻し西無田村(当時託

て、いくら押流しても押流してもついてくるので、これは島崎に何かの因縁があるものだと思ひ持帰り、その一部で御神体を刻んだ。

その残りの材木は今も神殿の下にある。以上の理由で西無田兩宮神社を「兩宮由屋浮木(あめみや ゆやろきき)の権現」と言う。御神体は、正徳四年(一七一四)六月に彩色される。

なお神屋敷から現在地若葉六丁目に移転建築されたのは、安永七年(一七七八)臘月吉日(陰曆十二月)、移転にあたっては十三ヶ村の寄付を募り建立されたものである。

この島崎家は、菊池家第十代武房の第五子左馬之助武徑より始まると伝えられる。

(語りへ学習会)

〔歴史文に伝説〕

3. 西南戦争と秋田村

明治十年四月十四日と思われる。御船方面の戦いで敗れた薩軍の一部が、橋を壊しながら木山へ集結する途中、中無田を通過するとき、村の世話人三藤孫四郎らに、食糧の提供や道案内を強要する。

賊軍への協力を躊躇していると、中無田神社に向けて実弾を発射して、村民を震え上がらせ、言うことを聞かないと火を放ち村中を焼き払うと脅されて協力させられる。

「現に中無田神社の神殿内の柱には所謂西郷弾が打ち込まれたままになっている」

村では戦場になつたら大変な事になるので、女子供を、吉住氏宅裏の孟宗竹林内の、元鷲城跡の窪地に(当時は相当深かつたそう)猫伏を被つて避難させた。なかには身重の婦人がいて避難中にお産があつたりして、村中大変な騒ぎであつた。

「文禄元年(一五九二)加藤清正朝鮮出兵の際、私の先祖第十代島崎半兵衛尉正経が船頭かしらとして従軍した時。帰路材木が舟についてき

(注：当時木山に行く道は、戸島往還より花立往還へ出て広崎の猫伏石を通過して木山に行く道しかなかった。現木山県道は明治三十年完成。)

幸い薩軍は通過しただけであつたので、戦場にはならず済んだが、それを追つて政府軍が通過するときの対応が大変であつた。

四月十五日午後三時頃、熊本鎮台兵二名が三藤孫四郎を問島橋へ呼び出し、間もなく政府軍が通過するので薩軍が壊した橋三ヶ所を一時間以内に修理するように取り計らえとの命令、無理な話だか命令に従うほかはない。大急ぎで西無田用掛り矢田和三郎、下無田(通称新村)用掛り野田伝太に連絡して、大至急人夫を集め、有り合わせの板や材料を持ち寄り応急修理した。

なお矢田和三郎は前日十四日にも六嘉方面から薩軍を追つた政府軍を橋が壊れて渡れないので川船で渡したり、道案内等したりしている。

四月二十一日薩軍敗走後、村へ政府軍進入に出迎え、道案内、下無田には二十二日迄政府軍滞陣のため、宿所の手配、手伝い人夫の手配に追われている。

四月二十四日より政府軍衆が通過する際、又薩軍が焼き落とした橋の修理、渡し船の手配、乗馬の手配等。又五月七日大津方面から隈庄への移動の政府軍の大砲等は橋が壊れて渡れないので、積船の手配や手伝い人夫の手配等々。又沼山津村では、熊本鎮台兵の馬水(益城町馬水)・木山(益城町木山)・御船(御船町)通過の際には数百名の手伝い人夫を出して協力している。

広崎村(益城町広崎)では小倉鎮台兵が進入の際には、熊本往還筋の(地元では花立往還と言っている)猫伏石と言う所で焚き出しをしたり政府軍数千人の道案内、食糧、物品の輸送などに、多数の人夫を動員して手伝っている。

木山に集結した薩軍・党薩熊本隊は四月二十日、二十一日船野山(益城町三〇メートル)・飯田山(御船町四三メートル)周辺の激戦に敗れ、矢部方面へ後退して人吉方面へと敗走していく。

西南戦争が終わった後、戦後処理というか、政府軍に協力した者にはなにかしらの日当が支払われた模様で、協力した内容を書いた文書の写しが残っている。

文書の内容が古文で難しくて分かりにくいのが、次のような文書がある。中無田では「賊徒乱入之際出夫周旋等」と薩軍が通過の際に脅されてやむを得ず協力したのだったが、賊軍の逃亡の助けをしたと、賊軍協力の名目で日当の請求を却下されている。

戸長吉田泰造（当時は官選戸長）が再度日当下げ渡し願を、熊本権令富岡敬明殿宛に、明治十一年三月二十六日に出しているが。

それに対して「・尽力致候儀ハ人民ノ義務ト相心得夫ニ説諭致可依而書面却下候事」と明治十一年四月二日 熊本権令富岡敬明からの却下の書面である。

村ではがっかりである。婦女子や村を戦火から守るために、薩軍から脅されて協力しただけだったのに。村では政府軍のために道案内、橋の修理、船馬の周旋、輸送の手伝い等に人夫の動員、宿泊の幹旋等々莫大な出費になっていた。

戸長や用掛など当時の村の世話役達が、県と協力した多数の村民の間に立って非常に苦慮された事が窺われる。

注：付図「西南戦争関係図」参照

参考文献 三藤家文書（語りべ学習会 小田邦秀）

4・二二藤孫四郎と秋田小字校校建記

三藤孫四郎には、西南戦争前後の苦慮の外にもう一つ家運が傾くという大きな世話事があった。

村に不学の戸なく、家に不学の人がないようにと明治五年（一八七二）に学制が布かれた。当時各地に所謂人民共立学校が設立された。

秋田小学校を設立する事になり、中無田・西無田・下無田（通称新村と言っていた）の住民が資金を出し合って建てる事になるが、当時の貧し

い農村では一度に出せる金ではないので、差し当たりその時の世話役だった三藤孫四郎（明治十三年戸長民選制になっての初代戸長となる）の田畑を担保にして金を借り、返済は中無田・西無田・下無田の各住民が年賦で償還する事にして、敷地は孫四郎所有の字野間に建てることになった。

設立当初の生徒は男子四十一名、女子三十三名で教員二名、番人給仕人などの人材・設備・教材も追々整いつつあり、資金返済の方も予定通り目途がついて回収しかかったが、運の悪いことに数年ならずして火災にあい学校が全焼してしまった。

学校が無くなったので、その後の返済資金の回収が出来なくなり、孫四郎個人の借金だけが残ってしまった。金利だけが雪だるまの様に膨らんでいく。

学校はその後民家の空き家を、転々と借り細々と続けられていた。

長男清三は先代から交流のあった沼山津の彌富家に、若いときから勉強かたがたよく遊びに行っていた。清三が成人したころ彌富家の当主から「お前の家の財産がどうなっているのか」と尋ねられ、何も知らない清三がきよとんとしている、「お前とこの田畑は秋田小学校設立の時の資金借用のため、みんな担保に入っていて、このままだと財産は借金のためみんな無くなってしまふ」と聞かされ、愕然とした。

孫四郎は秋田小学校設立資金に自分の資産を担保に借金していることを子供に一口も言っていなかった。

そう言われてみると思い当たる節があった。農家では米麦粟大小豆等収穫したら、俵入れして蔵か住居の土間に積み、しばし眺めながら収穫の喜びを感じつつ、時期をみて販売していた。

しかし三藤家では事情が違っていた。商人達が（ひょうもん「俵物」買いと云っていた）俵入れが済むのを待っていて、その場であつが持つていってしまう。少しでも金利を減らすためには、そうでもしなければ仕方がなかったのである。

当時アメリカでは所謂西へ西へと西部開発ブームで、道路・鉄道等の

建設工事に大量の労働者が必要で世界各地から労働者が集まっていた。

ないが、とにかく浮き油という現象が時々見られることがあった。

秋田小学校を設立する事になり、中無田・西無田・下無田（通称新村と言っていた）の住民が資金を出し合って建てる事になるが、当時の貧し

建設工事に大量の労働者が必要で世界各地から労働者が集まっていた。日本からも多数の出稼者が行ったのもたの時であった。清三も現金を得るにはこしかなないと、結婚年頃を過ぎつつあったにもかまわずに渡米して、働きに働いた。稼いだ金を送金して、「今度はどこの田圃を請け返せ、今度は何処の田、今度は何処の畑」と次々に借金を返し、全部の田畑の請け返しが終わってから帰国した。

当時のアメリカ帰りは、大金を持ち帰り豪邸を建て悠々自適の暮らしを送るのが普通であったが、清三はそれどころではなかった。それから我が家の再建に取り組まねばならなかった。その超人的な努力が実を結び現在にいたっている。

人一倍小柄で、ものしずかな清三のどこにそんなパワーが潜んでいたのかと全く驚嘆するほかはない。

参考文献 三藤家文書（語りべ学習会 小田邦秀）

5. かみだりようさんの石油掘り

上田龍三郎・通称かみだりようさんは、沼山津の中でも、指折りの産家で、大正十三年（一九二四）頃、一時村長もしておられた。

大柄で色白な男前で、相当な道楽者でもあったようである。昭和初期頃、夏の頃になると、流行のカンカン帽をかぶり、絹の着物を涼しく羽織りステッキをつきながら闊歩する。煙草は当時高級品の「敷島」というのを、一口か二口吸っては捨て、又新しい煙草に火をつけるといような贅沢な生活をして、当時まだ誰も考えもつかない、運転手付きのサイドカーを乗り回しておられた。

田植え時になると、木山川（現秋津川）は水田用水、取水のために堰をかけ、かなり水位が上がり流れが淀み、ダムのようになっていた。

夏の頃になると、時々水面に油のような物が浮いたように見えることがあった。動植物性の油か、鉱物性の油か、または当時稲の害虫ウンカの駆除に油を使っていたのが、たまたま流れ込んだのか、何だかわから

仕方がなかったのである。

当時アメリカでは所謂西へ西へと西部開発ブームで、道路・鉄道等の

ないが、とにかく浮き油という現象が時々見られることがあった。誰が言いだしたか知らないが、この辺の地下には石油があるのではないかと、突飛な噂話が流れた。

道楽者で、かなり山気のある、かみだりようさんは、もし石油を掘りあてたら大当たりだとばかり、掘削を試みることにした。

昭和初年代の頃である。当時は動力がなかったので、足踏み式の突き棒で、数人の人が交代で作業をしていた。

地層が土砂の所は掘り易いが、岩盤に当たると、なかなか掘れない。高価なダイヤモンド刃の付いた突き棒で掘るが作業は一向に捗らない、

かれこれ一年近くかかって、二十二・三間（約四十メートル）も掘った

だろうか。一向に石油の出そうな気配はない。作業するほうも、いい加減疲れた。期待していた村人も、石油は出んぞう（伝造）と、作業員の名をとりからかいだす。

とうとう石油は出なかったが、大量の水が噴出した。他にも益城町の福富にも掘ったが、これも水が出た。又秋田の野間にも掘ってみたが、此処では水も出なかった。

石油掘削には失敗したが、怪我の功名というか、大量に噴出した水は

現県道小池竜田線脇の水路が清流となり、所謂堂ん前の流れとなって、

周辺の人達の生活用水、洗いや井戸端会議ならぬ川端会議等の交流の場にもなっていた。

一方上田家は井戸掘りの費用が高み、又道楽も過ぎて家運が傾き、家産を整理して、何処かに越されたそうである。

この水は当時沼山津農家の主要農産物の一つであった大根の洗い場として重要な役割を果たしていた。上流から下流までの水路脇に、真っ白に

洗われた大量の大根がうす高く積み並べられた様子は全く壮観であった

また貴重な水は、水不足の水田の用水として、木山川（現秋津川）を鉄管のサイホンを通して、利用された。昭和六十年（一九八五）圃場整備事業で用水ポンプが稼働するまで約三十町歩の水田を潤していた。

現在は県道が拡張され、水路は蓋で覆われ、又水位が下がり水も出な

くなり、その役割が終わったが、沼山津には計り知れない恩恵をもたらしてきた。その恩恵に感謝して地元では、一町内公民館敷地内に、「水神」として記念碑を建て、その功績を顕彰している。

注：これは泉秀晴氏・福島新治氏・三藤愛子氏のお話を元にして書いたものである

(語りべ学習会 小田邦秀)

6・猫伏石 (ねこぼくいし)

猫伏石は、横手五郎の伝説に由来する。

加藤清正に親を殺された横手五郎という強力の男がいた。横手五郎は木山弾正の子供であると伝えられている。

親の仇を討つために、清正の隈本城築城の際、人夫として雇われていた五郎は、ある時、清正の命により、城の土台となる大きな石を探していた。

土台となる石はなかなか見つからず、木山川を西原村河原まで遡った所で、やっと見つけることができた。五郎はその石を猫伏に包んで、背中に背負って隈本へ戻ろうとしたが、余りにも大きくて重たいために猫伏がその重さに耐えられず、府内古閑まで来たところで破れてしまった。五郎は小さい石を両手に抱え、大きな石をその場に残して隈本へ帰ってしまった。残された石は途方もなく大きい石なので、誰も動かすことができずに、現在に至るまで横たわっている。

(益城町教育委員会)

7・東野中学校の校名

昭和三十七年(一九六二)に東野中学校が開校した。

この校名は、万葉歌人「柿本人麻呂」の

「東の野にかぎろいの立っ見えて かへり見すれば月傾きぬ」

(笠間書院発行 橋本達雄(編)の「柿本人麻呂(全)による」)

の「東の野」から採り、当時の阿部次郎熊本市教育長が命名された。西は健軍地区の発展にともない、暫次住宅化のきざしがみえはじめていたが、東や南は広々とした畑地や水田が飯田山麓まで続く風景が、この歌からのイメージと重なったものか。

「大和路文学散歩」では、次のように記している。

軽皇子の一行が荒涼とした「真木立つ荒山道」を越えてはいった宇陀(奈良県)の高原を、今、国道一六六号線が貫いている。

宇陀の阿騎野は、夏青い丘陵の起伏を見せて、その丘のひとつに、人麻呂の「東の野にかぎろいの立っ見えて かへり見すれば月傾きぬ」の歌碑が建っていた。

人麻呂がこの野に泊まったのは、み雪降る冬のさなかだった。人々は亡き草壁皇子の追憶に、夜もすがら語りあかしたことだろう。碑の前の畠に胡麻が薄紫の花をつけていた。

開校四年後、中学校周辺の町名が従来からの村名や字名とのゆかりではなく校名から採られた。

即ち昭和四十一年(一九六六)秋津町秋田の一部が、東野一丁目から東野四丁目となった。

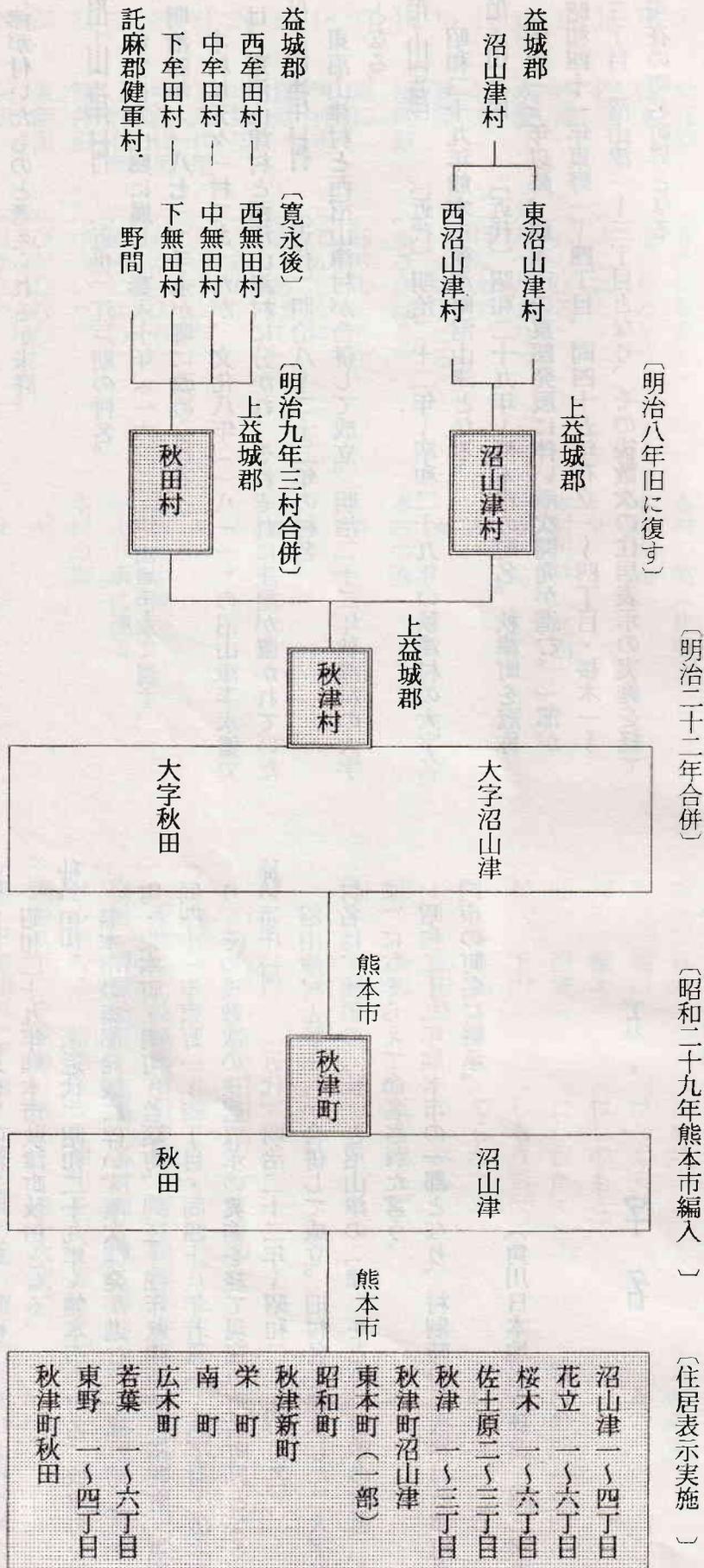
ちなみに、東野中学校の所在地は、東野三丁目六番五十号である。

(語りべ学習会)

この校名は、万葉歌人「柿本人麻呂」の
 「東の野にかぎろいの 立つ見えて かへり見すれば月傾きぬ」

五地 名

五・一村名・町名の移り変わり



沼山津

地名の沼山は湿地の林または野林の意と思われ、これに舟着場を指す津が付いたものと考えられるが未詳。

沼山津村

〔近世〕江戸期の村名。

中古は木山郷に属し、寛永十年（一六三三）沼山津手永に属す。

明治四年（一八七二）手永が郷に改められる。

本村は元々一村であったが、文化八年（一八一）の沼山津手永鑑では、東沼山津村と西沼山津村に分かれ、それぞれに庄屋が置かれていた

沼山津村

〔近代〕明治八〜二十二年の村名。

東沼山津村と西沼山津村が合併して成立。明治二十二年秋津村の大字となる。

沼山津

〔近代〕明治二十二年〜昭和二十九年の秋津村の大字名

昭和二十九年熊本市秋津町沼山津となる。

沼山津

〔近代〕昭和二十九年〜熊本市の町名。秋津町を冠称

昭和三十年以降、熊本市の東部発展に伴い漸次開発が進む。一部が昭和四十一年東野一〜四丁目、同四十五年花立一〜四丁目・桜木一〜三丁目・沼山津一〜三丁目となり、その後数次の住居表示の実施を経て現在の町名町界となる。

秋田村

〔近代〕明治十〜二十二年の村名。

上益城郡のうち。中無田村・西無田村・下無田村と託麻郡健軍村のうち野間が合併して成立。同二二年秋津村の大字となる。

中古元西牟田村・中牟田村は木山郷、元下牟田村は甘木荘に属し、

寛永十年（一六三三）西牟田村・中牟田村は沼山津手永に、下牟田村は鯨手永に属す。

明治四年（一八七二）手永が郷に改められる。同八年（一八七五）下牟田村を沼山津郷に編入す。三村とも寛永後「牟田」の字を「無田」に用いる。

秋田

〔近代〕明治二十二年〜昭和二十九年の秋津村の大字名

昭和二十九年熊本市秋津町秋田となる。

秋田

〔近代〕昭和二十九年〜熊本市の町名。秋津町を冠称

熊本市の東部発展に伴い、漸次開発が進む。一部が昭和三十一年栄町・東本町・南町・若葉町、同三十四年秋津新町・昭和町、東原町・

同四十一年東野一〜四丁目・同四十八年若葉一〜六丁目・広木町となり、その後数次の住居表示の実施を経て現在の町名町界となる。

秋津津村

〔近代〕明治二十二年〜昭和二十九の村名。

沼山津村と秋田村が合併して成立。旧村名を継承した二大字を編成。村名は、秋田の「秋」と沼山津の「津」をとり、日本の古名「あきつしま」になぞらえて命名された言う。

昭和二十九年熊本市の一部となり、村制時の二大字は秋津町を冠称。同市の町名に継承。

〔角川日本地名大辞典 四三熊本県〕

五・一 字 名

(1) 沼山津の字名

東は上益城郡廣崎村（現益城町広崎）、西は同郡秋田村、南は同郡島田村（現益城町島田）、北は託麻郡健軍村（たけみやむら）各耕地を以て界とす。

東西十七丁四十間、南北三十一丁。

注・字中津代里千七百七十一番堂床前・西小路地蔵の角（現在の沼山津三丁目一三番七号）の沼山津村元標基準

(字番号) (字名) (ふりかな)

(位置)

(字番号) (字名) (ふりかな)

(位置)

田村を沼山津郷に編入す。三村とも寛永後「牟田」の字を「無田」に用いる。

(字番号)	(字名)	(ふりかな)	(位置)
1	筒井久保	(つついくぼ)	本村の良(北東)
2	竹内	(たけうち)	本村の北
3	古閑前	(こがのまえ)	々
4	杉本	(すぎのもと)	々
5	境峠	(さかひたうげ)	々
6	古閑久保	(こがのくぼ)	々
7	上古閑久保	(かみこがのくぼ)	々
8	佐土原	(さどはら)	々
9	北花立	(きたはなたて)	本村の乾(北西)
10	桜木	(さくらのき)	本村の北
11	横畠	(よこばた)	々
12	西原	(にしはら)	本村の乾(北西)
13	水溜	(みづたまり)	々
14	花立	(はなたて)	々
15	鶯原	(うぐいすばる)	々
16	須崎原	(すぎきばる)	本村の西
17	堀口	(ほりのくち)	々
18	天神木	(てんじんぎ)	々
19	貝原	(きやあばる)	々
20	小無田	(こむた)	々
21	下津代里	(しもつより)	々
22	中津代里	(なかつより)	本村の中央
23	上津代里	(かみつより)	々より東に連る
24	筒井田	(つついだ)	本村の東
25	東無田	(ひがしむた)	々
26	長田	(ながた)	々
27	上内	(かみうち)	々

(字番号)	(字名)	(ふりかな)	(位置)
28	樋口	(ひのくち)	本村の巽(南東)
29	大城町	(おほしろまち)	々
30	名守	(なもり)	々
31	兵糧田	(ひようろうた)	々
32	戸井手	(といで)	々
33	奥分	(おくぶん)	々
34	堀切	(ほりきり)	本村の南
35	保手本	(ほてのもと)	々
36	日焼	(ひやけ)	本村の南
37	橋口	(はしぐち)	々
38	橋本	(はしのもと)	々
39	西無田	(にしむた)	本村の坤(南西)
40	下内	(しもうち)	々
41	寺田	(てらだ)	本村の坤(南西)
42	圖志分	(づしぶん)	本村の南
43	萩原	(はぎはら)	々
44	計路	(けろ)	本村の坤(南西)

(2) 秋田の字々名

東北は上益城郡沼山津村、南は同郡井寺村(現嘉島町井寺)・六嘉村(現嘉島町下六嘉)各耕地を以て界し、西は託麻郡健軍村(たけみやむら)耕地及び江津川を以て界とす。
東西八丁二十四間、南北八丁四十六間。
注・字野間原二千四十六番宅地の前(現在の秋津一丁目二番一〇号付近)の秋田村元標基準

(字番号)	(字名)	(位置)
1	一口	本村の南
2	碩下	々
3	中道下	本村の坤(南西)
4	上道下	本村の南
5	間島	々
6	土手下	本村の坤(南西)
7	佐分浦	々
8	烏飼	本村の西
9	穴無田	々
10	鷺場	々
11	筏場	々
12	棚田	々
13	中須	々
14	居屋敷	々
15	西原	々
16	東原	本村の乾(北西)
17	北原	々
18	南水溜	本村の北
19	宅地	本村の北
20	西六反	々
21	水溜	々
22	六反	本村の良(北東)
23	堀割	々
24	北境塚	々
25	境塚	々
26	鷺原	々
27	中原	本村の良(北東)

(字番号)	(字名)	(位置)
28	出口	本村の良(北東)
29	上ノ丁	本村の東
30	下ノ丁	々
31	野間原	本村の中央
32	前塘元	本村の巽(南東)
33	塘下	本村の東
34	上横道上	々
35	上道上	々
36	三官屋敷前	本村の巽(南東)
37	月輪	々
38	計路	々
39	井寺鶴	々
40	井寺道下	々
41	間島前	本村の南
42	古屋敷	々
43	杉下	々
44	南一口	々
45	一番割	々
46	二番割	々

(熊本市史 別編 第二卷)

五・三 字名の分類

地名は「言語による地名・地形による地名・災害による地名・宗教による地名・民俗による地名・歴史による地名・開拓による地名・軍事による地名・宗教と民俗の複合による地名」などに分類されるが、秋津地区の地名について「熊本地名研究会の松野国策氏」は次の様に分類されている。
 (1) 類似地名による分類
 (熊本地名研究会 松野國策)

	秋 田 村	沼 山 津 村
1	鶯原・北原・東原・中原・西原	鶯原・貝原・萩原・佐土原・西原
2	穴無田・佐分浦・野間原	西無田・東無田・小無田
3	水溜・南水溜	水溜
4	宅地・居屋敷・古屋敷・三官屋敷前	天神木
5	計路	計路
6	堀割・一の口・南一の口・出口	堀切・堀口・樋口(火口)・橋口
7	境塚・北境塚	境峠
8	上横道上・上道上・中道下・上道下・井寺道下・井寺鶴	上津代里・中津代里・下津代里・上内・下内・橋本(橋の下)
9	棚田	兵糧田・寺田・長田
10	杉下	杉本(杉の元)桜木
11	間島・間島前	
12	塘下・前塘元・土手の下	上古閑久保・古閑久保・古閑前
13	西六反・六反	花立・北花立
14	中須・一番割・二番割・上丁・下丁	筒井田・筒井久保・竹内・横島・桜木
15	筏場・鶯場・月の輪	大城町・名守・図志分(図師分)・保手本(本手の下)・奥分・戸井手

(2) 形態による分類

	秋田村	沼津村
地形地名 (自然地名)	鶯原・北原・東原・中原・西原・杉下・中須・穴無田 鳥飼・鶯場・佐分浦・水溜・南水溜・計路・野間原・間島	鶯原・佐土原・貝原・萩原・西原・上古閑久保・ 古閑久保・古閑前・花立・北花立・桜木・筒井久保・筒井田 西無田・東無田・小無田・竹の内・杉本・水溜・計路
開拓地名	堀割・一の口・南一の口・出口・一番割・二番割・上ノ丁 下ノ丁・棚田・北境塚・境塚・西六反・六反・碓下 間島前・塘下・井寺鶴・井寺道下・上横道上・上道上 月の輪	堀切・堀の口・火口 保手本・上内・下内 上津代里・中津代里・下津代里 長田・横田・境峠・戸井手 橋本・橋口
社会地名	宅地・居屋敷・古屋敷・三官屋敷前	天神木
宗教地名		兵糧田・寺田・凶志分・名守・大城町・奥分

五・四 呼び名

地名には、「字名」の下に「下名(さげな)・呼び名・門名」がある。
坂や堀の一つ一つに畑一枚にいたるまで呼び名が付けられ、地元の人々に古くから伝わり親しまれている。
しかしこれら「呼び名」も環境の変化等に伴い、いつのまにか忘れられたり消滅してしまうものも少なくない。
秋津地区に残っている呼名には次の様なものがあり、人々の営みぶり等を如実に表している。

(調査・平成五年度郷土史講座生 沼津地区 水上則弘・中無田地区 小田邦秀・西無田地区 矢田剛)

上沼山津地区	下沼山津地区
会所跡 (かいしよあと)	貝原 (きやあばる)
舟場 (ふなば)	洲崎 (すさき)
出屋敷 (でやしき)	
堂ノ前 (どおんまい)	
裏門 (うらもん)	野林山 (のばしのやま)
外村 (ほかむら)	下ノ寺 (しものてら)
川端 (かわばた)	
上ノ寺 (かみのてら)	
門前 (かたけ)	
中竹 (しんみち)	
新道 (うまがみさん)	
馬神さん (うまがみさん)	
仕事場 (しめのき)	
標ノ木 (ごひやくけん)	
五百間 (ごひやくけん)	
東小路 (ひがししゅうじ)	
やげん堀 (やげんぼり)	
	小無田 (こむた)
	たんたん落し
	中小路 (なかしゅうじ)
	屋敷田
	西小路 (にししゅうじ)

桜木地区

貝原 (きやあはる) ・野林山 (のばしのやま) ・小無田 (こむた) ・中小路 (なかしゅうじ) ・西小路 (にししゅうじ)
 洲崎 (すさき) (すさき) ・下ノ寺 (しもてら) ・たんたん落し (たんたんらくし) ・屋敷田 (やしきでん)

桜木地区

追分 (おいわけ) ・五郎堀 (ごろうぼり) ・東脇 (ひがしわき) ・宮ノ前 (みやんまえ) ・花立往還 (はなたちわうわん)
 堂面 (どうめん)

中無田地区

えづ原 (えづばる) ・やんぼし塚 (やんぼしづか) ・くぼ (くぼ) ・うっぼげ (うっぼげ) ・西のちようもん (せいのちようもん)
 中通 (なかどおり) (なかどおり) ・上ノ小路 (かみのしゅじ) (なかみち) (なかみち) ・中道 (なかみち) (なかみち) ・下ノ小路 (しもんしゅうじ) (みづたまり) (みづたまり) ・出小屋 (でこや) (でこち) (でこち) ・水溜 (みづたまり) (みづたまり) ・堀割 (ほりわり) (しんみちばた) (しんみちばた) ・さわら (しんみちばた) (しんみちばた) ・二丁八反 (にちやうはちはん)

西無田地区

神屋敷 (かみやしき) ・新屋敷 (しんやしき) ・水神さん (すいじんさん) ・鬼塚 (おにづか) (御見塚) (ごみづか) ・二方塚 (にほうづか) (かみやしき) (かみやしき) ・すいじんぼり (すいじんぼり) ・江津湖んはた (えつこはた) ・うらいでんはた

五・五 地夕口考察

天神木 (てんじんぎ)

沼山津の字番号 (字図) 一八番の字名

ここには社も鳥居も無くただ住宅に囲まれた畑の中に、天神塚という直径一・五メートルほどの塚がポツンとあるだけである。もとは大きかったが次第に削られて畑になってしまい、持主は早く削って宅地か畑にしたいが、代々触れば祟ると言われ残していると言う。

『上益城郡誌』に「秋津小学校敷地の字名なり。往古天神丸と言う船入航して此の地の樹に繋ぎしより起こると」とあり、地名を船名に由来させている。

しかし触れば祟るとの言い伝えのなかに古い天神信仰がうかがわれる。

きんぐわん やしきまゑ (松野國策)

二二官日屋敷前

秋田の字番号 三六番の字名

『上益城郡誌』には次のように記されている。

「秋津村計路川の北岸所謂無田中の一小字也。

該地方その他中無田村の屋敷跡何々の屋敷と唱ふ地あるより推すときは此地現今は無田地として到底屋敷とすることは能はざるも、或時は家宅

を構えしことありしを想像し得べし。

往時海底は変じて陸地となるや東部山中の諸川は無田の低部を貫流し従って貝原地方の住民は南進して其の川岸近く進み、加藤公入国して治水事業に熱中され木山川流域を北に、屋形川は南より当地方に引落し、西方江津に築堤し緑川を御船川に合わせたるより俄に氾濫の害を受くるに至り、一朝増水して此地方は忽ち湖観を呈し農民をして辛苦を水泡に帰せしむること往々あり。

殊に其の後川尻大麻塘の築工は惨禍を一層甚しからしむるに至り、全部屋敷を挙げて転居するに至れり。

中無田村の今の地に移りしは天和年間(一六八一〜一六八三)なりと言えは新村・東無田等の部落も相先後して転居し、慶長(一五九六〜一六一四)の頃迄は四五百年此の地に屋敷を有せしもの如し。

秋津村 三官氏塚 中無田村三藤氏の屋敷内にありしを百年前墓地に移す。中国では、「三官」は三男のことか。

三官屋敷は三男が管理していた中国貿易の支社的な屋敷か?

何れにしろ、江津塘築堤後の天和年間（一六八一〜一六八三）に集落こぞって移住した中無田の旧宅地であった。

十口屋敷（ふるやしき） 秋田の字番号 四二番の字名

中無田や東無田と相前後して集落こぞって移住した下無田（六嘉村の一部であった）の旧宅地跡で、名称で昔の名残りを水田の中にとどめている。転住先の集落を「新村又は上り（あがり）無田」と呼ばれていた。現在の秋津新町はこの「新村」に繋がる町名では。

計政路（けろ） 沼山津の字番号 四四番の字名

秋田の字番号 三八番の字名

数百年来荒れに荒れていた所を文化六・七年（一八〇九・一八一〇）に田開きがなされ、それを感謝して天保六年（一八三五）に中無田石塔水神が建立されているが、その碑文に「そもそも きよろ と申し来たり……」と記されている。

「きよろ きよろ」と川筋が雨の度に変わる、流路移動を行うところからきているのか。

笹垣場（いかだば）秋田の字番号 一一番の字名

直径二十センチ、長さ約三センチの丸太を五・六本のかづらで組み合わせ作ったものを筏と言っていた。明治の後期（一九〇〇〜一九一〇）頃までは、この筏を利用して、往来していたと伝えられており、当時の住民にとっては重要な水上の交通機関の一つでもあった。

筏は西無田集落の西側につけていたが、この筏のつく周辺の田んぼを筏のつく場所ということで「筏場」と名付けた。現在もその名は水田の一面に存在している。

屋敷田（やしきた）（別名一丁八反とも云う） 下沼山津の呼び名

中無田や下無田（新村）と相前後して集落こぞって転居した東無田の旧宅地跡で、名称で昔の名残りを水田の中にとどめている。

神日屋敷（又は宮屋敷） 西無田の呼び名

西無田の東北隅、現在の矢田氏方の東方、浮島熊野神社の神霊を分祀して西無田雨宮神社が創建された所。後年遷宮されて現在地に鎮座して

いることから、創建地を神屋敷又は宮屋敷と呼んでいる。

△云々所跡 上沼山津の呼び名

熊本藩では地方（じかた）の行政区画として郡と村の中間に手永が置かれ、手永の長を「惣庄屋」と云い、手永の役所を会所と称した。沼山津には、寛永十年から寛政十年（一六三三〜一七九八）まで、又天保十四年から明治三年（一八四三〜一八七〇）の廃止まで前後百九十三年沼山津手永の会所が置かれていた。明治三年会所廃止以降に呼び始めた呼び名であろう。

裏門・門前・仕事場 上沼山津の呼び名

会所の施設に關係するそれぞれの呼び名であろう。

上ノ土寸（かみのてら） 上沼山津の呼び名

上津代里の光輪寺のことを「沼山津の上の寺」と呼んでいた。

下ノ土寸（しものてら） 下沼山津の呼び名

下津代里の淨福寺のことを「沼山津の下の寺」と呼んでいた。

標ノ木（しめのき） 上沼山津の呼び名

沼山津と広崎境界付近を標ノ木と言っていた。

道祖神などの境界神を祀つたり、しめ縄を張って道切りをしたりするムラ人の意識の中のムラ境すなわち生活空間としてのムラの内と外の境界地名としてとりあげられている。（熊本の民俗地名ムラの内外―大塚正文）

託麻麻塘（現在の江津塘）

西無田集落より約千石西方地点に託麻塘（現在の江津塘）と呼ぶ堤防がある。この堤防は加藤清正が築いたもので、上益城郡と飽託郡との境界の塘ということから、当時の人々は託麻塘と呼んでいた。

御日見塚（通称鬼塚）

西無田集落の西方に御見塚（通称鬼塚）と言う小高い塚がある。

託麻塘（現在の江津塘）の堤防工事の際、その状況をこの鬼塚より清正公が眺望になったと云う伝説があつて今なおその名は人々の間で使われている。（語りべ学習会）

西無田の東北隅、現在の矢田氏方の東方、浮島熊野神社の神霊を分祀して西無田雨宮神社が創建された所。後年遷宮されて現在地に鎮座して

六ふるさと的人物

六・一 秋津小学校出身者

明治二十二年(一八八九)秋田・沼山津の二村が合併して秋津村となり、現在地に秋津小学校設立。発足以来百十年余、ここから輩出した人は数千を数えるであろうが、本校卒業生中から次の人々を紹介する。

氏名	卒業年度	主な経歴
彌富破磨雄	明治二十一年(一八八八)	昭和天皇傅育官・邦文学者 長男啓之助氏は 元人事院総裁
三善 信房	明治二十五年(一八九二)	衆議院議員・厚生政務次官
高橋 守雄	〃	滋賀・長野県知事 第七代熊本市長・熊本商科 大学学長・理事長
内山 隆道	明治二十九年(一八九六)	陸軍少将・終戦時 佐賀関 要塞司令官
吉本 聖一	明治三十一年(一八九八)	秋津村産業組合設立初代組 合長・第九代秋津村長

正公が眺望になったと云う伝説があつて今なおその名は人々の間で使われている。
(語りべ学習会)

志内 ヒデ	明治三十一年(一八九八)	県立第一高女高等科教諭・ 熊本女専教授
富島 末雄	明治三十三年(一九〇〇)	戦前の熊本市小学校長会 長・第十三代秋津村長
彌富秀次郎	明治四十四年(一九一一)	営林署長・熊本木炭事務所 長・元横井小楠木顕彰会 長
杉田 博	大正 三年(一九一四)	医学博士・杉田小児科病院 長
上田案山子	〃	熊工電気科長・熊本市立 工業学校校長・熊本県科学 研究所所長・熊本工大教授
光岡 均	大正 四年(一九一五)	陸軍中佐
彌富 忠夫	大正 六年(一九一七)	農学博士 大分短期大学学長
浄住 勤護	大正 八年(一九一九)	熊本女子大学教授(英文学)

氏名	卒業年度	主な経歴
浄住 端雄	大正 十年（一九二二）	熊本大学医学部名誉教授
内田 芳朗	昭和 六年（一九三一）	元参議院議員・竹中組役員
中山ミエ子	昭和 十一年（一九三六）	第七代熊本県農協婦人部 協議会会長
藤山 増美	昭和 十四年（一九三九）	熊本市会議員・ 第三〇代熊本市会議長
上田 楠生	〃	地元で内科小児科医院・ 熊本保健所長・医学博士
菊岡 実	昭和 十五年（一九四〇）	向陽台病院副院長 (旧姓栄田)
永田 虔二	昭和二十九年（一九五四）	永田病院院長
三藤 省二	昭和三十九年（一九六四）	弁護士
彌富 親秀	昭和四十二年（一九六七）	熊本整形外科病院 脳外科部長

熊本市発展の基礎をつくった吉岡橋桐守雄

熊本市役所近くの坪井川沿いの公園を、高橋公園といいます。熊本市名誉市民の一人である第七代の熊本市長 高橋守雄の名前から付けられたものです。

では、公園の名前になっている高橋守雄とはどんな市長だったのでしょうか。そして、どんなことをした人物だったのでしょうか。

「二十八年事業」の成功

守雄は、明治十六年（一八八三）に上益城郡矢部町に生まれ、秋津小学校を明治二十五年（一九〇二）に卒業しました。大学を卒業して、東京で警視庁の役人になり、大正十二年（一九二三）に三九才という若さで熊本市長になりました。

今でも高橋守雄市長といえば、大正の「三大事業」で有名な市長と言われます。

では、「三大事業」とは何でしょうか。

それは、「熊本市営の電車を走らせたこと」「各家庭に水道を引いたこと」「市の真ん中にあった軍隊を別の場所に移したこと」です。

実は、熊本市が「大熊本市」として発展したのは、この三大事業を完成させたことによるといわれています。

守雄が市長になる前の熊本市は、周りの町や村といっしょになって、これから大きく生まれ変わろうとしているときでした。

大熊本市

大正十年（一九二一）六月一日、熊本市と飽託郡の黒髪・池田・花園・島崎・横手・古町・本山・本荘・春竹・大江の各村及び春日町の一一町村が合併して「大熊本市」が誕生した。

市長になった守雄は、さっそく市民生活の安定と向上のため、三大事業の仕事に全力で取り組み、次の年の大正十三年（一九二四）に見事にやりとげたのでした。

その他にも、守雄は鉄筋三階建ての熊本市役所を完成させ、水前寺競技場の建設にも取りかかりました。

市長としてわずか三年半の間に、これだけの仕事をやりとげた守雄は、熊本市発展の基礎をつくった生みの親といわれています。

熊本市が電車を走りさせる

みなさんは、熊本市営の路面電車がいつごろ出来たか知っていますか。今のような市営の電車が走り始めたのは、大正十三年（一九二四）の八月一日からです。

それまでは、熊本市内を軽便鉄道が走り、一部では電車も走っていました。しかし、経営がむずかしい会社もでてきました。

そこで、市民の間から「ぜひ、市のほうで電車を走らせてほしい。」という願いが出てきました。

守雄は、都市づくりのためには、市民の生活が便利になることが一番だと考えて、路面電車を市営の事業として経営することに決めました。

はじめは、「熊本駅〜浄行寺」間と「水道町〜水前寺」間だけを走らせました。

白川を渡る電車のために新しくつくられたのが、今の大甲橋です。工事の記録では、「はば八間（約一四・四桁）、長さ四十間（約七二桁）の鉄筋コンクリートづくり、費用は十万三十円（当時・今のお金のねうちに直すと、約二億円位に当たる）」だったそうです。

十五台でスタートした電車は、待ち望んでいた市民に大歓迎され、たいへん人気でした。満員で乗れない客も多かったため、「お急ぎの方はどうぞお歩き下さい」が、はやり言葉になったほどでした。

その結果、すぐにまた新しく三台の電車が走るようになったそうです。

しかし、すべてがよいことばかりではありませんでした。電車の登場によって、人力車を引く人の仕事がなくなったのです。

そこで、守雄は市議会と相談して、人力車を引く人たちへ、市からお金を出すことに決めました。仕事がなくなった人たちを助けるために、お金を出したことは、全国的にも例がありませんでした。

このような守雄の努力によって誕生した市電は、熊本市のシンボルとして、現在まで走り続けているのです。

上水道ができる

「水の都」とよばれる熊本市には、昔から多くの地下水がありました。しかし、明治四十五年（一九一二）ごろは、熊本市内七―三五戸の井戸のうち飲料水として使えるものは、全体の約六五パーセントだけでした。

そのうえ、下水道も整っていませんでしたので、市民から「ぜひとも、早く市全体に水道を整えてほしい。」という声があがりました。しかし、多くのお金がかかることや、水が足りなくなることとを心配する農民の反対運動があつて、そのままになっていました。

そこで、守雄は水道の建設は、都市に住む市民のためには欠かせない仕事であると考えました。そして、八景水谷に井戸をほってくみ上げた水を、一度立田山にポンプで上げて流すという方法を提案しました。

この方法が市民にも受け入れられ、長い間市民が望んでいた水道の計画が、ようやく進められることになりました。

大正十三年（一九二四）一月、水道が完成し、通水式が行われました。これで、市民は安心して水を飲めるようになり、病気も減って、豊かな生活ができるようになりました。

教育者として活躍

熊本市長をやめた守雄は、国の役人にもどりました。

そして戦後は、昭和二十一年（一九四六）に熊本語学専門学校の校長となり、熊本の私立学校の教育に当たりました。

あるとき、守雄はこれまでの専門学校を短期大学にするために、東京の役所を駆けまわっていました。

その途中、すりにあわなないようにわざわざ混雑していない電車を選んで乗ったのですが、何度もすられてしまいました。

「警察官だった人が、すりにあうなんて……」と、周りの人たちも不思議がりました。

そのときの守雄は、すりにも気付かないほど熱心に、短期大学のことを考えていたのでしょう。

「誠意と努力で」というのが、守雄のモットーでした。このような守雄の働きかけによって、熊本語学専門学校は、熊本短期大学になりました。

昭和二十七年（一九五二）には、立田山にあった校舎を大江に移し、昭和二十九年（一九五四）には、熊本商科大学をつくって、学長・理事長として教育や経営に当たりました。

守雄の人がらを知る手がかりとして、他にもこんなエピソードが残っています。

昭和二十八年（一九五三）の「六・二六水害」のとき、子飼や渡鹿付近で七三世帯（二九三人）が住む家を流されてこまっていました。そこで守雄は、住民を大学の校舎に避難させて世話をしました。

にぎりめしを配って歩き、衣類をおくったり、週に一度は校内で映画を上映したりもしました。

このような数々の人間味あふれる行動力で、市民のため生涯をつくした守雄でした。守雄が市長のときにできた市役所の玄関は、最初に紹介した

高橋公園に、今でも大切に保存されています。

（熊本市教育委員会発行 郷土読本 ふるさとくまもとの人々）

甲斐宗運親直	天文一〇年（一五四一）頃御船城主に。永録八年（一五六五）竹宮鷺（現中無田吉住氏宅）に城を築き、一族の甲斐正運を居城せしめた。天正一三年（一五八五）に死去。
甲斐飛驒守正運	鷺城に居城し、永録八年（一五六五）黄鳥山法光寺（現鷺観音）を建立する。
洞春和尚	御船辺田見の黄海山東禅寺の住職。
木山備後守惟久	甲斐飛驒守正運の招きで黄鳥山法光寺の開基となり、両寺を兼職して、十一面観世音菩薩・甲斐宗運の像を自刻し仏殿に安置する。
島崎半兵衛尉 正徑	天正年間（一五七三〜一五九一）の木山城主で有名な連歌師。元龜二年（一五七二）に浄福寺を再興する。
島崎久兵衛正隆	文禄・慶長の役で加藤清正朝鮮出兵の際、船頭かしらとして従軍。帰国の途中船に付着した奇木を持ち帰る。後年その奇木で西無田雨宮神社の御神体となるゆやろさき（由屋浮木）を刻み祭祀される。西無田島崎家の祖と云われる人。

八重桜新左衛門	寛政初期の中無田村の庄屋で、長さ四百二十二間幅五間・深さ五尺の新たな堀を掘削した。その恩恵を蒙る田地二十町歩、村民歓喜して「しんじゃ堀(新左衛門堀)」と呼んでその偉業を讃えていた。寛政一〇年(一七九八)八月十日に死去。
秀海	熊本西光寺の法弟。慶長一八年(一六一三)一代僧業の許可を得る。浄福寺が天台宗を改宗、浄土真宗に帰依した初代
慈観	天正年間(一五七三〜一五九一)の兵乱に罹り、堂宇等すべて消失した時の浄福寺(天台宗)の住職。仏像のみ土中に埋め置き、その後三代目の観清と一小堂を建立して本尊を安置した。
明義	熊本順正寺の法弟。明歴三年(一六五七)一代僧業の許可を得る。その後法榮まで十一代願い続けたので世襲となった。(現在の光輪寺)
山田入道正信	年代は明らかではないが、光輪寺の開基と言われている。
原田彌右衛門	加藤清正の家臣。文録六年(一六〇一)沼山津村の内四百石が宛行われている。

富島末雄	熊本市との合併を推進した秋津村最後の村長。(第十三代、昭和二十二年〜昭和二十九年) 先人の努力の概略でも後世の人に残しておきたいとの思いから、公務の激務のかたわら、「秋津村略史」を執筆。昭和二十九年九月三十日熊本市の合併記念として秋津村全戸に贈られた。
古賀喜三太	沼山津・下津代里の稲荷社の木造女神座像を入れた木箱の右側面に「明治十四年二月吉祥日 沼山津神社祀掌 古賀喜三太藤原辰臣」と墨書している。 古賀喜三太の籍は、秋田村五四番地(西無田)で明治初年頃より、沼山津神社・中無田神社・西無田神社の祀掌。後神官となり、金峯山周辺の神社数社を受け持っていてその氏子から尊敬されていたそうである。
河瀬典次	十九代沼山津手永惣庄屋(一八四五〜一八五九)河瀬安兵衛兵の嗣子、横井小楠の弟子。 嘉永年間(一八四八〜一八五三)に裏井手を掘削した。夫人さだ子は横井小楠夫人つせ子の妹。
荒木萬蔵	墓は中無田の間島橋近くの県道沿いにある。 上益城郡会所役人。萬蔵堀は文化年間(一八〇四〜一八一七)に、この人の手によって掘削されたもので萬蔵井手とも呼ばれている。

後浪人。寛永十三年(一六三六)沼山津郷間島に転住し漁業及び開拓に従事し、慶長の役の帰路父

沼山津手永惣庄屋

沼山津手永の惣庄屋は、寛永十年（一六三三）から寛政十年（一七九八）までの一六八年間・九代は光永氏の世襲であった。しかし沼山津手永の惣庄屋の任命の仕組みは、寛政十年（一七九八）をもって大きく変わる。即ち、光永氏の世襲から交代制へと転換したのである。

こうした世襲惣庄屋の交代劇は沼山津手永だけに起こったのではない。領内全般をみても元禄期（一六八八〜一七〇三）から惣庄屋の新任・配置替えがみられるようになる。そして享保（一七一六〜一七三五）から宝暦期（一七五一〜一七六三）にかけて、従来の在地有力者による世襲の惣庄屋にかわり、一領一疋クラスから惣庄屋が登用され、三〜五年のサイクルで配置替えされるようになった。

代	名	前	期	間	備考
初代	沼山津（光永）四兵衛	惟重	一六三三 寛永一〇年 五月	一六五一 慶安 四年 五月一三日	病死
二代	〃	惟泰	一六五一 慶安 四年 六月	一六六六 寛文 六年 二月二四日	〃
三代	〃	惟行	一六六六 寛文 六年 二月	一六七一 寛文一一年 五月二日	〃
四代	〃	惟信	一六七一 寛文一一年 五月	一六九六 元禄 九年二月	免
五代	〃	惟直	一六九六 元禄 九年二月	一七一九 享保 四年 三月一六日	病死
六代	〃	惟直	一七一九 享保 四年 三月	一七四三 寛保 三年二月二六日	〃
七代	〃	惟晴	一七四四 延享 一年 三月	一七四九 寛延 二年二月五日	〃
八代	〃 七助	惟武	一七五〇 寛延 三年 二月	一七八八 天明 八年 四月	免
九代	沼山津（光永）四兵衛	惟明	一七八八 天明 八年 四月	一七九八 寛政一〇年 一月	高森へ（不着任、六月免
一〇代	小堀宇右衛門		一七九八 寛政一〇年 一月	一八〇七 文化 四年 八月九日	高森から・免
一一代	田上 格次		一八〇七 文化 四年二月	一八〇九 文化 六年	病死
一二代	間部忠右門		一八〇九 文化 六年二月	一八一 文化 八年二月九日	鯨と併勤
一三代	園田養助		一八一 文化 八年二月	一八三 文化一〇年 六月二七日	

一四代	園田健助		一八一三	文化一〇年六月	一八二七	文政一〇年五月二四日
一五代	多田隈淳藏		一八二七	文政一〇年五月	一八二九	文政一二年一月二四日
一六代	緒方伝内		一八二九	文政一二年一月	一八三七	天保八年四月二二日
一七代	光永熊助	惟資	一八三八	天保八年五月	一八四五	弘化二年六月二七日
一八代	下山群次	惟之	一八四五	弘化二年七月	一八四五	弘化二年二月
一九代	河瀬安兵衛		一八四五	弘化二年二月	一八五九	安政六年四月一九日
二〇代	光永四兵衛	惟資	一八五九	安政六年四月	一八六五	慶応一年六月
二一代	丸山平左衛門		一八六五	慶応一年六月	一八六七	慶応三年一〇月六日
二二代	井上甚之助	信治	一八六七	慶応三年一〇月	一八七〇	明治三年七月五日

(肥後読史総覧 上・下巻)

(98) 秋津村道路元標跡

所在地 秋津村大字沼山津字下津代里一五二五番地 役場前
(現 沼山津二丁目一四番?号 秋津校区二町内公民館前)

会所の所在地で、沼山津手永の行政の中心であった、「上津代里から中津代里・下津代里」と東西に走る古くからの道路沿いの秋津村役場前に『秋津村道路元標』が設置されていた。

この秋津村道路元標は、大正の道路法によって、「大字沼山津字下津代里一五二五番地先」に設置されたもので、文字通り秋津村における道路の基準点を示す標石であった。

道路元標は、江戸時代街道網から引き継いだ明治時代の道路網から脱皮し、近代道路網を推し進めた大正プロジェクトの独特の制度とも云われている。秋津村道路元標の設置は、標石の角をとるとの様式が公布された大正十一年(1922)八月以降と考えられる。

道路元標は、二十五センチ×二十五センチ×六十センチの角柱で、正面に「道路元標」、左側面に「上益城郡秋津村」と刻まれていた。

秋津村とは、明治二十二年(1889)から昭和二十九年(1954)までの村名。明治二十二年の四月を期して町村の大合併が行われ、沼山津村と秋田村が合併して「秋津村」が誕生した。村名は、秋田の「秋」と沼山津の「津」をとり、日本の古名「あきつしま」になぞらえて命名されたという。

村役場は、沼山津字下津代里におかれ、熊本市に合併するまで村行政の中心であった。昭和二十九年(1954)十月一日、熊本市へ合併編入され、「熊本市秋津町」となり、秋津村は閉村した。

旧村名を留めている道路元標跡は、歴史の生き証人とも云える。大正時代のプロジェクトの遺産として大切に保存していきたいものです。

ちなみに『熊本市道路元標』は、大正十三年(1924)二月に設置され、白川公園内(三号線側)にある。

1430

(中村安幸 提供)

参考文献

- 熊本市東部地区文化財調査報告書 (熊本市教育委員会)
秋津村略史 (秋津村 富島末雄)
秋津小学校百周年記念誌「秋津の歴史」 (秋津小学校)
圃場整備事業完成記念 「豊穰」 (秋津飯野土地改良区)
郷土読本 ゆめの実現を ふるさと くまもとの人々 (熊本市教育委員会)
新熊本市史別編 第2巻 (熊本市)
角川日本地名大辞典 43 熊本県
肥後読史総覧 上・下巻
熊本県歴史の道調査
益城町教育委員会 猫伏石案内板
川尻町史
健軍三菱物語 熊本は東へ
熊本不思議辞典

監修 講師 松野 国策

受講生 熊本市66万市民総郷土史家運動

地域かたりべ学習会 (秋津・健軍地区)

小田 邦秀 (秋津 校区)

田村 光夫 (桜木 校区)

岡本 勝恵 (泉ヶ丘校区)

中村 安幸 (託麻南校区)

編集・ワープロ入力

中村 安幸 (託麻南校区)

平成14年3月